

ENCOUNTER

出会いの広場 No.25 2003.11

岩村 聡・野島一彦 責任編集

 本号の主な内容

■特集1・ENCOUNTER 出会いの広場 25巻の軌跡

- 特集の趣旨 岩村 聡
 「ENCOUNTER 出会いの広場」の18年間と今後への期待 畠瀬 稔
 「ENCOUNTER 出会いの広場」15年の軌跡と発行に携わった私 小柳 晴生
 「エンカウンター・グループのホリスティック構造」と私 大須賀克己
 「ENCOUNTER 出会いの広場」への思い 福井 康之
 日本グループ紀行・あの頃 '89~90 鈴木 聖幸
 エンカウンター・グループ・ムーブメントの今後の方向 岩村 聡
 ■本のこと、思い出す人のこと 木村 易

■特集2・グループ・アプローチ、新しい展開の芽

- 特集にあたって 野島 一彦
 師匠から学ぶ — パーソン・センタード・アプローチという出会いの広場で—
 坂中 正義
 グループに出会って、今を楽しんでいる 金 奎卓
 小学校におけるベーシック・エンカウンター・グループの適用 森 利伸
 思春期・青年期のエンカウンター・グループに私が思うこと 本山 智敬
 私とグループの関わりを振り返って 妹尾奈津子
 エンカウンター・グループと私 安田 一聡
 病院でグループアプローチを行って行く上で思ったこと — 当事者の力—
 常田 修一
 私の考えるエンカウンター・グループの新しい展開のための“種” 鎌田 道彦

■ ENCOUNTER 出会いの広場 主要記事目次

(岩村)

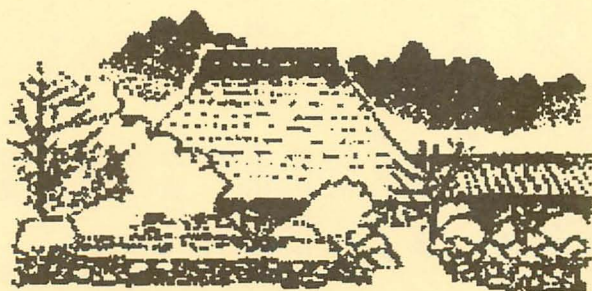
■お知らせ・情報・あれこれ

ENCOUNTER

出会いの広場

No.25

目次



■特集1・ENCOUNTER出会いの広場 二十五巻の軌跡
特集の趣旨

「ENCOUNTER出会いの広場」の18年間と今後への期待

岩村 聡

「ENCOUNTER出会いの広場」15年の軌跡と発行に携わった私

畠瀬 稔

「エンカウンター・グループのホリスティック構造」と私

小柳 晴生

「ENCOUNTER出会いの広場」への思い

大須賀克己

日本グループ紀行・あの頃⁸⁹〜⁹⁰

福井 康之

エンカウンター・グループ・ムーブメントの今後の方向

鈴木 聖幸

■本のこと、思い出す人のこと

岩村 聡

■特集2・グループ・アプローチ、新しい展開の芽

木村 易

■特集にあたって

野島 一彦

■師匠から学ぶ

坂中 正義

グループに出会って、今を楽しんでいる

金 奎卓

小学校におけるベシシク・エンカウンター・グループの適用

森 利伸

思春期・青年期のエンカウンター・グループに私が思うこと

本山 智敬

私とグループの関わりを振り返って

妹尾奈津子

エンカウンター・グループと私

安田 一聡

病院でグループアプローチを行って行く上で思ったこと

——当事者の力——

常田 修一

私の考えるエンカウンター・グループの新しい展開のための“種”

鎌田 道彦

ENCOUNTER出会いの広場 主要記事目次

(岩村)

おしらせ・情報・あれこれ

73 66 63 59 56 53 50 44 40 34 33 30 25 23 21 18 7 2 1

特集1

ENCOUNTER 出会いの広場 二十五巻の軌跡

特集の趣旨

岩村 聡

この雑誌、私達人間関係研究会の「ENCOUNTER 出会いの広場」は、一九八五年から約十八年間にわたって発行されてきましたが、その編集発行を、奥さんのご協力も得て、熱心に担当してくださった小柳晴生先生も最近会を退かれ、この雑誌も一つの曲がり角を迎えているように思われます。

そこで、この雑誌の今号までの流れをふり返る特集を組んで、この雑誌のはたしてきた役割などを見直し、この雑誌の発行を支えてこられた方々の労もねぎらいたく思いました。

この特集の原稿は、小柳先生自身など五人の方からいただくことができました。

島瀬稔先生の原稿は、伝え聞いていたこの雑誌の創刊のいきさつから、欠かせないと思っていました。ご多忙のため、いったんはお断りされたのですが、再度ご無理を言って、執筆していただくことができませんでした。

島瀬先生は、(村山正治ほか編)「エンカウンター・グループ

プから学ぶ」の中の「人間関係研究会二十年の歩みと課題」に、「この雑誌が今後どのように発展し、成長してゆくか、本会の軌跡が大きく残るとすれば、そのひとつはこの雑誌の成長に表現されるのではないか、と私は個人的に考えています。」と書いておられます。「軌跡」というタイトルは、必ずしも、この文章からいただいたつもりではなかったのですが、私の記憶のどこかに残っていたのかも知れません。

私も拙文をつけ加えさせていただきました。私は、「ENCOUNTER 出会いの広場」が、人間関係研究会や、日本のエンカウンター・グループ活動を支え発展させてきた功績は、大変大きいと思っています。そのエンカウンター・グループ活動は、一つの隆盛の時期を終えて、いまは低迷の時期を迎えているかに見えます。しかし、エンカウンター・グループによって一つの表現形を得ていた「人間尊重の運動」は、時代の流れの中で安易に消失させてよいものではありません。冬の季節を耐え抜くような強い、そして春を呼ぶような新しい発展の動きを期待したいものだと思っています。

●『ENCOUNTER出会いの広場』の18年間と今後への期待

畠 瀬 稔

『ENCOUNTER出会いの広場』は、一九八五年六月のNo 1から本号No 25まで十八年間にわたって発行されてきた。

この雑誌をここまでたゆまず継続的に発行してきたのは、ひとえに小柳晴生・欣子夫妻の並々ならぬ努力があったからだと思う。

この雑誌発行の記憶をたどりながら、私なりの感想を書いておき、今後この雑誌をどう発展させてゆくか、ここで終止符をうつのか、ひとつの問題提起をしようと思う。

当時お元気でいられた下迫和子さんが、かねてより広島地区での人間関係研究会の後継者を育てたいと、小柳晴生さんをスタッフに加えるよう熱心に要請されていた。それが承認されて、恒例の一年一回のスタッフ・ミーティングが下迫さんの世話で広島で開催された一九八四年十二月のこと、小柳さんは始めてこのミーティングに参加された。

人間関係研究会が一九七〇年に発足した当初から、ニュースレターの必要性を皆が感じていた。ワークショップ参加者の感想の共

有と交換、国内・国外の情報提供、研究会からのお知らせなどの媒体はぜひ必要であった。それで、一九七一年より一年に二号ずつ、初めは定期的、やがては飛び飛びに、何人かの編集者が交代しながら、一九七七年のNo 13までつづき、以後しばらく途絶えていた。たしか広島でのスタッフ・ミーティングの休憩時だったと思う。舗装された幅ひろい道路の上を（これははっきりと覚えているのだが、川のほとりであったかどうかははっきりしない）散策している時、私が一番後尾を歩んでいた小柳さんをお願いしてみた。「ニュースレターを担当してくれないだろうか？」と。この厄介な仕事はみんな敬遠してきたので、そうすんなりとはひき受けてくれないだろうと思っていたところ、意外にも彼がひきうけてくれたのである。

そのあとに続いたミーティングで、従来の「ニュースレター」の名称をやめ、『ENCOUNTER出会いの広場』とすることが決まった。そして彼が思うように編集できるよう自由裁量に任せたと

当時、小柳さんは広島大学保健管理センターに勤務されていたが、すぐ翌年には香川大学保健管理センターに異動された。広島での人間関係研究会の継続・発展をひきついで欲しいという下迫さんの願いは果たされなかったが、小柳さんはこの雑誌の編集・発行を通して人間関係研究会全体の発展に大きく貢献してくれたのである。

最初の1、2号は、題名こそ「ENCOUNTER出会いの広場」となったが、従来のニュースレターの形式と内容を踏襲したものであった。表紙なしの白い用紙で、横書、左右二段組、十頁内外。ただ誌名が変わっただけである。内容は、ワークショップの感想、ワークショップ中に聞いた「心に残ることば」、海外、国内の関連情報などである。印刷は、高松市の溝渕印刷。

次のNo3（一九八六年）から有料とし、高松市アート印刷。No4（同年）は、高松市美巧社。以後ずっと美巧社であった。高松での印刷は他市と比べて廉価で、印刷技術も高度であることが感じられた。印刷ほど地方毎による違いの大きいものはない、というのが当時から私の感想である。

一九八七年二月四日、カール・ロジャーズが亡くなったので、No5はその追悼号を出そうということになった。研究会の全スタッフが協力してくれた。私もこの号には可成りの時間とエネルギーを注いだ。カールの長女、ナタリー・ロジャーズにもカールの最後の状況についての寄稿をお願いした。日本の先達、伊東博、佐治守夫、柘植明子、都留春夫など、今は亡き諸先生方にも寄稿を依頼した。疎遠になっていた友田不二男先生には、大須賀発蔵さんから依頼して貰った。一九八三年のカール&ナタリー来日ワークショップの三年後だったので、多くの参加者から写真資料や色んな思い出を寄せてもらうことができた。ロジャーズの著書、紹介書の出版社である岩崎学術出版社、日本精神技術研究所、創元社、有斐閣から広告を貰った。この追悼号は各国に先がけて出したものとして、よく出来

たと思っている。これも「ENCOUNTER出会いの広場」があったおかげである。これを契機として、この雑誌は安定、継続へと進んでいったのではなかったか。

この時の表紙のしずい色に始まり、以後各号の表紙は小柳さん独自の工夫があった。各号とも色彩がちがう。独特の魅力をもつ表紙の選択は芸術家肌である。特集の組み方、内容の割付も一工夫してある。

この稿を書くために古い資料を探していたら、小柳さんはNo4を出した後、この雑誌の編集者を辞退したいと申し出ておられたのである。一九八六年十二月二十七日付けで、一九八七年恒例正月スタッフ・ミーティングへの提案として、「担当者の交代を強く希望します」という一文が出されていたのである。彼が担当した時は無料のニュースレターの性格のものであったのが、有料化され、責任も仕事も格段に増えていたのである。彼はそれに耐えられなくなっていたのである。その時は、スタッフ全員が協力するということで慰留され、その後もひき続き彼の担当が続いていた。そして、前述した通り一九八七年二月四日のロジャーズの死、そしてNo5の発行と、多分負担にあえぎながらも氣をとり直し、できるだけのこととをやるという気になってくれたのではないかと、勝手な推測をしていた。時折の彼との接触で、小柳さん自身がこの編集に喜びを見出していたのではないかとも思う言葉が私の耳に残っている。

「原稿が集まった段階でどのように編集するか考えるのも楽しい」「どんな書き方でもよい。筆者に合わせて編集を考える」といった言葉などである。編集スタイルといい、表紙の芸術性といい、小柳さんはほんとうに雑誌づくりが好きなんだと思っていた。私は私なりに彼の努力を支えるために、毎号50部は必ず販売するように努力してきた。

このようにして、八五年（No1）から九四年（No19）までは一年

二号発行のペースが守られ、九五年（No20号）、九六年（21号）、九八年（22号）と発行ペースが落ちてゆき、二〇〇〇年（23号）、〇一年（24号）で彼の担当は最終となった。小柳さん自身が何ものにも制約されずに生きるために（と私は受けとっている）編集局担当を終了され、人間関係研究会からも退会され、雑誌の在庫管理は九州大学の野島一彦さんにひきつがれた。

今までの二十四冊を眺めてみて、これは貴重な資料だと思う。エンカウンター・グループへの参加の感想、日本グループ紀行、出会い百選などの連載もの、インタビュー記事、小柳晴生・欣子夫妻の夫婦対談もある。国際学会参加の印象記、国内学会の動き、出版・翻訳の紹介などアカデミックな情報や論説と、一般参加者のワークショップ体験記までの幅があり、単なる専門誌に偏らず、一般に開かれたものとしてユニークである。

執筆者も多彩である。ワークショップ参加者はもとより、新進気鋭の研究者あり、あらためて見直していると、その後他の専門分野で著名人となっている人もいて、こんな人まで本誌に寄稿してくれていたのかと驚かされる。編集者の努力は並大抵ではなかったであろう。その結果として、一号ずつがまさに「出会いの広場」になっていた。

人間関係研究会の三〇周年記念出版、伊藤義美他編『パーソンセンタード・アプローチ―21世紀の人間関係を拓く―』ナカニシヤ、一九九九年発行は、二〇〇二年に二刷目が増刷された。一刷目が二〇〇〇部、二刷目が五百部であった。『ENCOUNTER出会いの広場』は、ロジャーズ追悼号のNo5は二〇〇〇部、他は大体一〇〇〇部の発行であった。残部があるので、正しい比較はむづかしいが出版社によって発行されたものは読者への流通がよいらしい。これ

だけを見ると、モチはモチ屋に任した方がよいという考えもよぎる。そうになると、今のような一号六百円の売価では行かなくなる。また、このようなりスクの高い雑誌をひき受けてくれる出版社があるかどうか疑問である。恐らく自費出版として相当な負担を覚悟しなくてはなるまい。

本稿を書きながら、このままで終刊にするのは残念だという思いが湧いてきている。実は最初この原稿を依頼された時、期限を過ぎた翻訳の仕事と、毎日の課題にあえいでいたためにお断りの葉書きを書いたところ、電話インタビューをしたいと申し出られた。そこまで言われるならばと本務を遅らせてこの原稿にとり組んだ。考えていくうちにこの雑誌の重要性をあらためて認識し始め、再生への次のような問題提起をしておきたくなった。

一、エンカウンター・グループやパーソンセンタード・アプローチの理念と実践は、この二十一世紀にこそ大きな貢献が期待されるものであり、積極的に意見の発信、情報の交流、実践の試みと成果などを提供してゆくNGO的な活動の拠りどころとならないであろうか。この『出会いの広場』はその重要な媒体となるのではないか。

二、対立する勢力がどのような相互理解と和解ができるのか、もう一段高い次元での総合的解決はできないものか。ロジャーズたちの数多くの実践はその可能性を示してくれているが、一般にはまだ殆ど知られていない。毎日のニュース報道は、武力による解決、政治的かけひき、権力をもつ者の一方的押しつけと、それに反撥するテログループ。武力や脅しによらない真の話し合いをめざす実践の方向は殆ど見えない。ロジャーズとバット・ライスの北アイルランド紛争における対立するカトリックとプロテスタント双方のエンカウンター・グループのビデオに基づく『鋼鉄のシャッター』の博士論文（パット・ライス著、島瀬稔・東口千津子訳、コスモスライブ

ラリー、近刊予定)を訳出しながら、このエンカウンター・グループが幾多の危険をのりこえながら、草の根的な、下からの数多くの相対立する諸勢力の相互理解への動きを進めたことをあらためて思い知った。これは、武力の行使しか考えられていない現状を見ると、真の解決への曙光を見る思いである。上からの力による解決は、必ず下からのテロによる復讐の下地をつくる。真の解決は、下からの解決の下地と、上からの政治的解決の統合によらねばならないと思う。

三、国内を見る時、各地に根強い「差別」の問題がある。また、殆んどどの組織にはトップ、経営者、管理者と一般社員、職員との間に大きな断層を見る。学校にはいじめがはびこっている。家庭内には、ひきこもり、家庭内暴力、家族崩壊……と我々の目前には解決へ向けていささかの援助でも待望している課題が山積みしている。このような課題解決へ向けてのグループを発展させたり、レポートし、討論し合う『出会いの広場』が求められているのではないか。従来の「エンカウンター・グループ」の枠から出てゆく必要があると強く思う。

四、編集、発行、販売も一新する必要があるか。小柳さん中心に任せ、依存してきたことを反省する。この際、どのような編集、発行・販売組織を作るのが適切であるのかをこの機会に根本的に考えるべきであろう。

小柳さんから提出された資料(人間関係研スタッフ・ミーティング二〇〇一年一月七日)によると、定期購読者はNo14の「看護」特集の一五九部を最高に、各号一三〇〜一五〇を推移していた。もし、社会的ニーズに合致すれば、定期購読者数はずっとふえるのではないか。

編集委員も、販売方法に関しても、研究会スタッフ以外に関心をもって頂ける協力者(サポーター)を得て、もっと強化する道を模

索する道も考えられないか。エンカウンター・グループ参加者、その理解者を中心に、誌上での対話可能な双方向雑誌に育てられないだろうか。これこそエンカウンター・グループの社会的発展への道を開くものではないか。

この稿を終わるに当り、『出会いの広場』No1(一九八五年六月発行)に掲載された「心に残ることば」欄に次のような感動的な詩が掲載されているのを再録させて頂く。これは現在の読者には殆んど知られていないであろう。もし『出会いの広場』が存続するならば、このようなすぐれた書き手が必ず登場してくるにちがいないと信ずるからである。(最初の掲載時は横書きであり、グループ参加中に書いた日記を詩の形にかえたものという注記がある。)

個性への内なる旅

辰己和雄

今ある自分から出発せよ

人は個性的にしか生きられないのだから
今ある自分は 今ある他者とは違うのだ

何もかも違うのだ

生きてきた歴史が違う

プロセスが違う

そこに何らかの差があるとしても
それは仕方のないことだ

その差こそ 個性なのだ

評価やら 上下の問題ではなくて
重い重いその人の

人生の歴史の結果なのだ
その重さにこそ 尊さがある
その尊さを認めよ 受け容れよ

ユニークな個人たる自分に目覚めたとき
どんな他者からの評価も怖くない

最も恐ろしくて危険なことは
自分を偽ることだ

本当にしたいこと

本心からそうありたいと願うこと

胸の奥に確かに依存する

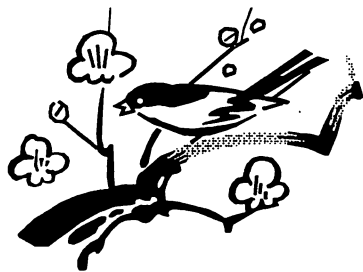
自分のこの願いに

どこまで忠実でありえるか

それが最も大切なことだ

一九八四年二月一三日

はたせ みのる
● KNC 関西人間関係研究センター



●「ENCOUNTER出合いの広場」15年の軌跡と発行に携わった私

小柳晴生

I. 「ENCOUNTER出合いの広場」の軌跡

一・創刊から4号まで

私が人間関係研究会のスタッフとして入会したのは、一九八三（昭和五八）年十二月、広島でのスタッフ・ミーティングからであった。このミーティングで、人間関係研究会として機関紙を発行することが検討された。私は、元来軽率なところがあるので何とかなるだろうという気持ちで、編集担当を自発的に引き受けた。まだ三三歳とエネルギーもあり、香川に移ったばかりで相談も少なく時間的に余裕もあった。

1号が刊行されたのは一九八五（昭和五九）年六月であった。創刊号と2号はニュースレター形式の十数頁のもので、年間2回の発行、発行部数は二〇〇部、郵送料のみで無料頒布とした。費用は人間関係研究会からの補助によった。今から見ればごく薄いパンフレット程度のものだが、初めての仕事でそれなりに大変な思いをし

た。創刊時から原稿の割付けや校正など編集の実務のかなりは、妻の欣子に担当してもらった。

一九八六（昭和六〇）年度のスタッフ・ミーティングで、無料頒布では継続するのに無理があるという意見が出され、機関紙から本格的な機関「誌」にして有料化し、ゆくゆくは独立採算で維持できることを目指すことに決定した。価格は単品で五〇〇円、定期購読は送料込みで年間一、〇〇〇円、発行部数は五〇〇部とした。3号の時点で定期購読者数は八三名、4号では九六名であった。その後の定期購読者数は、一四〇名から一六〇名を前後し、23号時点では一四一名であった。

この年度に3号、4号を発刊することができた。厚さも三〇〜四〇頁ほどになり、巻頭論文、若手の研究を紹介する「研究ノート」、グループ参加者や読者の投稿を中心とした「メッセージ・私の声」、エンカウンター・グループに関する国内外の情報を知らせる「おしらせ・情報・あれこれ」といった、その後の構成の原形ができあがった。3号からは毎回、団士郎さんに表紙のイラストを描いてい

ただくことになった。畠瀬直子さんから「出会い百選」という連載の第一回をいただき、安定した誌面づくりに貢献していただいた。この連載は20号まで15回続いた。

二・5号「ロジャーズ追悼号」

この雑誌が飛躍的に発展する機会になったのは、5号としてロジャーズ追悼号を特集したことである。C・ロジャーズは、一九八七（昭和六一）年二月四日、八五歳でその生涯を閉じた。急遽追悼号を特集することになり、畠瀬稔、谷口正巳さんはじめスタッフのご尽力で、ロジャーズのご令嬢のナタリーさんの手紙、追悼文が寄せられた。

特別寄稿「カール・ロジャーズの死を悼む」には、日本のカウンセリングの発展に尽力された佐治守夫、都留春夫、友田不二男、伊東博、柘植明子さんら、そうそうたる人たちから追悼文が寄せられた。亡くなってわずか半年後の七月に発刊できたのが、今思っても不思議なほどである。

またこの号には、一九八三（昭和五八）年五月、ロジャーズ、ナタリー父娘を招いて、埼玉県嵐山の国立婦人教育会館で開かれたパーソン・センタード・アプローチ（PCA）ワークショップや日本滞在中の写真も掲載された。これまでも素人雑誌にならないようレイアウトや割付けには気を配ってきたが、表紙のカラー化や写真の扱いなどいただいた原稿をどうしたら大切に読みやすい形にできるか、妻と二人でアイデアを寄せ合いながら編集した。編集を担当した私たちにとっても充実した時間となった。

裏表紙に英文の目次をつけたり、国立国会図書館のISSN番号を取得したりもした。頁数も六〇頁になり、雑誌の体裁として原形がほぼこの時点でできあがった。また、印刷は思い切って二千部とした。ワークショップなどで単品としても売れるだろう予想したか

らである。幸いほどなく完売となり、この雑誌のその後の経済的基盤となった。

わたしも「ロジャーズ先生と私」と題して、一九八三年のワークショップの経験を書いた。ロジャーズさんの横にちゃっかり収まっている写真を載せさせてもらったのが、ささやかな編集者の余録である。

この種の雑誌は、意気込みとは裏腹に3号とか5号あたりで中断したり廃刊になることが多い。その一番難しい時期をロジャーズ先生が乗り切らせてくれただけでなく、雑誌として発展し安定の礎を築いてくれたのである。その後も雑誌はかろうじて黒字で運営されているが、それも原稿料なしで執筆いただいた多くの方々のおかげであり、この紙上をお借りしてあらためてお礼申し上げたい。

三・6号から9号まで

一九八七（昭和六二）年一二月発行の6号から、一九八九（平成元）年七月発行の9号までは特に特集を組まず、人間関係研究会スタッフをはじめとするエンカウンター・グループ関係者や参加者からの投稿や依頼原稿を中心に編集されている。

6号では、華厳経とカウンセリングについて大須賀発蔵さんからパーソン・センタード・アプローチの海外の動向について安部恒久さんが、ジェンドリンについて末武安弘さんから、家族療法について八尾芳樹さんから原稿をいただいている。

7号以降も内容的に充実し、見藤隆子さんの「石原文里氏」とのインタビュー、広瀬寛子さんの看護におけるグループ経験、穂積清美さんのナタリー・ロジャーズの表現的療法、大須賀克己さんの氣功法とカウンセリングなど多彩な論文が並んでいる。

さらに8号では、「私のグループ観」と題して下田節夫さんと平木典子さんの論文が、特集・研究ノートとして、「若手グループ臨

床家が直面している諸問題」と題して、高松里・広瀬寛子・林も子・巖岩秀章・小林佳子・申栄治・鈴木奈保子・山田俊介さんらが名を連ねている。私自身も「私たち夫婦にとつてのエンカウンター・グループ」と題して、エンカウンターの意味を対談形式で問う小論を載せていただいた。

9号では、小学校におけるグループ・エンカウンターについて村久保雅孝さんが、ファシリテーターレスグループについて尾川丈一・飯島修治さんから原稿をいただいた。充実した原稿に恵まれ頁数は五〇頁前後になり、発行も半年に一回と順調で、発行部数も6号から一〇〇〇部に増やした。ただ、厚くなった分印刷費もかかるため、単品で六〇〇円、定期購読（郵送費を含む）は一五〇〇円とした。この頃に、雑誌の性質を反映させた薄いモスグリーン色の編集事務局専用の封筒も作成した。

シリーズものとして第8号から「日本グループ紀行」を開始した。日本全国を網羅する予定であったが、残念ながら11号の四回で中断してしまった。8号では東海地方について木村易さんが、北海道について滝沢広忠さんが、9号では広島県について鈴木聖幸さんが、関東の学生グループについて林も子・保坂亨さんが、10号では北部九州について高松里さん、香川県については瀬島（現長野）俊秋さんが、11号では広島を除く中国地方について鈴木聖幸さんによって、グループの開催状況が報告されている。

また、7号から小野修さんによる「時間を考える」という連載も始まった。エンカウンター・グループは、時間とどうつきあうかという性質を含んでおり、その本質に迫ることが期待されたが、諸般の事情により三回で中断を余儀なくされている。

グループ参加者からの声を集めた「メッセージ・私の声」も充実し、また「エンカウンター・グループについての情報欄」「お知らせ・情報・あれこれ」もできるだけ国内外の情報を網羅するように心が

がけた。グループ関係の本については書評という形を取るようにし、6号では都留春夫著「出会いの心理学」について村上昭史さんが、8号ではナタリー・ロジャーズ著「拓かれゆく女性」の書評を畠瀬直子さんが、第9号ではユージン・ジェンドリン著「夢とフォーカシング」について末武康弘さんが紹介している。

小さいながら当初目標とした日本におけるエンカウンター・グループの総合情報誌が実現した観があった。

四・10号から14号まで

9号までの実績を基盤に、一九九〇（平成二）年一月発行の10号から一九九二（平成四）年一月発行の14号までは、雑誌独自に特集を組み、その方針に沿って原稿を依頼するようになった。10号では、「教育とエンカウンター・グループ」を特集し、野島一彦、永原伸彦、鈴木正子、斎藤憲二、下山晴彦、山田俊介、関丕さんらが原稿を寄せている。11号では、「私のエンカウンター・グループ観とファシリテーション」について鈴木正子、矢幡洋、岩村聡さんが執筆している。

12号は、「人間関係研究会二〇周年特集号」であった。アンドレ・オウさんの特別寄稿に始まり、「会の二〇年の歩みと課題」について畠瀬稔さんが、一九九〇年五月に記念事業として開催されたエンカウンター・グループ・フォーラムの報告を増田実さんが、小柳はそのフォーラムで発表した内容を「現代におけるエンカウンター・グループの社会的意義」という論考にまとめている。

13号は、「中堅グループ臨床家の実際」として、矢幡洋、岸川裕之、伊藤義美さんが原稿を寄せている。14号は、「看護とエンカウンター・グループ」を特集し、見藤隆子、小野ツル子、広瀬寛子さんらが執筆している。

この時期は、エンカウンター・グループを核とした特集が相次い

で企画され実現していった。10号と12号は一五〇部と多めに印刷したにもかかわらず残部が少なく、雑誌として最も充実していた時期と考えられる。

また、連載では、10号から福井康之さんの「ゲシュタルト・セラピー」の訓練を受けにいった時の話」が始まり、12号まで三回掲載された。また、団士郎さんの「嵐のエンカウンター」が13号から15号まで三回連載された。これは二〇〇二年に出版された団士郎著「ヒトクセある心理臨床家の作り方・わが研修遍路日誌」(金剛出版)に所収されている。

五・15号から19号まで

一九九二(平成四)年九月発行の15号から一九九四(平成六)年九月発行の19号までは、日本人間性心理学会や日本心理臨床学会の自主企画シンポジウムなどの記録を再掲する形で特集を組むことが多くなった。この間発行した五号のうち特集の四回までが学会のシンポジウムであり、雑誌独自に企画を立てることが難しくなってきたことを示唆しているように思われた。

15号では、「わが国における来談者中心療法の発展と評価」(日本人間性心理学会第一〇回大会自主企画シンポジウム)を特集し、畠瀬直子、野島一彦、小柳晴生、伊藤義美さんの発表が掲載されている。

16号では、伊藤義美さんの企画による「グループ・アプローチにおける日常性と非日常性」(日本心理臨床学会第一〇回大会自主シンポジウム)が特集され、下田節夫、新田泰生、土川隆史さんらが論じている。

17号は、「パーソン・セントード・アプローチに各国の動向」(日本人間性心理学会第一一回大会自主企画シンポジウム)が特集されている。メキシコのアルベルト・セグレラさん、ベトナムのトティ

・アンさんら海外から特別寄稿をいただいている。この雑誌は英文目次をつけるなど国際性も指向していたが、こうした形でささやかながら実現している。

18号は、一九九三年二月に開催された「エンカウンター・グループ『心のリゾート』ハワイ」の報告が特集され、渡辺忠、穂積清美、増田実さんらスタッフと、参加者が原稿を寄せている。

19号では、野島一彦・増田實さんの企画による「エンカウンター・グループのファシリテーター養成・研修」(日本人間性心理学会第一二回自主企画シンポジウム)が特集されている。畠瀬実、村山尚子、岩村聡、広瀬寛子、林もも子、大須賀克己、福井康之、矢幡洋さんらが論じている。

16号から福井康之さんの連載「エンカウンター・グループでは何が起こるのか」が始まり、22号まで七回掲載された。これは、一九九七年に「人間関係が楽しくなる」エンカウンター・グループへの招待」としてまとめられ、新水社から出版された。

この時期は内容の充実した投稿論文に恵まれた時期であった。そのすべてを網羅できないが、15号では矢幡洋さんの「ボディ・ワークが自己身体イメージに及ぼす影響」、16号では巖岩秀章さんの「エンカウンター・グループによる世界平和への貢献の可能性」、17号では諸富祥彦さんの「クライエントセントード」としてのアイデンティティ」、保井正明さんの「企業とエンカウンター・グループ『YBS物語』、流沢悟さんの「自己開発セミナー」と人間性の喪失」、19号では矢幡洋さんの「ゲシュタルト療法の現代的意義」、中田行重さんの「ファシリテーションについて」など、多くの重厚な論考を掲載することができた。

ただ、内容的に学会シンポジウムが多くなり学問的な雑誌と受け取られたためか、「ワークシヨップなどあまり売れなくなった」という声をスタッフから聞くようになったのは、この時期からであ

る。

六・20号から24号まで

20号は、一九九五（平成七）年八月に発行されたが、19号からほぼ一年あいた。半年に一回刊行のペースを維持することが困難になってきたのである。創刊号から数えて、ちょうど一〇年を経ている。編集に携わってきた私も四五歳を超え、日常の心理臨床活動、学内外の役職や原稿にと多忙を極めていた。仕事から帰った後、自宅で編集の企画や校正をすることが苦痛になってきた。そろそろ生き方の変更を迫られていると感じ始めていた。

21号からは、現状を承認する形で二年に三回発行することをスタッフ・ミーティングで承認してもらったが、これを維持することさえ困難になっていた。これまでも編集企画の一部をスタッフのメンバーにお願いしていたが、20号以降はその色彩をいっそう強めた。

20号は、渡辺忠さんが中心になって、「企業・組織におけるグループ・アプローチをめぐって」という特集が生まれ、大須賀克己、巖岩秀章、佐藤純子さんが執筆している。

21号は、福井康之さんの企画による日本人間性心理学会一三回大会の自主企画シンポジウム「エンカウンター・グループの未来」と、野島一彦さんの企画による日本心理臨床学会一二回大会の自主シンポジウム「グループ・アプローチの危険・副作用とそれへの対応」の記録が再掲されている。

前者のシンポジウムでは、畠瀬稔、増田實、野島一彦、広瀬寛子、高松里、木村易さんから人間関係研究会のスタッフが、実践領域の拡大、研究やファシリテーター養成の問題などについて論じている。

後者は、様々なグループ・アプローチの立場からグループの負の側面を検討するものであった。グループからは山口真人さん、ベリック・エンカウンター・グループからは小柳が、構成的グループ

・エンカウンターについては村久保雅孝さんが、ゲシュタルト・グループからは日高正宏さんが、集団精神療法からは中山巖さんが論じている。

これまでもスタッフが持ち回りで編集を担当してきたが、22号からは責任編集という形をとり、その旨雑誌の表紙に明記することになった。22号は高松里さんが責任編集で、「現代社会におけるセルフヘルプ・グループ」が特集され、伊藤伸二、西順子、松田博幸さんらが原稿を寄せている。

23号は伊藤義美さんの責任編集で、「私のフォーカシングの実践経験と活用」（日本心理臨床学会再一六回大会の自主シンポジウム）、「心理療法における人間性をめぐって」（東海心理学会第四五回大会自主企画）が特集されている。フォーカシングでは、増田實、井上澄子、木村易さんが論じ、心理療法における人間性については、木村易、土川隆史、原口義明さんらが論じている。

二〇〇一（平成一三）年三月発行の24号は、永原伸彦・渡辺忠さんの責任編集で、一九九九（平成一一）年一二月に開かれた人間関係研究会設立三〇周年記念フォーラム「人と人との新たなつながりを求めて」E・Gの可能性を問う」と、同年八月に開催された三〇周年記念清里ワークショップの報告が特集「人と人の新しい出会いを求めて」コミュニティ・グループへの挑戦」として組まれた。前者は、企画の趣旨を渡辺忠さんが、発表は、畠瀬稔、大須賀発蔵、広瀬寛子、村山正治さんらであった。後者は、企画について伊藤義美さんが、古谷公彦、小泉周二、木村幸次さんら参加者からの報告を掲載したものである。

この時期の内容は、20号の「企業・組織におけるグループ・アプローチをめぐって」と22号の「現代社会におけるセルフヘルプ・グループの意義と使命」以外、学会シンポジウムや人間関係研究会の行事や会合の報告で占められるようになってきた。発行の間隔が長

くなったことと合わせて、雑誌独自の潜在力は低下してきたと考えられた。スタッフ間でも、これがエンカウンター・グループそのものの凋落傾向を反映しているのかどうかという話題が議論の俎上に上るようになってきた。

この時期も、味わい深い論文を多数投稿いただいている。20号では、諸富祥彦さんの国際会議での体験をつづった「言語・国家・世代・東西」、内藤康裕さんの「どこかおかしい臨床家の身体」、21号と22号と続けて、木村易さんによる留学先のクリーブランドからの手紙という形での「ウォーム・スプリングの浅い春に」「Sさんへの手紙」、22号では、T・L・ホルドストック（畠瀬直子訳）さんの「アフリカ心理学の発展について」、池内香さんの「私の青年期とエンカウンター・グループ」である。

24号の発行を最後に、私が以下に述べる事情で人間関係研究会のスタッフと雑誌編集担当を降りた。その後、編集の引き受け手が決まらなかったために、事実上の休刊状態が三年間続いた。このたび、岩村聡さんに編集を担当していただき、しばらくぶりに25号が発行される運びになった。

七・編集に携わって

自画自賛になるが、まず価値があったと思われるのは、ニュースレターのな1、2号も含めて、曲がりなりにも一六年間に24号を発行できたことである。同人誌的な雑誌は、その意欲とは裏腹に継続は難しいものである。それでも続けてこられたのは、発行部数を多くしようなどと無理をしなかった、別の言い方をすれば「いいかげん」だったからかもしれない。

この雑誌の編集上の特徴として、執筆要項をつくらなかったことと、原則として締め切りをもうけなかったことを挙げたい。執筆要項は、新しい表現の出現を妨げると考えたからである。新しい思想

は新しい表現形を必要とする。絵画においては一九世紀の印象派や二〇世紀のキュビズムの出現がそれにあたるとし、小説の分野でも時代の先駆者は常に新しい文体で、私たちの心の有り様や生き方を描きだしてきたのである。

この雑誌がエンカウンター・グループについて新しい表現の場になり、ここから新しい思想が生まれることを願った。詩の形であれ、イラストであれ、私の予想を超えた表現形が現れることを望んだ。それに応えて様々な形の原稿がもちこまれた。筆者と何度もやりとりをしながら、オリジナリティを失わないでミニカブルなものにするのも編集の楽しみだった。

また、エンカウンター・グループは、私たちの時間との関わりを問うものであったと考えている。締め切りを設けなかったのは、せめてこの雑誌ぐらいいは締め切りに追われて原稿を書くのではなく、ゆっくり暖めて結晶化したものを掲載したかったからである。そもそも雑誌を維持するために書き手や読者がいるのではないのである。もし、この雑誌がこれからも続くのであれば、執筆要項や締め切りがないという伝統が残して欲しいと願っている。

20号あたりからあえぎあえぎであった。官僚的な事務仕事で発刊を続けることは不可能ではないかもしれない。しかし、もしこの雑誌が社会的使命を終えているのに、これまで続けてきたという理由だけで続けるとすれば、そこには時代を読み解き、切り開くような思索や議論が展開されることはないであろう。それはただでさえ情報氾濫している社会に凡庸なノイズを増やす害悪に過ぎない。

願わくは、この雑誌が確かにこの社会に役に立つと確信を持つ、向こう見ずな若者に受け継がれることを祈るのみである。

Ⅱ 私とエンカウンター・グループ

一・人間関係研究会のスタッフを辞した理由

二〇〇一（平成一三）年一月、名古屋での人間関係研究会スタッフ・ミーティングで退会の挨拶をして、スタッフの任を終えた。一八年間の関わりに終止符を打ったのである。退会の意志は、その前年のスタッフ・ミーティングで表明し承認されていた。その時「手紙」という形で退会に至る気持ちを伝えたが、大意は以下のようなものであった。

「隠居という生き方」

スタッフ・ミーティングでいきなり退会を言い出して、皆様にご迷惑をおかけしたのではないかと気になっている。スタッフを辞退したのは、このところメンバーシップを保ちにくくなったからである。日が押し迫ってからミーティングがあることを思い出し、幾ばくか負担感を感じつつ、準備らしい準備もせずに出かけるようになっていた。

五〇才になり何かと仕事や役職が増え、以前にも増してスケジュールに追われるようになった。ここ数年、しきりに「五〇代をどう生きるか」ということが頭に浮かぶ。人生に与えられた時間のうち、どのくらい仕事に費やし、勉強に使い、家族と過ごし、ほかの誰のためでもない自分のために使うのかと。流れに任せておけば、働きざかりでもあり社会的に期待される役割がさらに増えることは想像に難くない。沢山の役割をそつなくこなすというのが、今の日本では望ましい大人の姿なのかもしれない。

とはいえ、今でさえ夜遅く帰る日が結構ある。疲れ切って家にな

どりで着き、酒を飲んで寝るのがやつとの生活である。忙しいといっても、それなりのやりがいはあるし、経済的な見返りもある。しかし、心のゆとりや余裕がなくなってくる。知り合いからの久々の手紙も流し読み、返事を書かなければと思いつつ、それさえままならない生活である。仕事から離れて、人と酒を飲んだり話し込んだりすることもめっきり減った。

日頃、カウンセリングやグループのファシリテーターを生業とし、「ゆつくりとした時間を味わい過ごす」ことを人に勧めているだけに、現実の余裕のない生活は逆説的でさえある。今は、まだ身体の不都合はでていないが、遅かれ早かれ心臓麻痺か脳出血でつげが回ってきそうな予感さえする。

最近「隠居という生き方」という言葉が頭をよぎる。自分が生きられるのもあと二〇年か三〇年ぐらいと先が見えてきた。社会から期待される仕事を降りて、出来るだけ自分のために時間を使いたいのである。何人かにその断片を話してみた。今のところ返ってくる言葉は、「まだ若いのに」、「活躍するのはこれから」というものだった。

もちろん現実的に、いまずぐにすべての社会的活動から身を引けるとは考えていない。むしろ、生き方の姿勢としてのそれなのである。私は、エンカウンター・グループを、「二一世紀の生き方を先取りした時空間」と考えている。私がエンカウンター・グループから何かを得たとすれば、この「隠居という生き方」なのではないかと考えている。そして、いままでの私の生活は、二〇世紀的な生き方そのものといえるだろう。

「隠居という生き方」は、社会からの撤退と言うことではなく、私なりの新しい社会との関わり方と考えている。その第一歩として、まずは人間関係研究会のスタッフを降りることにしたのである。いろいろなものをそぎ落としていて、自分に何が残るか試してみた

いのである。

幸い縁あって、瀬戸内海を一望できる高台にある家が入った。ある石彫家の住まいを譲り受けたもので、ロケーションといい造りといい私には身分不相応であるが、「隠居という生き方」にうってつけである。勝手に「風聴庵」と名付け、来春には転居の予定である。デッキで酒を飲みながらひねもす海を眺め、これまで人に勧めてきた「自分とつきあう時間」を味わい、この先どう過ごすか思いを巡らせる日がくるのを楽しみにしているこのごろである。

この手紙を書いてから三年が経った。たまたま田舎に居を移すことと、仕事がかウンセラーから教育学部でカウンセリングを教えることに変わることが重なった。カウンセラーをやめてみると、身も心もぼろぼろに傷ついている自分に気づいた。戦死寸前であった。それからは生活をシンプルにすることに挑戦した。人にそのもくろみを話すと、ほとんどの人は不可能だと言った。私の中にもシンプルにするのを妨げるものはいくらかもあった。有名になりたい欲などはその代表であろう。

田舎暮らしというのは、日々の生活を営むだけで草刈りや新造りなど忙しいものだった。これまでの生活は脳と口と皮膚感覚だけをを使う生活だったが、田舎では筋肉など全身を使わなければ生きてゆけないのである。そうした生活を続けるうちに、欲もだんだん薄らいでいった。この会に続いて様々な役職を辞退し、学会などにも出なくなった。

振り返って見れば、人生の前半のうち三〇年ほどは親を喜ばせるためにエネルギーを使ったような気がする。それから二〇年は家族を維持するためにそれなりに働いた。幸い二人の子どもも大学を終え、経済的に独立していった。残る人生は、できるだけ「わがまま」に生きたいと思っている。

二・最近のエンカウンター・グループ観

一時は年間一〇回程エンカウンター・グループを主催したり、スタッフとして参加したこともあったが、徐々に減って二〇〇二（平成一四）年度は、香川大学の保健管理センター主催の学生を対象とするグループと産業カウンセラー養成講座の一貫としてのグループだけになっている。こうした動きは、私のエンカウンター・グループ観の変化と関係している。

保健管理センター主催のグループは、ここ数年副題として「自分とつきあう・自然とつきあう・人とつきあう」というキャッチフレーズを使っている。「つきあう」のところを「出会う」にする案も考えたが、「出会う」という表現は使えなくなっていた。

ここ二〇年以上カウンセラーとして、人は生きていく上で何に困っているのだろうかという課題に取り組んできた。その結論は「自分とつきあいあぐねている」ということであった。相談では「人とうまくつきあえない」という訴えが多いが、その内実は「最も身近な他人である自分とつきあいあぐねて困っている」と考えるようになったのである。

エンカウンター・グループは、「出合いのグループ」と訳され集団で過ごすことから、「人との出会い」の場と考えられてきた。しかし、その本質は、「自分とつきあう時間」を確保することにあると考えるようになった。

私たちは人につきあうことにむしろ疲れている。何より私自身が疲れていた。人につきあうことに疲れている人間が、「人と出会う」エンカウンター・グループを主催するというのは、パラドキシカルであった。それでもエンカウンター・グループは魅力的であった。その魅力は何かと考えると、人中にいながら「自分とつきあう時間、自分のことを考えられる時間が確保できる」という性質であった。

一四年度の保健管理センター主催のセミナーの副題は「一人で過ごすためのグループ」とした。グループで過ごすセッション数は最小限にするつもりである。多くを自由時間に当てる。しかも活動を促される時間ではない。ゆっくりコーヒーを飲んだり、散策したり、昼寝をしてもいい。参加者が一人で過ごしてもいいし、三々五々集まって話をするなり、テニスをするなり、釣りをするなり、ボートに乗るなりしてもいい時間なのである。

三・二一世紀の人と時間と物とのつきあい方を育んだエンカウンター・グループ

私にとって長らくの関心は、エンカウンター・グループが一九六〇年代後半にどのような必然性から生まれ発展し、現代社会でどのような役割を果たしているのだろうかということであった。

私なりに、12号（一九九一平成三年一月発行）に「現代におけるエンカウンター・グループの社会的意義」としてまとめた。その最も大きな意義は、自分が納得するように時間を使うという「時間消費型の消費」という概念であった。この考えが世間に受け入れられたという実感はなかった。エンカウンター・グループを実施している人たちにとっても受け入れにくいものでないかと思う。私たちは何かの役に立つという生産的志向が強いために、「消費」という概念はなじみにくかったのであろうと考えている。

これまで私たちが生きてきた「欠乏の世界」は、どう生き延びるか課題であり、生きてゆくのはまぎれもなく身体的な苦痛を伴うことであった。そして、今、私たちが足を踏み入れることになった「豊かな世界」は、当座食べることに欠かれないが、どのように生きてゆくかを一人一人が判断しなければならぬ世界であり、精神的に生きてゆくのが難しいのである。

エンカウンター・グループは、テーマや課題がなく、基本的には

参加者が話したいことや活動を中心に運営される。目的、方法、結果のいずれも不明確で不安定であり、効率も悪い。始まった時点で何が起るのか、どこへゆくのか、ファシリテーターも含め誰も知らない。エンカウンター・グループのこれらの特徴は、私達が足を踏み入れることになった「豊かな世界」の性質そのものだったのである。エンカウンター・グループの現代社会においての意義は、こうした曖昧さゆえにこれから私たちが迎えることになる「豊かな時代」の生き方を身につけるゆりかごであったと考えている。

歴史上初めて出会う「豊かな時代」は、夢見たようなバラ色の世界ではなく、「物と情報の洪水」とも言うべき状況であった。生き方も含めて選択肢が多様になり、曖昧な中を探索的に生きざるを得なくなった。豊かな時代は、どれほどつらくとも探索的に生きるしかないし、「曖昧な状況を探索的に生きる力」を身につけることが求められているのである。

曖昧な状況を生きて行くには、心許ない「自分の内なる声」をナビゲーターに手探りで進んでゆくしかない。「自分が何を望んでいるのか」、「どう感じているのか」など自分の心の声をうまく聞けることがリーダーの働きをするのである。

エンカウンター・グループでは、曖昧な状況で自分の内なる声に耳を傾けながら、同時に人の声を正確に聴くことを学ぶところでもある。自分の声が聞こえないと、豊かな時代では物や情報の濁流に翻弄され、立ちすくみ行き詰まる。エンカウンター・グループでは、そうした状況で舵となる自分の声や感覚を取り戻す「自分とつきあう力」という課題に挑戦していると考えられる。

豊かさはたくさんの可能性を提示するが、実際に選ぶのはごく限られており、それが必ずしもうまくいくとも限らない。あきらめる選択肢が増えるほど、選択は苦しいものになる。選ばなかったことやものをあきらめたり、苦勞して選んだことがうまくいかない

ときにやけを起こさないで対処する力が必要となる。

エンカウンター・グループでは、決められた課題がないために何でなしうる可能性がある。しかし、一人の人間が一時になし得ることにも、能力にも時間にも限りがあるために、現実にはきわめて限定された選択しかできない。豊かさは限りなく欲求を肥大化させる傾向を持つが、エンカウンター・グループは「限りある人間」がそうした状況でやけを起こさずに「自分と折り合ってゆく力」や知恵を育くんでいるように思われる。

豊かさで変わるのとは、物や情報とのつき合い方だけではない。対人関係においても量や流動性が飛躍的に高まる。私たちは長らく少数も固定的で濃密な人間関係を営んできた。それなりに難しさや苦勞があり、そうした経験の中から多くの人間関係の知恵を編みだしてきた。

しかし、今や私たちは、日々おびただしい見知らぬ人と出会い、比較的短時間にそれなりにつきあい、こじれずに別れなければならぬ。突然に出現した「膨大な他人」と付き合わざるをえなくなったのである。これまでの長い歴史で蓄積した知恵は、この事態には通用しない。

エンカウンターは「出会い」の意味だが、出会いが増えれば必然的に別れも多くなる。出会うことは難しいが、別れる方がもっと難しい。私たちの心は、多くのつらい別れに耐えられるほど強靱にはできていないのである。これからの時代は、膨大な他人と「出会う力や知恵」と同時に「別れる力や知恵」が必要になってくるのである。

エンカウンター・グループの本質は、あらかじめ別れが想定された人間関係にある。限られた時間のなかでそれなりに密度のある人間関係を築きながら、それでいてこじれずに別れる、終わりのある人間関係のあり方を学んでいるのではないだろうか。これまでの知恵が通用しない「膨大な他人」との関わり方を模索する場であると

考えるようになった。「出会いのグループ」は、実は「別れのグループ」だったのである。

今私たちは混沌のただ中にあり、原因論や処方箋も百家争鳴である。混沌の底流には、「欠乏を生きる力や知恵」から「豊かさを生きる力や知恵」への転換があると思われる。エンカウンター・グループには、この困難な課題を解決する鍵がありそうである。「ゆっくり自分と向き合うぜいたく」の中で、私たちは「欠乏に合わせた生き方」から「豊かさにふさわしい生き方」への変更に挑戦していると考えられる。

四、私の「豊かさ」とのつきあい方

私自身は、面接やエンカウンター・グループでの経験から、生きるのが難しい「豊かな時代」のつきあい方として、社会から距離を取ることでその濁流から身を守る方法を選んだ。携帯電話を使わない、インターネットやメールも最小限にとどめ、世間の動きから遅れるということが、私の見いだした解決策であった。いわば社会からの「半ひきこもり」であり、年齢から考えると「半隠居」と言えるかもしれない。

こうして、物と情報の氾濫から距離を置き、人とのつきあひも減らし判断を少なくすることで、生きるのが難しい「豊かな時代」とのつきあい方を模索しているのである。日常の生活がエンカウンター・グループ的になったとも言える。

何よりゆったり時間がすぎるようになった。晴耕雨読とまでは行かないが、季候が良ければおおかたの時間を庭仕事に当てている。身体は忙しいが、心は何に使ってもいい自由な時間である。特にこれと考えようと意識することはないが、勝手にいろいろなことに思い浮び、結果として自分と付き合う時間になっている。かなりのヘビースモーカーだが、数時間煙草をのむことさえ忘れて過ごすことも

少なくない。

反面テレビを見なくなった。がさがさした音や速いテンポに耐えられなくなったのである。世の中のおおかたのことがどうでもいいように感じられる。その分ボーッと雲を眺めていたりする。社会から取り残される不安を感じないわけではない。

生きるテンポが遅くなって、スピードを求められる仕事に差し障ることが増えてきた。これまで何とかこなしていたのだが、というよりかろうじてついていっていたのだが、だんだん「不健康な適応」だったのではないかと思うようになってきた。今の生活は社会的に見れば不適応だが、「健康な不適応」なのではないかと考え始めている。

こういう生活になってみると、あえてエンカウンター・グループという場を設定する必要性が薄らいできた。一九八九（平成元）年に「私たち夫婦にとつてのエンカウンター・グループ」と題した対談形式の小論を8号に載せている。その最後に「エンカウンター・グループは、私達夫婦に楽しんだり楽をしたりすることはいいことだという価値観をもたらした」と書かれている。以来、一五年をかけて日常の中でわがままを許し実現できるようになってきたとも言える。これもエンカウンター・グループのおかげである。

私にとって、日常でエンカウンター・グループ的性質が実現するようになって、日常生活を離れてエンカウンター・グループに出る必要性が薄らいできた。自分にとって意味が感じられなくなったことを、義理や過去のしがらみで無理に続けなくてもいいこともエンカウンター・グループから学んだことであった。ということ、しばらく皆様とはご無沙汰しそうである。長い間おつきあいいただいた多くの方々に感謝申し上げて筆を置きたい。

おやなぎはるお
●香川大学教育学部



●「エンカウンター・グループのホリスティック構造」と私

大須賀 克己

研究会の中心的機関誌である「出会の広場」が発行されて既に十八年が経つということです。発行し続けるには並々ならぬ苦勞があったことと思います。これを担当してくださった小柳先生の努力に改めて深く感謝いたします。

さて、このような研究会の発展に思いを秘めながら、自身のエンカウンター・グループについてもまた、現在考えているところ及びこれまで歩んで来た過程について述べさせて頂きます。様々な個人的経験が現在のグループ観に関係していると思うからです。

ロジャーズ博士との出会い

私は一九六四年にカールロジャーズ博士を

ラホヤに訪ね、その時グループについてのお話を伺ったことがエンカウンター・グループ活動の出発点であったように思います。それまではカンセリングといえば個人的なことだけを考えておりました。その後いろいろと博士からアドバイスを受けたりエンカウンターグループに参加したりして次第に私自身の中にグループの重要性が理解されてきたのでした。ロジャーズ博士はシカゴ時代に博士と同僚であったヘイ博士を紹介してくださりそこで体験を積むように薦められ、それが知的学習以上に重要であることを学ばせて頂きました。

ロジャーズ博士に興味を持つに至ったのは私の大学時代に遡ります。私は当時実存哲学者であるキエルケゴールをテーマとしており

ました。また大学院ではその実存と東洋思想との関係に興味が引かれました。ロジャーズ博士もキエルケゴールに大変共鳴していましたし、以前から二人にはその根底に共通な人間観が存在していたと思います。またロジャーズの思想には東洋的な豊かさもありましたので、それがいつそう身近に感じられグループ関心への起点ともなりました。

エサレン・研究所とバーナード・ガンサー

私にとってもう一つ大きな影響を与えてくれたのは、エサレン研究所のスタッフであるバーナード・ガンサーとの出会いでした。一九六八、九年頃でしたでしょうか、ある時エ

サレン研究所におけるセラピー活動を紹介する映画がロサンゼルスで一般公開されました。それを見て私は大変興味を持ち映画を製作したガンサーに手紙を出したのです。そうしましたら、彼がロスまで私に会いに来てくれると言われましたので申し訳ないと思い私から研究所を訪ねました。その後再び研修に参加するためそこを訪れ、それが私の生涯にとって大変深い体験として残りました。つまり体を通して心理体験でしたが、ロールヒングやゲシタルト療法と呼ばれる一連のボディ・セラピーでした。

一九七一年に帰国してゲシタルト・セラピーとエンカウンター・グループを統合し、少しでも日本で伝達できる事を願いながら活動してまいりました。しかしゲシタルトセラピーは当時の日本社会にとってまだ少々理解されにくいように感じられ、直接その研修だけを聞く機会は少なくなりました。しかしエンカウンター・グループを基盤としたカウンセラー養成研修には、いつでも体や自然を通して学んでいくことを主眼として行ってきたつもりです。

その後しばらくして、アメリカでの体を通じた研修体験がさらに中国で長年の歴史を持つ「氣」の概念や治療につながって行きました。外気気功療法に関しては個人カウンセリングに於いても時に数分行う事がありますが、

心身の苦痛解放には大変役立ちました。とくに身体に関してですがかなり高い確率の治療結果が得られたのです。何故この様な現象が短時間で起こり得るのかについて模索した結果、宇宙構造に関するニューサイエンスの発見を重視すべきだと感じました。

グループの四次元構造

このような経験から、私どもの住む社会は概念的ですが四次元のホリスティック（全体的）構造で捉えることが出来ると考えるに至りました。小さな社会とも言えるエンカウンター・グループに於いても同様な構造の働きが存在しています。

グループの場は集合した人々が集中的に接触していますから一般社会とは異なります、このグループのもつ雰囲気は日常にはあり得ないほど自然で自由であるといった側面から見ても、一般社会や特別な目的を持って開催されている研修会などとも違います。しかしいずれにしてもエンカウンター・グループは他のグループに比べて一般社会の集中的要因を強く含んでいると言えます。

第一次元・他人との関り（空間的）

私どもは社会という空間に生活しています

から、その中で他人と共にいかに生きるべきかについて考えるのは当然です。グループの中でも同様ですが他人との暖かい交流を通じて心理的成長や安定感を獲得して行きます。従って特に他人からの理解ある心理的関りがいかに重要かが分かります。これはエンカウンター・グループの一般的洞察です。

第二次元・自己との関り（時間的）

いま述べましたように、人は社会という空間の中で他人と接し様々な体験をします。その接触の結果、個人にとっては過去の苦しみにもなれば、また未来への大きな不安として押し掛かる事さえあります。後悔の多い人生は過去に引きずられ、不安に慄く未来は耐え難いほど永く感じられます。つまり個人の心とは時間的存在です。

一般に健康な心は現在の対象に集中しています。従ってグループにおいても同様な原理が働きます。現在進行しているグループの話し合いに安心して集中できる受容的雰囲気があれば、参加者はそれまで固執していた硬い自己自身への関りや考え方に変化を生じます。

つまり現実の話し合いに効率的に反応できる自分に変容していくのです。それまでのように妄想に満ちた過去や未来の思いに引きずられる事が少なくなっていくます。そしてグ

ループでの豊かな経験が更にその後の一般社会生活へと持続されてゆくのです。

第三次元・自然との関り（異質的）

我々は人間であると共にまた少々異質的ですが動物、生物として自然界の中に生きています。人は倫理や道徳の枠のもとに自己を抑制しなければならぬ一方で、自然から与えられた動物的本性を開放していく必要もあります。いずれにしても人間ですから他の動物とは少々違います。自然から与えられた自分らしい本性に立ち返る事だとも言えます。

グループでは次の様な参加者の発言がしばしば見られます。時の経過とともに参加者は思うままに自己を表現したくなる傾向がありますが、ともするとそれが未熟な話に聞こえたり非道徳的にも感じられる事さえあります。しかし、このような行動を通じてむしろ今まで抑圧していた自己を解放し、自然から与えられた動物的本性を発露していきます。結果としてその人らしい感性を回復し、グループから日常生活に戻っても自然界と微妙に調和して生きることが可能になります。

ファシリテーターとしての役割を担う我々の立場からすれば、一見社会では受け入れられない様なメンバーの表現の中に、大切な自然性が潜んでいるのを感じとれる事が大切な

と思います。

第四次元・宇宙とのホロン（全体と部分・宇宙意思と個人）的関り

私どもは直接見えない宇宙や地球と想像以上に交流しています。その科学的事実が素粒子理論を通じて最近ますます発見されてきました。また交流していると同時に大きな宇宙生命体の一部であるとも考えられます。これは漠然とした巨大な話ではなく、様々な具体的環境や物体とのエネルギー的コミュニケーションを通じて我々の行動や健康に関わっているという事実があります。医療や心理療法の効果にも関係しますから、いずれホリスティック・アプローチとしてより積極的に理解され、これらの方法にも変革が起こるだろうと思われれます。

また心身の健康、治療といった目にみえる直接的な事だけでなく人生そのものの流れにも関係しています。多くの人々は日常生活のなかで、「困った時に偶然救われた。」といった言葉をよく耳にします。そのような偶然的出来事に関して、ユングはそれを「共時性」と呼びその因果に言及していますが、このような直接理解することが困難な運命的現象についても宇宙生命の原理から了解できます。小さな無関係に思える事象が大きな宇宙有機

体の生命活動に繋がれているからです。

このような観点からしますと、他人の抱える人生問題も限りなく複雑に思えます。ですから、グループの中では様々なセラピー的現象や個人の問題が解決されるといった事は起こるでしょうが、その一つ一つの解決が最終目的であるより、むしろ一人一人に与えられた大きな人生リズムが、やがて自然に復活統合されていく場になる事を願っています。だからといってファシリテーターが自発性を失って自ら表現するのを恐れていたなら、それは却って自然の流れに沿っていない事になります。

エンカウンター・グループのダイナミズムは人間の問題を含みながら、それを大きく包んでゆくホリスティック・プロセスとして発展して行くのではないでしょうか。ロジャーズ博士も晩年にはこの点に触れているように思います。

おおすがかつみ
● 日本グロース・センター

●「ENCOUNTER出会いの広場」への思い

福井康之

私の原稿が「ENCOUNTER出会いの広場」に掲載されたのがNo.一〇号（一九九〇年一月発行）が最初である。私が丁度五〇歳の時に、文部省の海外長期研修で一〇カ月、ゲシュタルト・セラピーの訓練を受けに行ったのに関心を持たれたらしく、木村さんが小柳さんに献言されて、感想文を書けと依頼があったというわけである。

何をして来たのか知らせろということらしいと推察して、三回にわたって好きなことを書いてみた。最初の二回分は約六カ月間、デンバー市内のロッキー・ゲシュタルト・セラピー研究所での初級訓練の様子を紹介したが、三回目はアメリカ合衆国へ出掛けて本当は何が知りたかったのかという本音を書いた。これが本当に書きたかったことで、前の二回分は世間の義理である。大体が雑誌から依頼が

あるのは、テーマ指定の論文ばかりで、自分が言いたいことを、エッセイ風に活字にできるといことは、自費出版でもない限り無理な話である。言いたいこと、話したいことは、歳を取ると溜まってくる。エッセイを書かしてくれる私にとって唯一の雑誌が、これで廃刊になるといことは、実に残念なことであると思っている。

エッセイの中にある、書いた当時から約四十五年前になる第二次大戦の終戦の日のこと、日本中から物音が消えてしまった奇妙な静寂の記述を見て、同じ日の思いを木村さんが話してくれたのが、同世代の共同体験の証しとしてとても親しみを感ぜさせてくれた。木村さんは私の紹介に興味を持ったのか、もともと関心があったのか、聞いていないのでよく分からないが、後になってゲシュタルト

・セラピーの勉強に二年間も出掛けた。スタッフ・ミーティングでそのときの様子を紹介してはくれたが、「ENCOUNTER出会いの広場」には掲載してくれなかったのではないのか？それとも私が読んでいないのか。正直なところ、私はこの雑誌をそんなに丹念に読んでいない。あまりにも世の中に情報が多すぎて、差し当たり必要な情報だけを拾い読みをしているのが、おおかたの人の現状であろう。そんな時代に無理をして雑誌を発行することに限界があると私には思える。

購読部数が頭打ちで全然伸びないと編集の小柳さんが言うので、もう少し雑誌の内容を充実しようと、とにかく面白く読める読み物を継続連載しようと話し合っ、寄稿し始めたのが一九九三年三月発行の一六号からである。とりあえず「エンカウンター・グループ

では何が起るのか」という表題で書き始めた。毎回、特にテーマを決めることなく、その都度、グループについて、人間関係研究会の活動について、身辺に生じている事柄などの経験を通じて考えていることと、グループに関する研究や意見の紹介を思いつくまま自由に書いてみた。いつまで続けるかといった予定もなく、結局、一七まで通し番号で連載することになってしまった。一九九三年一六号から一九九七年二二号までののだが、年間二回の刊行が一九九五年以降は年一回発行になってしまい、とうとう小柳さんが一人で編集するのが無理だということで、編集委員が当番制で交替で発行することになった。連載も特に要望されなかったもので、そのまま立ち消えになってしまった。もともと、こちらから投稿すればずっと続いたかもしれないし、コミュニティ・グループの問題や清里のグループをどう考えるかといった書きたい事柄は次々とあるにはあるが、それは私だけの思いでもある。

とにかく、連載は面白く気軽に読めて役に立つというモットーで、冗談半分の砕けたスタイルを心掛けて、雑読・乱読で日頃蓄えている知識と文才(?)を活用して書き始めたが、段々地が出て理屈をこね始めてしまったようだった。小柳さんに売れ行きが伸びたかと思いたら、全然駄目ということで、連載を続ける意欲を喪失した一因でもあった。販売数を

伸ばすための工夫もいろいろしてくれてはいったと思うが、努力は無駄だったようである。

やはり木村さんが、多くの文献に基づいて紹介していることを褒めてくれたのが嬉しかった。当時、愛媛大学に在籍していて、国費でグループに関する英語の文献をかなり購入していたので、それを少しでも紹介するのは研究者としての義務だと思っていた。一九七〇年代以降はグループが消褪して行ったので、文献も古いものが多いが、わが国のエンカウンター・グループがロジャーズ一辺倒であるためか、当時はほとんど紹介されなかった。今も愛媛大学の図書館に眠っているの、いつか歴史的な展望をする人が出て来たら活用してほしい。愛惜断ち難く『Annual Handbook for Group Facilitators』だけは全巻、鳴門教育大学へ移管手続きをして持って行ったが、やはり鳴門大の図書館に眠っている。揃っているのは日本で他には無いのではないかと?その後継続購入をしてくれていることを念じてはいるが、後継者がいないと無理だろう。

心理学関係の出版をしている村上克江社長と愛媛大学の美術の先生の奥様とが懇意で、その縁で、この連載とそれ以前に「教育心理」に講座エンカウンター・グループを三回連載したのをアレンジし直して「人間関係が楽しくなる―エンカウンター・グループへの招待」へ一九九七年刊、新水社、二〇〇〇

円)として出版することが出来た。スタッフ全員に送呈したので、読みやすかったと感想を聞かせてくださった方もある。連載したものが本になったので、小柳さんが紹介文を特別本誌に執筆掲載してくれた。小さな出版社だから本屋の書棚に並ばないので人の目に触れない。初版一〇〇〇部がまだ完売できてない。この稿を書くにあたって、つい拾い読みをしてしまったが、執筆当時の情熱が伝わって来て、心身衰弱気味の昨今、自分の本に励まされてしまった。

小柳さんが編集を降りただけでなく、人間関係研究会を脱会してしまつて、はりあいが無くなり寂しい。まだ働き盛りでやることも多く、雑誌の編集に消耗してしまつたのだろうか。奥様の蔭の多大な協力で十八年間も刊行できたことに感謝を捧げたいと思う。事務局の渡辺忠さん所も奥様のお陰である。この機関誌の在り方だけでなく、研究会そのものの自体の運営の見直しが必要だ。スタッフの犠牲的な貢献に見合うだけの、どんな魅力が会自体にあるのだろうか。順番で来年度からの会長を引き受けるにあつたて、この雑誌の母体である人間関係研究会がどうなってしまうのか前途多難の思いしきりである。

●日本グループ紀行・あの頃 '89〜90

鈴木聖幸

1. あの頃の私

私の場合、「出会いの広場」には、原稿を三回掲載していただいた。八九年夏（No 9）に広島県のグループ。翌九〇年夏（No 11）に広島県以外の中国地方のグループ。そして、九二年冬（No 14）に個人通信と銘打ったエッセイを書く、その効用について書いた文章である。振り返ってみると、最初の原稿を書いていた八八年は、私にとってつらい年であった。

授業で教壇に立っていても、黙って座っている生徒が、自分のする授業はもちろん自分のことをつまらなく思っているのではないかという想念にとらわれ、生徒の前に立つことがとてもつらい状態になっていた。生徒より

も私のほうが教室の時計が気になり、まだ終わりのチャイムが鳴らないか鳴らないかとひたすらそんなことばかり考えていた。緊張から早朝に目が覚めてしまい、睡眠が充分にたれなくなった。体力的にもつらくなり、とうとう当時間接を受けていたカウンセラーに相談して、精神安定剤と睡眠薬を使うことにした。さらに、こんな自分はダメな人間だ、ダメな教師だと自分を始終責めていたので気分は重いままでいることが多く、その気分を晴らすために気に入ったマンガを次々と買い込んで一人下宿で読んでいた。

あの頃の私は、自分の現状を認めることが出来ず、授業が沈滞してしまうことや、生徒との人間関係が上手くいかないことに対して具体的に考える事をしようとしなかった。ただ一所懸命やる事だけが自分にできることだ

と考え、生徒の前だけで懸命にやることを免罪符にしていた。自分の対応やあり方のどこが良くてどこが悪いかを見つめ、対応策を考えろという強さは私にはなかった。そして私はそんな自分を情けないとかダメだとか言って自分をおとしめ、無い自信をますますなくしていた。

自分を救うのはカウンセリングだと思い、（実際自分に否定的な私を、肯定的に見てくれたのはカウンセリング関係の方々だった）当時広島大学の岩村聡先生のもとで行われていた日帰りのグループやケース検討会に出席していたが、事態がなかなか良い方向に向かわない事にいらだって、会の途中で唐突に「カウンセリングを勉強していても」何にもならない。」と発言したりして、先生を困らせていた。

2. 日本グループ紀行の原稿依頼・執筆

つらい時期ではあったものの、私はその一方で新たな動きをはじめていた。その一つが、グループ情報提供のミニコミ誌発行の構想である。当時の私はエンカウンターグループが大きな支えの一つになっていたので、会期が近づいてくるとそれはもうカウントダウンをして待っているほどだった。もともとたくさんさんのグループに出たい。出たい時にいつでも出られるようにしたいという思いから、人間関係研究会以外のものを含めた全国のグループ開催状況を把握し、それを逆に全国に向けて発信する事ができたらよいと考えたのである。今であれば、インターネットのホームページという有力な手段があるが、当時はまだなかった。周囲の専門家に意見を聞いたが、賛否両論だった。

そこへ、やってきたのが日本グループ紀行の原稿依頼だった。この依頼はたぶん岩村先生の所へ来たものだったのだろう。ケース検討会の合宿で岩村先生から話が出されて、思わず私は自分にやらせてほしいと手を挙げた。こうしたわけで初めの広島県編はほとんど岩村先生から頂いた資料で書いた。

次の岡山・山口・鳥取・島根県編は、私が資料を集める所から始めたものである。

3. 原稿書きとその後の出会い

原稿を作る際に、さまざまな団体にこちらで作った質問用紙を送付し、それに回答してもらった。その過程で、多くの人との出会いがあった。島根PCAの新免先生、岡山落合カウンセリング研究会の真田先生。手紙のやり取りだけでなく、送っていただいたグループの資料を見て、実際に参加もした。参加することそのものが楽しかった。その中で私は「やるべき事」よりも「やりたい事」を優先できるようになり、そうした自分を許せるようになっていった。

また、この中国地方のグループの原稿が掲載された八九年は、私にとって転機になった年だった。八九年暮れ福岡人間関係研究会の九重のグループに初めて参加した。そこで私は自分のことを好きになるきっかけをつかみ、それに勢いを得て活発な活動をするようになる。授業やクラス運営の実践を交流するサークルに熱心に通い、そこで学んだ事を職場で実践していった。さらに後に原稿として載せていただく事になった「個人通信」を発行し、書くことで自分の成長を楽しく確認し、ますます元気になっていった。この時期はとにかく書いて書いて書きまくっていた。九〇年に二回目の一年生の担任をしたときには、ついに一年間一日も休まず学級通信を発行するこ

とができた。グループの場においても、九一年に広島・宮浜温泉のグループで「実習ファシリテーター」という名目でファシリテーターを初めて経験することになった。こうして八八年の危機を脱出することができた。

私にとって日本グループ紀行の原稿を書くという作業は、苦しい時に私を支え、その後の活動の展開に結びついていった。

4. おわりに

掲載誌の表紙を見ると、偶然というべきだろうが必然というべきだろうか、岩村氏・村山氏・村久保氏・榛澤氏など私にとってキーパーソンになった人の名前が、私の名前と並んでいるのが印象深い。あらためてこうした機会を与えてくださった小柳氏や岩村氏に感謝したい。そして広島県編を掲載していただいた時、小柳氏より原稿の抄本を作るように強く勧められた（こういうものを作っておいてそれをまわりに配布する事で人間関係を作るのだと説得された）のだが、シャイな？（本当は、めんどくさがりな）私は、周りの人にこの事がなかなか言えず、百冊作った抄本は、ほとんどそっくり手元に残ってしまった。これも今ではいい思い出である。

すずきまさゆき

●広島県立油木高等学校

●エンカウンター・グループ・ムーブメントの今後の方向

岩村 聡

一、私の経験と広島での活動の展開

私が、エンカウンター・グループに参加するようになったのは、一九七五年からであった。その年、私は六つの会に参加した。翌年も六つ、その翌年は七つ……。それらの中には、合宿エンカウンター・グループもあったし、宿泊を伴わないものもあった。「カウンセリング・ワークショップ」の名称のものもあったし、その中にエンカウンター・グループ以外の分科会が含まれているものもあった。これらの会の記録は、私の手元にはほとんど残っている。

これらの私自身の経験と、この間の地元広島県内の主なエンカウンター・グループの開

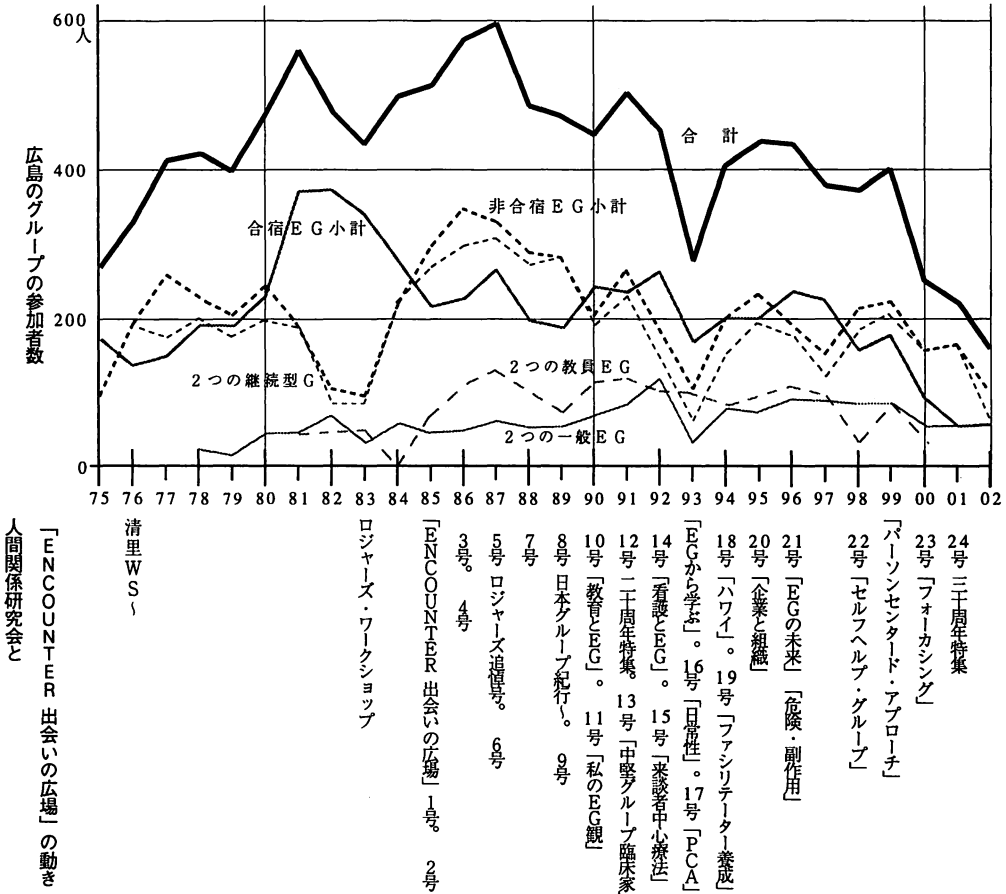
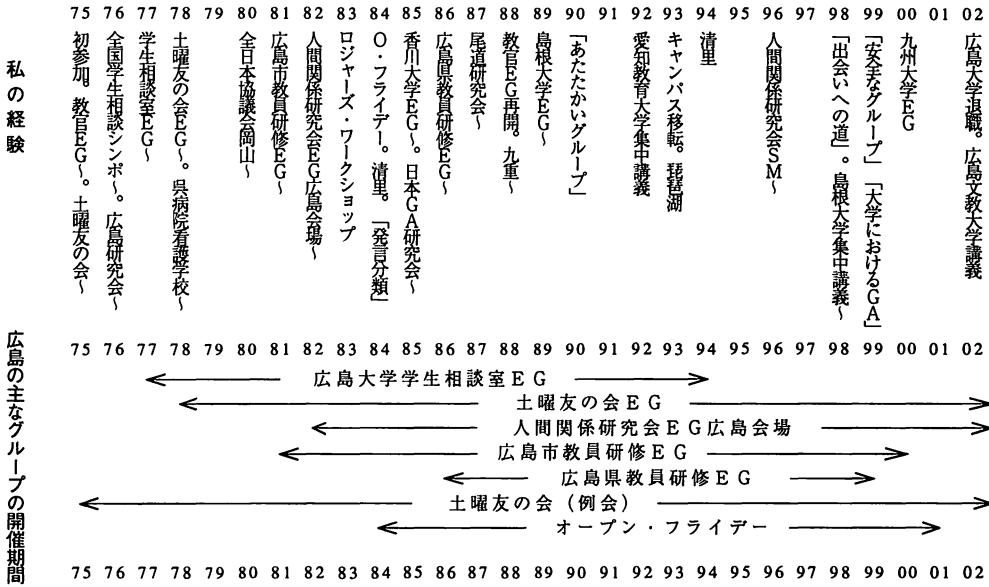
催期間と、それぞれの会の参加者数、それに人間関係研究会や「ENCOUNTER 出会いの広場」の動きを加えて図表にすると、次のようになる。

グラフに描いた「広島県のグループの参加者数」は、私も参加した以下の二十九プログラムの参加者数（総計一一、七三二人）である。この間、広島県内では、これ以外にもいくつかのエンカウンター・グループが開催されているが、参加人口などから見ると、このリストに載っている会は、県内の「グループ」の大きな部分を占めているものと思われる。このうち、

①「合宿EG小計」（五、八九七人）には、以下の会（二十一プログラム）が含まれる。広島大学体育会七回、参加者延べ二一八人。

広島大学保健管理センター九回二四二人。広島カウンスリング研究会七回一九八人。広島大学学生相談室十七回三八〇人。日本カウンスリング・センター宮島会場五回（EG分科会のみ）五三人。（広島大学）土曜友の会二十五回八五五人。国立呉病院看護学校七回三二人。国立療養所広島病院看護学校三回一〇九人。全日本カウンスリング協議会音戸会場五回（EGのみ）五三人。広島大学C P研究会六回一三八人。広島カウンスリング・スクール十五回五一〇人。広島市教育センター十八回一、〇四一人。人間関係研究会広島会場二十回七二七人。広島県立教育センター十四回六〇一人。尾道カウンスリング研究会十二回三三三人。その他六回一一三人（准看教務会、広島大学公開講座、PCA広島会場、

私の経験と周囲の動き



日本産業カウンセラー協会中国支部、広島記念病院、長尾病院」。

②「非合宿EG小計」（五、八三五人）には、以下の会（八プログラム）が含まれる。土曜友の会（例会）三八三回、参加者延べ三〇三九人。広島カウンセリング研究会七回一八五人。（広島大学）オープン・フライデー四四六回二、一四一人。呉カウンセリング研究会六回一二六人。尾道カウンセリング研究会十七回二九六人。その他三回四八人（広島県精神衛生センター、広島市立大学、広島文教女子大学）。

グラフに表れた大きな特徴の一つは、これらのグループの参加者数は、この期間の最初の約十年間に倍増したが、その後は最も多いときの三分の一以下に減少した、ということであろう。もう一つ目につくのは、一九八一年頃の合宿グループ優勢の時期に対して、その後非合宿グループがそれなりの役割をはたしている時期が、続いているということであろうか。

二、県外・全国・人間関係研究会

私のグループ経験には、広島県外や全国規模の会もあった。地元広島で開かれた全国規模の会もあったし、誘われたり招かれたり、自分から希望して参加した県外などの会も

あった。それには、以下のような会が含まれている。

全国学生相談研究会エンカウOUNTER・グループ（当初の名称は「教官エンカウOUNTER・グループ」）十七回、全日本カウンセリング協議会岡山会場十六回、人間関係研究会の他の会場十一回（ロジャーズ・ワークショップ、九重四回、清里二回、琵琶湖二回、下呂、小国）、香川大学保健管理センター十回、文部省ヘルスカウニングセンター三回、島根大学保健管理センター十四回、島根エンカウOUNTER・グループ二回、日本カウンセリング学会研修会岡山会場二回、同高松会場二回、その他六回（東京カウンセリング研修会山口会場、山陰臨床心理研究会、西はりまカウンセリング研究会、九州大学野島研究室、全国学生相談研修会、岡山県教育センター）。

私はまた、「エンカウOUNTER・グループ」のテーマを含むさまざまな研究会にも参加した。全国学生相談研究会シンポジウム、日本心理臨床学会、日本人間性心理学会、日本グループ・アプローチ研究会、日本学生相談学会などなど。「エンカウOUNTER・グループ」に関係した書籍や雑誌論文などを読む機会もあった。

そこへ、「ENCOUNTER 出会いの広場」と人間関係研究会スタッフ・ミーティングの経験が、加わってきた。私は、この雑誌

を必ずしも愛読したとはいえないが、さまざまなヒントをもらったり、視野を広げたりするきっかけになったと思う。スタッフ・ミーティングも、そこにどっぷりつかって、そこからしっかりと吸収したい部分もあったし、及び腰でしかかわれなかった部分もあったと思う。

エンカウOUNTER・グループやグループ・アプローチや、来談者中心療法やパーソンセンタード・アプローチやカウンセリングなどをめぐって、さまざまな人のさまざまな経験やさまざまな考えや、さまざまなやり方などを見聞させてもらったと思う。そしてその中に、自分の経験や考えと重なるものを見つけて、意を強くしたり、自分とは違うものと比べて、ヒントをもらったり、自分の選びたいものを再確認したりしたと思う。

三、エンカウOUNTER・グループ・ムーブメントが志向してきたもの

これらの活動がめざしてきた価値観を、私なりに仮説的にまとめると、次のようになるだろうか。

①多くの人に比較的共通して大事にされた価値観は、「一人ひとりを大切にすること」とまとめることができるだろうか。それは、自分も人も大切にすることを含む。

その中には、「受容」、とりわけ「人の話をじっくり聞こうとすること」。それから、「主体性の尊重」、つまり「その人のことはその人に決めさせようとする事」。したがって「対等な関係」の重視。それから、「率直さ」。とりわけ「自己開示」の重視などが含まれる。

②そして、多くの仲間にとって必ずしも共通の目標ではなかったかも知れないが、私（たち）がめざしてきた方向性として、「日常性の重視」がある。それは、継続型グループの重視や、日常の人間関係の改善の重視や、地域や地元の重視につながる。

さらに、「言語（化）の重視」や「グループの安全性の重視」などがあつたと思う。

四、今後の方向

このような、エンカウンター・グループを一つの軸とした人間尊重の運動は、少なくとも合宿エンカウンター・グループそのものに関する限り、一つの隆盛の時期が終わり、低迷の時期を迎えているかに見える。

その運動は、私も含めて、何人かの人達が半生をかけたものだったのでないかと思われるだけに、不活発化の流れは、残念でない。

しかし、冷静に考えてみると、日本のこれ

までのエンカウンター・グループの発展には、「流行」の要素もあつたのではないだろうか。そして、その時期を通り過ぎて、はやりすたりに関係のない大切なものが、今度こそ本格的に見直されなければならない段階がきていると見なければならぬ気がするがいかがであらうか。

それは、いわゆる「戦後民主主義」や、占領下にスタートしたリベラルな「教育改革」の行方とも、重なって見える。

くり返すようだが、たとえば、エンカウンター・グループ活動によつて、私達のあいだではいまや常識的になつてゐること。つまり、人間関係や集団や社会の中で、「一人ひとり大切にすること」や、ものごとは力づくではなく「話しあつて決めること」が大事だといふことが、一般社会ではまだまだ常識ではない。（それを長いあいだ、私は、一般社会でも常識になつてゐると思つていた！私が、比較的自由で民主的な学校や職場に恵まれていたからだろうか。）

そのスピリットを、日本のエンカウンター・グループ・ムーブメントは広めたのではないか。

それは、流行が去つて終わつてしまつてよいものではなく、新しい時代の中に、より地道な形で根付かせられなければならないものではないだろうか。

家庭では、女性や、子どもやお年寄りや、病氣の人や障害者などの尊重。児童虐待や、妻などへのいわゆる「家庭内暴力」の防止。学校では、「児童生徒・学生中心主義」の発展。いじめやセクハラ等の防止。職場や地域や、経済社会や政治の世界では、働く人や消費者や、より多くの一般市民の尊重、などである。

運動の方法としては、合宿エンカウンター・グループの重要性は変わらないと思うが、そこに新しい多くの人に参加してもらうことは、だんだんむずかしくなつてきている。学校や地域などに根付いた継続型グループや、こうした視点に立つ授業などの発展が、これからは期待されるように思う。

そうしたムーブメントを支える情報交換の場。「ENCOUNTER出会ひの広場」の継続と発展が困難になりつつあるいま、それを維持し、あるいはそれに代わるよい方法はないものだろうか。

これから発展してほしい動きを、合宿エンカウンター・グループそのものと同時に、「一人ひとりを大切にする人間尊重の運動」と考えるならば、そうした方向への展開も望ましい。

そのためには、主として「エンカウンター・グループを知っている人」に読んでもらうだけの雑誌ではなく、より多くの一般市民が、

書店などで見かけて手にとって見、買って読もうとするような情報であることが望ましい。発行部数の多い既存の雑誌などに掲載させてもらう方法があれば、それもよいのではないか。書籍も、一般市民向けの、低価格でページ数の少ない書籍がほしい。

一案を挙げるならば、たとえば、人間尊重の立場に立ち、児童生徒学生の「人の話を聞く力」や「自己表現の力」など、言い換えれば「対人関係の能力」の発展をねらった「授業」をサポートしようとする企画。そのため、雑誌の特集や書籍などを通じて行う、より継続的な情報交流の企画などは、いかがであらうか。

そのとき、「人間関係研究会」は、さまざまな「人間尊重」の運動を唱道する、良心的な研究者・実践家集団ということになるだろうか。

人間関係研究会の内部や周辺に、たとえばこのような情報交流の実現や発展に向けて、立ち向かおうとする動きは出てこないものだろうか。

いわむらざとし
● 東広島心理相談室



本のこと、思い出す人のこと

木村 易

遠くまで来ると

遠くまで来るのは

不思議だと思う

だってあっちにいたのに

ここにいるなんてねえ

『ぼのぼの』

子供の頃から本を読むのが好きだった。小学生の頃から持っていた本が今でも一冊だけ残っている。ロビンソン漂流記とガリバー旅行記が一冊になった、厚さが5センチほどもある大きな紺色の布装なので、今ではすっかり赤茶け表紙も取れかけているが、背表紙に書名が金色に印刷されていて、表と裏の表紙に

ロビンソン・クルーソーとガリバーの色刷りの絵が貼られていて、三色刷りや石版画風の挿絵（装釘と挿画は岡本帰一だった）が一杯入っている（奥付には平田禿木訳 富山房 昭和十三年二月一日発行 模範家庭文庫 巨人版 定価四円二十銭とある）。この本は死んだ小学校の同級生の井上君、いのちゃんの形見として貰った。その頃ぼくはきむちゃんだったし、神田さんはかんちゃん、二村さんはにむちゃん、樋浦君はひうちちゃんだった。だからこの本を見るといのちゃんのことを思い出す。扉に「恵存 井上幹夫」と墨で書かれている。いのちゃんは少し小鼻が怒っているのではくのはくのは、いのししと結びつい

たいのちゃんになっていた。家から歩いて十分もかからない井之頭公園の「中の橋」に行く途中の松林の中にいのちゃんの家はあったけど、正確には何時出来たのかは覚えていない。林だけだった所に次第に家が増えて、大きな屋根や扉のある立派な門構えと石垣のある塀に四角く囲まれたその大きな家も出来ていた。ぼくの家から五分ほどの（前の原っぱと鉄条網を抜ければ学校だった）明星学園の初等部に入学した時一クラスしかない三十人ほどの中に、いのちゃんもいた。入学式のときの写真を見るといのちゃんは白い襟の服を着て高橋先生のすぐ前に座っている。家が一番近かったのでききに遊びに行くようになった気がする。門や扉があつて気軽に遊びにいけない感じがあつたから、誘われたのだと思う。遊びにいくとお母さんか姐やさんが玄関に迎えに出てきて、部屋に案内された。お母さんは余り口を利かない、上品な和服を着た少し年を取った感じのひとだった。ぼくといのちゃんはいのちゃんの部屋で画用紙にクレヨンで動物や鳥、魚なんかの絵を描いて鉄で切り抜いて、矢張り画用紙で作った建物や棚

の中に入れて、動物園や水族館を拵えて遊んでいた。お母さんか姐さんのどっちかが紅茶やケーキをお盆に載せてテーブルに置き、ちよつと様子を見てすぐ出ていったので二人だけで食べてまた遊んだ。お母さんと口を利いたかは覚えていない。外で遊んだ記憶もない。ぼくの家に遊びにくることはあった。お母さんは小説を書くひととか、いのちゃんは養子らしいと聞いた気がするが確かではない。大人たちの話を耳に挟んだのだろう。

井の頭の「らかんスツエデオ」と印刷のある灰色の厚紙に収められたいのちゃんのセピアがかった写真が一枚ある。前を向いた、えりの広いベルト付きの黒いオーバーを着ておでこを丸く出した何か問いたげに口を心持ち開けてカメラを見ている表情の色白で眉の下がった男の子の上半身が写っている。井上幹夫、昭和十五年三月三十一日没と万年筆で書いてある。もつと長かった気がしているけど、一年生の一年間だけ一緒にいたことになる。どんな病気だったのか僕は知らないけど、いつものちゃんの死んだことを考えると自分のせいのような気がしてくる。多分まだ春休

みに入る前だったと思うけど、いのちゃんはいくの家遊びに来て相撲を取ったりして遊んだ。ずつとあと戦争が終わってから死んだ兄もその時は一緒だった気がする。ぼくの方がいのちゃんよりも少し乱暴だったので、いのちゃんは転がって頭が痛くなって泣きながら帰った。死んでからそのことを思い出すと胸が痛いような気持になった。ぼくの記憶の中ではそれからいのちゃんは学校を休んだ。病気がらしいと聞いた気もする。そしていのちゃんは死んだ。心臓が弱かったからと聞いた気もするけど、よく分からなかった。ぼくが乱暴をしたからいのちゃんは病気になって死んだのじゃないか。そんな気がしていた。いのちゃんの家に学校からみんなで行ってお焼香をしたりお花を上げたりして、玄関の両側でお棺が黒い立派な自動車に載せられて出ていくのを見送った。それから少したって夜にいのちゃんのお父さんとお母さんが家の玄関に来て、一番の仲良しだったから思い出にと本と写真を買った。どんなお父さんだったか覚えていない。二人が並んで玄関に立っていて、ぼくの両親が向かい合って座って低い声で話

をしていた暗い光の下のはんやりした感じしか浮かんで来ない。それからいのちゃんの家に行ったことはない。貰った本はそれからずつとぼくの宝物になっている。くり返し読んだロビンソン・クルーソーの島での生活がぼくにはとても魅力的だったので、かれがその島での自分の生活を捨ててなぜ英吉利に帰るのか分からなかったし詰まらなかった。かれにはいつまでもあの自分だけの島、あの自分で拵えた城での生活を続けてほしいといつもぼくは思った。

梶木剛編『井上良雄評論集』という本（国文社一九七一年）を持っている。ただ安保闘争の頃からよく眼に触れるようになった吉本隆明の解説とあるのに惹かれて、この聞いたことのない昭和五年から八年というごく短い時期に彗星のように現われて消えたと言われる井上良雄という若い批評家の評論集に軽い好奇心を抱いたのだろう。一冊の前半にさして多くない井上の評論（『宿命と文学に就いて』から『仲町貞子』までの主要な論文六遍と他に短い書評が七編ほど）が集められてい

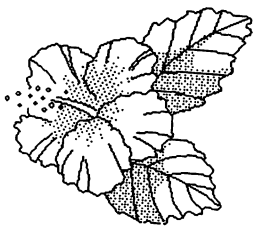
る。井上についての、この本に寄せている三人の解説者の言葉を借りるなら、昭和七年当時同人誌に発表するだけの無名の井上を最初に発見したのは平野謙であって、「この国の客観的現実から逃避しようとする」唐木順三と対比させて井上を「過去の重荷にもたえながらも、現実を直視しようとする、ぬきさしならぬ、せっぱつまったインテリゲンツィアの声がある」として、その評論ほど「芥川龍之介没後の現代文学の運命とその方向を端的に象徴しているものはない」と高く評価しており、吉本隆明は「感性の自殺―井上良雄について―」で、井上の断筆を、「時代的な制約」、「壁」の前で選択を強いられた井上が、「棒立ちになった姿勢で」とった肉体は生きて「感性を自殺せしめる」ことを選択、それも当時きわめて少数が扱ひえた方法と評価、彼を「鬼才」とまで評している。また梶木剛

（井上良雄の行程）は、井上の批評活動の主題が「知識人の文学と知識人の生き方とを重ねて追尋すること」にあったとして、昭和十一年に「仲町貞子『梅の花』」執筆を最後に評論家としての筆を捨てた経緯に触れ、こ

のころ井上良雄が仲町貞子と同棲、かれが「女性的豊穠」とためらいなく書きうる女性（自然）と共にいる井上良雄にとつては、書くことそれ自体がこの豊穠な「自然」に対する冒瀉となるゆえに筆がここで捨てられたのも、きわめて自然な事態として首肯できるとする。

この本の奥付けに記されている著者井上良雄の住所が井の頭四の十九の七とあったことから、いのちゃんの家の場所であることをばくは確かめた。かれがばくの殆ど会ったことのなかったいのちゃんのお父さんということとは殆ど間違いないようにばくは思えている。また、この井上が結婚した仲町貞子という作家がいのちゃんのお母さんだったのも。仲町貞子について劇作家の三好十郎は、「平林たけ子もえらい。……林扶美子もえらい。女流作家でえらいのは、あと三、四人居る。その中で一番えらいのは仲町貞子である」と絶賛した。彼女の随筆集『夢の花』（砂子屋書房 昭和十四年）が死んだ父の書棚にあったのていま手許に置いてある。どうしてこの洒落た麻のような布装の随筆集が書棚にあったの

か父にも母にもいまとなつては確かめようがなくなった。ばくの子供の頃のあの昭和十年代の杉の木鬱蒼とした井の頭公園、原っぱを思い出す。いのちゃんのお父さんとお母さんがこういう人たちだったんだと、ほんの少しだけ分かつてきて不思議な気持ちになつてく



特集2

グループ・アプローチ、新しい展開の芽

特集にあたって

野島 一彦

カール・ロジャーズは、エンカウンター・グループを含め

た集中的グループ経験を「二十世紀最大の社会的発明」と呼びました。実際に二十世紀は「グループ・アプローチの時代」と言ってもいいように、様々なグループが盛んに実践され、研究も行われてきました。わが国では、一九七〇年以來、人間関係研究会、福岡人間関係研究会等を中心に、エンカウンター・グループの実践と研究が脈々と続けられてきました。

時代は二十一世紀に入りました。二十一世紀のグループ・アプローチは、これからどのような方向に進むのでしょうか、どのような展開をしていくのでしょうか。本特集では、その「新しい展開の芽」に焦点をあてることにしました。新しい

時代の原動力は「若者」だと思えます。それで執筆者は、これから二十一世紀をになっていく若い芽である「若手グループ臨床家」にお願いしました。いずれもエンカウンター・グループとの出会いを基礎にして、それぞれのグループ・アプローチを実践・研究・模索しておられる方達です。

八つの若い芽が、自分のスタイルで、グループ・アプローチへの熱い思い・期待を述べてくれました。編者としては、それらを読ませていただき、「新しい展開の芽」が着々と伸びつつあるということを実感しました。そして二十一世紀のグループ・アプローチがさらに発展していくであろうことを確信しました。

執筆者の皆様、お忙しい中をこのたびの特集にご協力いただき、本当にありがとうございます。

のじまかずひこ

●九州大学大学院人間環境学研究院

● 師匠から学ぶ

― パーソン・センタード・アプローチという出会いの広場で ―

坂 中 正 義

はじめに

私とパーソン・センタード・アプローチとの出会いは、大学二年の夏でした。全日本カウンセリング協議会の団体である研究所で行われた三泊四日のエンカウンター・グループに参加したのが最初です。その後、ロールプレイングやエンカウンターのメンバー経験を重ね、また、カウンセラーとして、ファシリテーターとしても少しずつ実践に関わるようになり、今年で十三年になります。そんな時にこの原稿執筆のお話をいただきました。特集のタイトルは「グループ・アプローチ、新しい展開の芽」ですが、中身は「どうぞ、どのようなことでもご自由に」とのことです。

た。「ご自由に」というのはその言葉の響きとは裏腹にとっても厳しいものと思っています。というのもそこには自分らしさを求められているようにも思いますし、そこに自分らしさがおのずと出るものとも思います。つまり、「どうぞ、自由に坂中正義を語ってください」ということを求められていると思うわけです。

さて「自分を語る」こと、これほど難しいことはありません。しかも「グループ・アプローチ」という土俵の上での自分ということになると、語るほどのものも持ち合わせていないというのが正直なところです。「これは厄介な仕事を引き受けてしまったなあ」と、しばらく原稿も書き出せずにいました。

しかし、アイデアというのは思わぬところ

から現れるものです。学生と論文のオリジナリティを巡る話をしていた時、私が「オリジナリティというのは何もないところから生まれるのではないと思う。先行研究の検討や関連分野の知識の蓄積が、自分のオリジナリティを育ててくれると思う。だから最初はそういうものをしっかりと学ぶことが大事」というようなことを言いました。そのとたんその言葉がくるつと方向を変え、自分の中に入ってきたのです。「臨床家としてのオリジナリティは、何もないところから生まれるのではなく、経験、書物から学んだりする中で形成されるもの。だとすれば、自分が何を学んできたを振り返ることが、自分を語る上で重要になるのではないか」。これはなんだかおもしろそうという感触がありました。

というわけで、ここでは自分がこれまでの経験の中で何を学んできたかを振り返ることで「私を語る」とこととしたいと思います。

師匠から学んだこと

さて、原稿の大まかな方向性が決まったところで、また歩みが止まりました。「何を学んだか」といっても幅広い。人、経験、書物それぞれから多くのことを学んできている。いったいどこに絞ったらよいのだろうか。弱りました。「自分を語る」上では、「あの経験も書きたい」「あの人との関係も書かなきゃ」と書かなければと思われることがむくむくと湧いてきます。こういう完全に書かなきゃという発想の仕方自体が、私を語っているように思えますが、原稿の字数は決まっています。「どこかに絞らなければ」。悩んだあげく、今回は師匠から学んだことについて書くことにしました。それは自分が大事にしたいと思っていることは、ある先生が言われていたことだったり、臨床実践で困った時に「あの先生ならどうされるだろうか」と考えたりと、先生からの影響は大きいと思ったからです。先生から何を学んできたのかということは考えてみたいことのひとつだったので、今回はこのテーマに絞って述べてみたいと思いました。

ところで、師匠という言い方ですが、これは私にとつての心理臨床の学習イメージが大きく影響しています。師匠は「ああしろこうしろ」とはいわない。弟子は師匠の芸を見てそれを盗む。臨床の学習はこのような印象が強いのです。そして実際、いつの間にか先生から何かを取り込んでいると気づくことがよくあります。そういったことを少し意識的に振り返ってみたいなど思っています（ちなみに師匠といっているのは、私が勝手に思っているだけで、その先生から弟子として認められているかは定かではありません）。

T先生・カウンセリングの原体験をさせてもらいました。

私に大きな影響を与えた師匠を時系列で思い出すと、まずはT先生が思い浮かびます。高校時代に出会った古文の先生で、先生のご厚意で放課後に古文の勉強をみてもらっていました。また、カウンセリングにも熱心に取り組んでおられた先生で、教育相談室にいつもおられました。そこには箱庭があつて、おもしろそうなので遊んだ記憶があります。また、大学受験の際に、専攻を地理学か心理学で迷っていた時にも話を聴いてもらったり、心理学に興味があるならばということ、グループワークを体験する機会を与えてくださ

いました。こうやって振り返ってみると高校時代に既にカウンセリングや箱庭療法、グループ・アプローチにふれていたんだなとちよつとびっくりします。

この先生とは、大学入学後も帰省の度にお会いしていました。大学時代に一時期ちよつと心理的にまいっていたことがありました。その時もこの先生に話を聴いてもらいました。その経験は今の私のカウンセリングの原点となっていると思います。これは、村山・藤中（二〇〇二）に書きましたが、T先生は私の話を批判することなく、励ますことなく、そのまま聴いてくれました。面接の後、「こんな自分でもそのまま認めてくれる人がいる。自分は自分なりにやっていけばいいんじゃないか」という気持ちが高まりました。その後も問題そのものはそれ程変わりませんでした。だが、「自分なりにやっていけばいいじゃないか」「苦しいけど、やれることはやっていこう」というスタンスで過ごしていくうち、自分を苦しめていた問題は消えていきました。T先生に自分の話をひたすら耳を傾けもらい、ただそのまま受けとめてもらえたこと。これが私のカウンセリングの原点です。この体験と気づきは、後に出会うパーソン・センタード・アプローチとつながり、その中でも特に自己受容や無条件の積極的配慮を大切にしたいという自分の思いとつながっているなあと

振り返るたびごとに感じます。

K先生…基本的スタイルを学びました。

大学時代は教育学部のカウンセラー養成コースにいました。できたばかりのコースですごく熱心に勉強している先輩が多く、勉強会など盛んでした。でも、勉強会はずかしく行動療法ばかり。先輩はことごとく行動療法に染まっていました。その大学の心理臨床系の教官は二名で、いずれも行動療法を専門にされている方なので、いつの間にか強化されたのでしょうか。行動療法がダメとは思わなかったし、私のものの見方考え方からすると、むしろ親和的でもありました。しかし、先輩たちが盛んにいっていた「心は見えないから扱うのは科学的ではない」というお題目にはなんとなく違和感を感じていましたし、一方でみんながみんな行動療法という状態が不気味でもありました。そんなこんなで私は学外に居場所を見つけようと動き出しました。

そんな時に会ったのがK先生です。K先生は「はじめに」で述べた研究所の主宰で、そのEGのファシリテーターです。これも、村山・藤中（二〇〇二）に書きましたが、そのグループの中でRogersの三条件について思った疑問を話しました。「論理的に考えて自己一致と無条件性は矛盾するのではないか?」。すると、あるメンバーがこう言いしました。「それはそういう状況になってみないと分からないじゃない」。しばしの沈黙の後、K先生がおっしゃいました。「理屈じゃなく、実際のひととの関係で自分がどう相手に関わられるのか、具体的にどう関係を作っていけるのか。そんな中で考えていけばいいのではないかと思う」と。この「理屈じゃなく」というフレーズは今でも鮮明に思い出せます。理屈や論理のみにとらわれて、体験の重要性を見失っていた自分には、本当に新鮮で、目から鱗が落ちる体験でした。

その後、大学時代はその研究所に頻繁に出入りすることになります。集中や通いのエンカウンター・グループ、ロールプレイングなどに参加していました。カウンセリングを勉強している幅広い年齢・職業の人とふれあうこともできました。そこにくる人たちが、受容的雰囲気という言葉ではびったりではないのですが、他人のあり方を尊重しつつ、理解しようとする雰囲気を持つていたので、すごく居心地がよかったです。その雰囲気をついで支えておられたのがK先生だと思っています。K先生のあり方は、言葉は少ないけど、発せられる言葉は一つ一つ重みのある、目立たないけど、しっかり存在している、場を守っている、そんな印象がありました。

私が大学院に進学するため、東京を離れる際に、その人たちが色紙をくださいました。その中にあったK先生の言葉が「静座観群妙」です。武者小路実篤の言葉だそうですが、研究所にはこの言葉とともに、かほちゃやピーマンなどの野菜が置いてある絵がありました。「いろいろな形をした野菜があるがそれぞれの妙を静かに座って観る」という意味だとK先生から聞いた覚えがあります。K先生のグループでのあり方はまさに「静座観群妙」という感じでした。このあり方は、私のファシリテーションの基本スタイルとして取り込んでいると思います。ただ私の場合、K先生とは違い「心静か」ではないことが多いですが。

また、すごく信念をもっておられる先生でもありました。お酒を飲まれると少し口が軽くなられるので、先生のカウンセリングへの思いや願いを聞くことができました。妥協を許さず、地道にこれまで歩まれてきたのだなあと感じ、素直に「そんな生き方がしたいなあ」と思いました。

優しさと厳しさ、両方の深みを感じるK先生からは、カウンセリングやエンカウンター・グループでの自分の基本的なあり方をだいぶ取り込んでいると思います。

S先生…喝！を入れてもらいました。

K先生の研究所へ出入りしていた時、S先生とお会いする機会に恵まれました。S先生とはそんなに頻繁にお会いしてはおりませんが、お会いした時のインパクトが大きくて、今の自分になんか影響を与えていると思います。

S先生との最初の出会いは、ある大学の学生相談室主催の「現在の青年について」というテーマの対談を聞きに行った時でした。質問があればどうぞといわれるので、質問してみました。その時、S先生は真剣に耳を傾けて聴いてくださり、「あなたのような若者もいるんだな」というようなことを言ってくださったのが印象に残っています。

その経験からそう間もないうちに、K先生関係の集まりでS先生とご一緒する機会（飲み会）が訪れました。S先生が近くにいられた時に「自分は来談者中心療法の勉強がしたいのだが、自分の大学は行動療法の先生しかいない」という愚痴のようなことを言いました。すると、S先生はやや強い語調でこういわれました。「先生がいるかいなかではなく、自分がやれることをやるのが大事ではないのか」。その時はなんとなく怒られたような感じで複雑な気持ちでしたが、後で思

い起こすと、人のせい、周りのせいではなく、自分がその中でどう動くのかということの大切さを教えていただいた感じがあります。この自分への厳しさみたいなものは、いつも認識しているわけではないですが、自分の心の中にしっかりと根づいているような気がします。

また、K先生のところでも述べた色紙にS先生からも一句頂きました。「遠き落花、更に遠くは海の上、群青の水中花、咲き定まりぬ」。高校時代、古文が分からないといって放課後指導を受けていた私です。しかし、分からないものを分からないままにするのも苦手です。そこで、S先生へのお礼とともに意味を教えてほしいとお手紙しました。すると返事は、「こういうのは味わうもので、教えてもらうものでない」とだけ書いてありました。「先生らしい！」そう思いました。「自分の感じ方を大事にするんだよ」というメッセージにも思えて、これからの自分の進む道へのエールをいただいた感じがしました。

今でも行き詰まった時や困ったときは愚痴りたくなりますが、このS先生のことを思い出すと元気が出てきます。S先生に入れてもらった喝は、今も私の中で生きているように思います。

M先生…固さをほぐしてもらいました。

大学院での指導教官がM先生です。M先生との出会いは、大学二年の日本人間性心理学でした。先に述べたようにそのころの私は大学の外に居場所をみつけようと必死でした。いろいろ勉強するうちにRogersと出会い、その考え方や人間性に惹かれるようになりました（それにRogersは行動主義者Skinnerと論を戦わせています。私の大学での状況での事実がどんなに心強かったか）。「Rogers派の先生に会ってみたい」。そんな思いで大会にいつてみました。学会の大会に出ること自体が初めてなので、訳も分からず個人発表を聞いたり、関係ないのに総会に出たりと、今思うとよくやったなあと思ってしまう。その勢いで懇親会も出てしまいました。どうせ出るならいろんな先生に話をしてみたいと思ひ、話のきっかけ作りに本にサインをもらおうと専門書をいっぱい持っていきました（この辺は私がいかにミイハーカを表していますね）。その懇親会で出会ったのがM先生です。M先生は「どこの教授がやってきたか」と思ったら、学部生でびっくりした」と、この時のことを思い出されて言われます。今から考えると自分でも本当に大胆なことをした

と思います。それをきっかけに直接お会いしたり、手紙をいただいたりする中で、M先生のところで勉強したいという気持ちが大きくなり、大学院に進学しました。

M先生は最初の出会いの時から「Rogers派くさくない（こういう言い方が適切か分からないのですが）」と思いました。K先生は理論からイメージしたカウンセラー像に近かったのですが、M先生は違いました。M先生のフランクで自分を率直に表現される姿。これはすごく新鮮でしたし、K先生とは違った魅力を感じました。そのころの私はスト

イックなくらい「相手の存在をそのまま受け入れなければならない」「相手の視点で理解しなければならぬ」と思っていたので、M先生の率直さは、そこをゆるめてくれたという感じがあります。まさにM先生の口癖である「好きにやればいいんだよ」で少し楽に生きられるようになったと思います。

この「好きにやればいいんだよ」は、研究面でも私をサポートしてくれました。今、私は三条件にこだわって研究をしています。そこに集約していったのもM先生のおかげだと思っています。三条件へのこだわりは最初からあったのですが、いまさら三条件が研究になるのかという不安もありました。その辺を「自分の好きなテーマでやればいいんだよ」と支えてもらった感じがあります。このこと

は学生を指導する今の立場になって、より実感するようになっていきます。

また、M研究室の先輩にも研究や臨床においてずいぶん支えてもらいました。「好きにやりつつ」、他者への柔らかい配慮のある先輩たちです。この雰囲気を見て支えておられたのもM先生だと思います。

ところで、書きながら明確になってきたのですが、M先生にはよく看護学校の構成型グループのアシスタントとして連れて行ってもらいました。この時の先生のファシリテーターとしてのあり方、間合いや雰囲気は、構成型グループの基本的なあり方としてずいぶん取り込んでいるように思います。また、構成型とかベシックといった形にこだわらない柔軟さがM先生の魅力だと思います。この点は、私はまだまだ修行が足りない感じ

です。「好きにやればよい」。そこにある自分の感じを大切にという感覚は、M先生から取り込んだものだと思います。

N先生…実務をしつかり学びました。

最後はN先生です。N先生との最初の出会いもやっぱり学部時代。集団精神療法学会での懇親会です。こうして振り返ってみると私は学部時代の方が元気だったと思います（少

し学部時代の自分を見習わないと）。それはさておき、N先生と出会った頃は、私の関心も徐々に絞られ、エンカウンター・グループで卒業論文を書くかと思っていました。先行研究をピックアップする上で、N先生の集会的グループ経験の文献リストは本当に助かりました。「毎年丁寧によくの文献を集めてくれる先生ってどんな先生だろう？」と思って、懇親会のお話しました。その文献リストに今では私も携わっているのは、不思議な縁でもあります。また、そのノウハウを生かして坂中（二〇〇三）のような文献リストを作成しているあたり、N先生から学んだ大きなものの一つでしょう。

N先生には、大学院に入ってから直接的にサポートして頂きました。ベシック・エンカウンター・グループのファシリテーター体験の機会をいただいたこと。その際には合間に丁寧な助言やアドバイスをいただき、初めての不安は抱えながらも、安心してファシリテーター体験を持てました。また、個人カウンセリングでもスーパーバイズしていただき、やはり安心して面接することができました。こうやって振り返ると心理臨床のミクロな部分（具体的な応答など）はK先生から取り込んだところが大きいのですが、マクロな部分（面接の組み立て方やグループ・プロセスの見立てなど）はN先生から取り込んだ

ように思えます。また現実には直面する様々な困難にどう対応するかといった実務上非常に重要なことも、N先生から学んだように思えます。

N先生はスーパーバイザーという関係上、直接もらったアドヴァイスを中心に書いていますが、そうではないものもあります。そのうちもっとも大きいものは「経験を言葉にすること」です。N先生は多作（研究のこと）な先生ですが、その多くが事例研究です。自分の経験と向き合い丁寧に言葉にしていくな作業をととても大事にされています。自分もそうありたいなと思いつつ、ここもまた、まだまだ修行が足りないところです。

おわりに

さて、師匠から何を学んできたかを振り返ることで、私を語ってみました。ここでは五人の師匠をあげましたが、書いていると他にも気になる師匠がいます（リサーチの基礎や研究会でお世話になったB先生や、もう一人のM先生など）。また、研究所にいられていた方々やM研究室の先輩たちといったよい仲間にも恵まれてことなども浮かんできました。その辺はまた機会があれば述べたいと思います。

私は昔からものまねがうまいとよく言われ

てきました。ここにあげた師匠についても冗談でものまねをしたしますが、ファシリテーターをしている時にふと振り返るとK先生やM先生のしゃべり方になっていたりすることがあつて驚きます。この前もカンファの時にある人から「N先生の口調になってました」と言われてしまいました。「学ぶ」ことは「真似る」ことからといいます、その意味ではその人から何を「まねび」、自分のなかに取り入れてきたかを振り返ってみるようになります。最初の論文の話ではありませんが、その人らしさとは真似ることの中からでくるのかもしれない。

最後に、こういうことを振り返るのもいいなあと率直に思いました。ありがたい機会をいただいたなと感謝しております。

文献

- 村山正治・藤中隆久編 二〇〇二 クライエント中心療法と体験過程療法―私と実践との対話― ナカニシヤ出版
- 坂中正義 二〇〇三 日本における「来談者中心療法」及び「体験過程療法」に関する文献リスト（二〇〇二） 福岡教育大学「心理教育相談研究」、七、一一―二一

さかなかまざよし
●福岡教育大学



●グループに出会って、今を楽しんでいる

金 奎 卓

初めて会ったグループ

私は、韓国の現職教員であったが、グループに出会ってから日本に来てもっとグループの勉強がしたくて、一時仕事をやめて今の生活を楽しんでいます。このような生活になったことは、大学一年生の時出会ったグループが原因ではないかと思われます。

その時私は、韓国D市の教育大学に通っていました。私が属しているサークルでは、先輩キリスト教の教師との連携が一年一回ありました。それは、後輩と先輩が一年一回集まって、三泊四日の修練会でした。普通は、説教中心であるが、その時ははじめて人間関係訓練が導入されました。今の言葉としては、

構成的グループであったと思われます。毎日四時間ずつ六セッションを先輩と後輩四十名が体験しました。セッションの内容は、「他己紹介」「信頼ゲーム」「傾聴訓練」「主張訓練」「四つの窓」「自分の好きな言葉」でありました。初めて出会ったグループの体験は、自分にとっては非常に新鮮なショックでした。

それは、自ら意見を出したり感情を表現したりすることがなかった自分にとっては、難しくて恥ずかしくて面白くて本当に複雑な気持ちでした。しかし、否定的な感じより肯定的な感じが強かったことは事実です。このようなグループが自分だけではなく、自分が奉仕している教会にはもっと必要ではないかと思いは始めるきっかけになりました。

未熟でも自らグループを始める

大学一年生のグループの体験がきっかけで、次の年から自らグループを実施することを考え始めました。大学二年の時、教会の大学部会長になり、会員の仲があまりよくないことに気づき、グループを四十名の会員を対象に実施し始めました。

しかし、グループの一回体験だけで、実施方法とファシリテーター養成訓練も受けたことがなかったことがいろんな失敗を起こしました。毎週プログラムを運営する時、一セッション三―四時間くらい使ったりしました。ただ、全員の声が聞きたくてやったことが、一年後色々な反省をすることになる原因にな

りました。本当に自分の熱意ばかりで、会員（メンバー）の気持ちを考えずにやったことが後で分かりました。会長の熱意に静かに従ってくれた会員に感謝しております。

一方、いい体験になったという声も聞いて支えになりました。大学三年からは、二年間一ヶ月一回のペースで会員の意見を聞きながらするようにしました。このグループを実施したことで、教会には共同体訓練の名で知られるようになりました。

大学院時代でのグループ体験と自分のグループ

このようなグループの体験が心理学に興味を持つようになりました。大学の教授になっている先輩に教育心理学のことで相談をしたら、「君の興味は相談心理の方だね。」と言われました。それから、大学四年の時カウンセリング理論を勉強しながら、大学院入試を準備しました。その時、一番自分に合う理論はロジャーズの三条件でした。無条件の肯定的な尊重、共感的理解、純粋性（自己一致性、真実性）の言葉は、その後自分の教育観の一部になりました。とっても好きで面接試験の答えでロジャーズの三条件を引用しながら、教師の姿勢について話しました。

偶然かもしれないが、大学院入試で「ロ

ジャーズの理論と精神分析理論を比較しなさい。」という問題が出ました。本当に楽に書くことができたように思われます。幸いに十一年中、男性一人として合学しました。

院でのグループは、一九九一年集団相談と言う授業が初めてでした。カウンセリング理論に従うグループを行う授業でした。一時間グループ理論を発表してから二時間グループが行われます。毎時間学生一人以上が泣いたような記憶があります。泣かないとグループにならないという怪しい感じもしました。

それと共に、自分がやったグループは自分の学級六年生の中で、希望者十名を対象として十セッションを行いました。毎セッションの時間は九十一―一二〇分ずつ、水曜日と土曜日に授業が終わってから行いました。その中でおとなしい女の子は自分の意見を表現するようになり、今アメリカで仕事をしています。このようなことで、嬉しい気持ちいっぱいでした。そして、本当にいたずらばかりしていた子との出会いも、素晴らしかったです。

他方教会では、中学生一年から高校三年まで一緒にあったグループを月一回のペースで三年間、共同体訓練の名で行いました。高校生三年に補助の役割を勤めてもらって行い、教会中の人間関係に少しでも影響を与えたいと思われす。

しかし、今まで体験したグループとは違っ

て、大学院卒論のグループの運営は大変でした。卒論のためのグループはしたくない気持ちが強かったです。しかし、同僚の教師達が積極的に協力してくれて、嫌な思いより楽しく子どもと接することができました。三十二名の子どもに認知的な主張訓練と行動的な主張訓練を実施し、主張行動を向上させ人間関係形成に役にたつことを目指しました（金・野島、二〇〇二）。その後、論文を書くことで大変な思いがあつて、グループを実施することを当分やめるようになりました。

なぜ日本なのか。

日本という国については、歴史的に少し知っているぐらいの国でした。しかし、米国のようにグループが盛んである国という概念はありませんでした。もちろん日本語が分からなかったことのせいかも知れません。紆余曲折の終わりに、日本に教員研修留学が決定しました。

来てみると、韓国と教育現実がいかに同じであるかに感心しました。そして、このような状況でのグループアプローチは、韓国で必ず役立つと思うようになりました。そういうことで、日本の留学の道を探り始めました。

日本という国は、歴史的に韓国と密接な関係があり、今はワールドカップをきっかけに

お互いに影響与えている国にもなっています。その影響の中で特に注目することは、教育面であると思われます。それは、学級の大きさ、教育内容など非常に多い部分に類似点があります。筆者はこのような状況で行われるグループアプローチなら、きつと役にたつと確信しつづりました(金、二〇〇二a)。

日本でのグループ体験

最初、福岡教育大学で学部生と一緒にした構成的エンカウンター・グループはとても楽しく新鮮な感じがありました。そして、九州大学大学院での野島先生との出会いはますますグループについての興味と、楽しさを味わうことができる契機につながるようになりました。野島先生の構成的グループでは、長い間経験したノウハウが感じられるグループ体験でした。同じことでもグループのリーダーにより、その持ち味が違うことが非常に魅力がありました。

二〇〇一年冬、初めて体験した二泊三日間のエンカウンター・グループでは、自分がどれくらい構成化しようとするか、初めて実感するようになりました。グループの沈黙を絶えず破り、無理やり発言したり、無理やりメンバーの発言を誘導したりする、ことでグループの雰囲気が悪くなった覚えがあります。

九州大学大学院に入って二年間、エンカウンター・グループの体験を重ねるにつれ、自分について余裕を持つようになり、完璧ではないけど自分なりに様々なメンバーにゆったり対応できるようになったと思われます。

自分の中では二つのグループ(構成的・非構成的)タイプは、それぞれ持ち味があり、どっちがいいということとは非常に難しいと思っております。しかし、グループのリーダーにリードされるか、自分が主体的にリードするかは非常に大きい意味があると思われます。自分のことを自ら考えたり他のメンバーから触発されたりすることは、親密な人間関係形成にも繋がると共に、人間成長にも直接役にあたつと思われ(野島、二〇〇〇)。自分にとつては、エンカウンター・グループの体験そのものが、構成型グループより自分の今の成長に繋がっていると言えます。

今取り組んでいるグループ

私は、韓国で小学校の元教師であったことから、「子どもの仲間づくり」に役立つグループを行うことへ興味がありました。それで、文献を調べる途中で、構成的エンカウンター・グループ(SEG)と出会う機会を得られました。

その中で、加藤(二〇〇〇)の「実施の有

無の比較が多く、どのようなプログラム内容や過程、構成の在り方が効果的なのか、方法の違いの比較によってその効果を明らかにすることは行われてこなかった。」ということに着目しました。それは、実施するか実施しないかの問題より、グループの構成を多様化することで教育現場に多様な実践ができるように提案することが重要ではないかと考えました。そこで、小学校のSEGの構成による実践を考えて行っています。

その内容は、夏休み・冬休みの時、「仲間づくり教室」という名前で三日間五・六年生を集め、オープンSEGを九時間八セッション行うことです。夏は三十七名、冬は五十三名が集まりました。結果として、自発的参加した子達の社会的スキルや自尊心の変化がありました(金、二〇〇二b・金、二〇〇三)。報告はしていませんが、日本の小学校でオープンSEG、クローズSEGを行ったり、韓国でクローズSEG(学期中の短期集中グループ)を実践したりして、児童と先生達に好評を得ています。今後報告ができると思いますが、様々な構成によるグループは、小学生にとつてもとても意味があるし、先生にとつても子どもの新たな側面を見ることができると思われます。学校側にとつては、イベントとしての導入、総合学習への導入等が有効ではないかと思われます。

グループに出会って、今を楽しんでいる

最初のグループに出会ってから、十八年目になります。最初体験した六セッションのグループ体験が今まで続くとは思いませんでした。自分がグループを実践したり体験したりしながら、楽しむことが、山ほど多くなつたような気がします。

「グループってなんだろう」と聞かれると、「人生が楽しめること」ではないかと答えています。グループの体験はいい面ばかりではないけど、自分にとってはいいことが多かったと思われまふ。出会ったグループをとおして、いろんな人間関係ができた、自分を見つめたりしながら、今の生活を楽しんでおります。今後も、グループとの出会いを続けながら、楽しい生活を送りたいと思っております。

参考文献

加藤治代 二〇〇〇 日本における構成的グループ研究の現状と課題—小学生対象研究を中心として— 國分康孝(編) 続構成的グループ・エンカウンター 誠信書房、九一—一〇四

金 奎卓・野島一彦 二〇〇二 韓国における

る行動的・認知的主張訓練が小学生の主張行動に及ぼす効果 九州大学心理学研究、三、一一三—一二〇

金 奎卓 二〇〇二a 韓・日のカウンセリング方法の比較研究 福岡教育大学心理学教育相談研究、六、二九—三九

金 奎卓 二〇〇二b 韓国小学校における構成的エンカウンター・グループの有効性の検討 日本人間性心理学会第二十一回大会発表論文集、七八—七九

金 奎卓 二〇〇三 韓国における短期集中型構成的エンカウンター・グループの実践研究 九州大学心理学研究、四、六七—七四

野島一彦 二〇〇〇 エンカウンター・グループのファシリテーション ナカニシヤ

きむぎゅうたく

●九州大学大学院人間環境学府



● 小学校におけるベーシック・エンカウンター・グループの適用

森 利 伸

一．はじめに

今回の特集テーマは、「グループ・アプローチ、新しい展開の芽」である。筆者が考えている新しい展開は、小学校におけるベーシック・エンカウンター・グループ（以下BEG）の適用である。小学校で筆者がBEGを導入しようと考えた理由について述べたい。

二．小学校教育における問題点

筆者の十年間の小学校教員経験から小学校教育における問題点として二つ取り上げたい。一つは、教育構造自体の問題である。もう一つは、「いじめ」や「学級崩壊」の問題であ

る。

川口（二〇〇〇）は、近代学校の問題点を現行の学校システムの問題点として捉え、「取り入れ型」の教育という概念で説明している。また、汐見（二〇〇〇）は、教育での評定行為の視点から「評定行為が行われる空間では、必ず目に見えない権力関係が発生する。その権力関係が逃れられないものであるとき、評定は相手への期待や要求を伝える行為となる。」と指摘している。このような視点から現行の教育構造では、必然的に子どもたちは与えられた課題をこなすという受身的な姿勢が育ちやすく、結果的に、主体的な自我が育ちににくく、心理的・社会的な成長が妨げられているように考えられる。

次に、現代の教育問題である「いじめ」や

「学級崩壊」である。筆者は、「いじめ」や「学級崩壊」は、集団のスケープゴート化現象として説明できると考えている。つまり、子どもたちが、日常生活においてイライラする感情を異質な感じのする級友や教師に向けて排除や攻撃している現象としてとらえることができる。このような問題に対して、教師—子どもの権力関係の中で「力による指導」を行えば、「いじめ」は教師の目の見えないところに潜伏するだけのことである。「学級崩壊」においては、教師の「力による指導」は子どもの反教師行動に拍車をかけるだけである。「学級崩壊」は、教師—子どもの権力関係が逆転し、子どもが支配権をもった状態ともいえる。

三、教育問題への有効なアプローチ

このような教育問題に対して、どのようにアプローチしていけばよいのだろうか。与えられた課題をこなす受身的な姿勢ではなく、主体的な自我を育てるために、教師から働きかけるのではなく、子どもから動き出すのを待つ姿勢が大切になってくる。

また、「いじめ」や「学級崩壊」の問題に対して、根本的にアプローチするためには、教師—子どもとの関係を上下関係ではない平等な関係にし、その中でスケープゴート化現象を扱う必要がある。この二点を満たすことのできるアプローチとして有効であると考えられるのがBEGである。

四、小学生に適用したグループの概要

六年生の一学級（男子十七名・女子十三名の三十名）で一年間継続して実施したBEGのプロセスの記録である。週一回四十五分間で、全部で三十四回セッションが行われている。「話し合いの時間」という位置づけで、床に車座になって実施した。担任である筆者がファシリテーター（以下Fa）をしている。毎回、セッション終了後に感想を書いてもら

うようにした。

●第一期（#1から#7まで）
【遊びについての話し合い】

#1で沈黙の中A子が「みんな遊びたい。」と提案するが他のメンバーからの返答はなく沈黙のまま終わる。#2ではB子がA子の意見に賛成を表明し徐々に賛成の表明がある。その中A子は「嫌な子もいるかもしれないから。」と全員の気持ちをできるだけ汲み取ろうとする。#3ではメンバーが自分のペースで遊びたい気持ちを語る中、自然発生的に一周して自分の気持ちを言う動きが起る。その中でD子が遊びたくないと言いG男やA子から理由を聞かれるやりとりが起る。#4は十分ほどの沈黙の後自然発生的に遊びたい意志の確認がなされ遊びの内容をめぐる話し合いになる。その中で孤立傾向があったC子から意見が出されたのが印象的であった。#5は十分ほど沈黙の後不登校傾向のE男から「ドッジボールで遊びたい。」と切り出し自然発生的に遊びたいかどうかの気持ちが出られる。その中普段寡黙でほとんどしゃべらないG子が「遊びたいのはわかるけど何曜日か決めたい。」と言う。それを受けてA子とB子が決めようと動くが他のメンバーがふざけていて反応がなく終わる。#6では十五分ほどの沈黙の後C男が「僕遊びたいから決め

ていいですか。」と言い、C男を中心に遊びの内容が決定する。ここで一学期が終わり夏休みになる。夏休み明け三週間たって#7になる。#7ではB子から「遊びのことどうするの?」と投げ掛けがあり、話し合いに関心がなくふざけあっているメンバーもいる中で具体的な遊ぶ曜日が決まる。残り二十分ほど沈黙で終わる。

●第二期（#8、#9）
【個人的な日常生活の否定的感情についての話し合い】

#8は最初二十分ほど笑いながらの沈黙がある。その後A子から教師が決めた学年のルールについて反抗的な質問がある。また、その理由を語る。これに何人かの女子がA子を支持する。#9では前回のA子の提案に反対する男子とやりとりが続く。最後に休み時間に起こったA男とA子・B子・J子とのトラブルが話し合われA男が怒りを表明する。

●第三期（#10から#14）
【グループからの孤立が話し合われる】

#10では、このグループが始まる前の休み時間の行った学級での「こおりおに」の時にC子にタッチしない状況やC子が体育の時に体ほぐしでB子に触れず、逆にB子に触られたら泣き出してしまいう状況があり、それをめぐり話し合われる。その中でC子から三年生

を賞賛する声上がる。これを聞いてC子は安心する。

●第六期（#19と#20） 【グループの親密感の進展】

#19では十分ほどの沈黙の後D男がスポーツチャンバラをやりたいと言う。その後B子とJ子が中心となり、やりたい子とやりたくない子の多数決をとる。Faは「多数決だけでは決められないのでは？」と伝える。その後やりたい子とやりたくない子の気持ちのやりとりが少しあるが全体的な動きではなく個々に勝手なことをやっている感じで終わる。#20では最初にA子・B子・H子・J子から「クリスマス会をやりたい。」と提案がある。その後やりたくない人や欠席者のことを考えながらクリスマス会をやることが決定する。

●第七期（#21と#22） 【メンバーの気持ちのずれが表面化する】

#21ではA子からC子へ#16での不安な気持ちは今はどうかとの問いがありC子の不安について話し合われる。Faは、メンバーにC子に対する自分の姿勢を見つめるように促すが、C子がフィードバックされるのはしんどいというので表明はしてもらわない。A子が（学級の）輪に入りたくないのかと投げ掛けるとC子は五分五分と答え終了する。#22

●第四期（#15） 【女子全員のFaに対する否定的感情の表明】

#15ではA子・B子・J子が女子を代表してFaに対して否定的感情の表明を行う。Faに返答を求め、Faも揺らぎながらも懸命に答える。

●第五期（#16から#18） 【日常生活で感じていた様々な葛藤感情がもちこまれる】

#16は十五分の沈黙から始まる。その後A子が不登校傾向のE男に、A子自身が書く手紙（欠席者に書くお便り）をもらう時の気持ちについて尋ねE男との間でやりとりがある。その後C子が「私は、みんなのことが嫌いで、学校に来る時、少し憂鬱になる。」と語る。A子が「一人になりたいの？みんなと遊びたいの？」と尋ねるが、答えがなく中途半端に終わる。#17は日常場面から展開したグループ。（休み時間の後にケンカ状態でそのまま話し合いをすることになった。）休み時間の遊びをめぐり、みんなで決めた主張するA子と本当は嫌だったと主張するD子の対決が起こる。#18はC子の不安定な心理状態によりC子の希望で特設したグループである。C子が#16でみんなに嫌いと言って不安になってきた心境を語る。これに対して多くのメンバーから嫌いと言われた時の嫌な気持ちと同時に自分の本音を勇気をもって表現したこと

の時にいじめられていた話がでてB子が「そんなに三年生の時怖かったのか。」と語りC子の感じが伝わる体験が起こる。#11ではB子とJ子から「C子と仲良くしたいけどC子と話す仲間はずれにされそう。」と学級に内在する排除感情が語られる。また、A子からC子へ「話しかけた時逃げないで。」「仲良くしようとして質問してるんだよ。」と伝えるがC子へは伝わらない感じで終わる。#12の前日C子から「（学級の）円に入れてない。」という表明があり、おそれている感情が語られる。それに対してB子やJ子がアドバイスを送る。#12ではA子がC子に解決したのと尋ねる。十五分ほど沈黙。その後、F子・J男・C男・D子・E子・I子・B子・A子・H子・H男から「C子は、（学級の）輪の中に入っていると思う。」というサポート的な発言が続く。#13ではB子からG子が（学級の）輪に入ってなくて心配だという気持ち語られる。そこでG子に質問が向けられるがG子とはまどいを示す。#14では日常生活での怒り（学芸会の準備に対して）を表明したFaとA子の対決がある。その後G子にE子が迷いながら自分の思いを表明する動きが起こる。

は企画していたクリスマス会を実施した後のセッションである。A子がC子に前回中途半端だったのでもいいのかと投げ掛ける。C子はよかった気持ちと嫌だった気持ち半分ずつであると言う。その後Faがあるグループのクリスマス会での出し物（明らかに仲間はずれにされていた子がいたと感じた）を見ていて心痛んだことを伝える。それに対してA子は「そのグループは私たち？」と詰め寄り、Faは「そうだ。」と伝える。A子が仲間はずれにしていたB子に対して「何で仲の良い子の悪口言うの！」と投げ掛ける。B子は黙ったまま時間になる。（二学期が終わる。）

●第八期（#23） 【スポーツチャンバラをやることが決定する】

D男がスポーツチャンバラやりたいと言い数名から声があがり、やることが決まる。そして、A子を中心にとの時間にやるか話し合われる。沈黙が続き、J子が感情的に「みんな意見出してくれないと進まない。」と訴える。その後順次思いが語られ決定する。

●第九期（#24から#26） 【自己の表明をしないメンバーへの投げ掛け、そして表明】
#24はA子とJ子が自己の表明をしていない男子に対して自己の表明を求めるが表明がないまま終了する。#25ではA子が再度男子

だけでなく自己の表明のないメンバーに自己の表明を投げ掛ける。三名しか自己の表明がなくA子は泣き出す。それを見て二名のメンバーが気持ちを語る。泣いているA子の了解をとりグループを終わる。#26では最初にFaが自己の表明を助ける目的で前回の感想文を配る。沈黙がありながら多くのメンバーが自己の表明をする。最後に、A子がFaの促しで感想文を読む。A子の泣いた時の心境という言える環境をみんなで作っていきたいという思いが語られる。その後C子から「転校したい。」という本音の表明があり、それに対してD子が幼稚園の時に転校してきた自分の過去を語り、「この教室が楽しくなってきた欲しい。」と思いを伝え終了する。

●第十期（#27から#30） 【権力関係の問題を取り上げ、グループの安全感の醸成】

#27ではFaが前回のセッションの最後にふざけていたメンバーを残して叱ってしまったことに對して、先生のベルソナを捨てて平等な関係を築けていたかと悩みを語る。#28では#27にFaが自分自身の悩みを出し聞いてもらったことで率直に自分が気になっていることを出せるようになる。そして、Faから給食のデザートあげるかあげないかの問題を通して学級にある権力関係の問題を取り上げる。#29では前回出された給食の問題がすべての

メンバーが公平にいられるルールになり決定する。その後C子が自分の中に存在する差別感（嫌いな子の悪口手帳を書いていること）を語りメンバーから率直な表明を受け自分の在り方を反省し終わる。#30ではC男から給食のおかわりの不平等な問題が出され、公平なルールの提案があり、すんなり決定する。その後今まではほとんど思いの表明のなかったK子からB子がちよっかいけてくる話が出され、B子もすぐに謝り終了する。

●第十一期（#31） 【お別れ会についての話し合い】

B子・A子・D子・J子から「お別れ会がやりたい。」との表明があり、多くのメンバーが賛成を表明する。P男とN男が出し物をやりたくないことを表明する。Faが「（お別れ会することを）決定したい感じ。」とメンバーに投げ掛けるとA子がやりたくない人がいるかどうかかってから決定したいと言い、決定せずに終了する。

●第十二期（#32） 【いじめに対する対決】

#32では前日のC子に対するA子・B子・H子のいじめ（替え歌を作ったのからかい）に対してC子が真剣に怒りながら訴える。A子・B子・H子が、それぞれ、その時の気持ち

ちを語り謝罪する。Faも感情的にC子のつらさを三人にぶつける。まわりで見ていたD子やE子も自分の気持ちを語る。

●第十三期（#33） 【お別れ会の具体的な内容が決定する】

#33では最初にA子・B子・J子・H子から「お別れ会やりたい。」と再度表明があり全員賛成で決定する。その後内容の話になり会食もすることが決まり、具体的な会費についても話し合われる。その後、小グループに分かれて具体的に決めていく。

●第十四期（#34） 【メンバーそれぞれのグループの振り返り】

沈黙の中、それぞれのメンバーが自分のペースでグループを振り返りながら感謝を伝える。半分以上のメンバーが泣き出し、笑いもでるような一体感の中で最後のセッションが終わる。

五. グループ・プロセスの考察

グループの概要をプロセスの進展から考察していきたい。第一期では、内面の課題ではなく、メンバー全員に共通する「みんなで遊ぶ」というテーマを話し合うことを利用して非常に緩やかなペース（#7は二学期であ

る）でコミュニティ形成の模索が行われていたと考えられる。コミュニティの土台が出来上がったことよって第二期において個人的な日常生活の中での否定的な感情の表明が生じてきたと思われる。このような否定的感情の表明を通して相互に直接的な本音のぶつけあい、かわりが起こる。第三期においてC子やG子のように個人に焦点があたって本音の交流が起こってくる。焦点があたるC子やG子は、コミュニティから排除や孤立していると思われるメンバーであることが共通点として挙げられる。この段階は、コミュニティに入りきれていないメンバーへの相互信頼の発展の段階であると考えられる。第四期では、第二期の個人的な否定的感情の表明ではなく、全体での否定的な感情の表明が起こる。これは、第二期よりも激しいものになっている。これにともなう相互信頼の発展が第五期で促進される。しかし、第三期の時のような、コミュニティに入りきれていないメンバーという限定はなく、メンバーの誰に対しても起こり得る日常場面の葛藤から起こる相互信頼の発展である。第六期では、内面的な交流から離れ、クリスマス会やスポーツチャンバラの計画など親密感を促進する動きが起こる。第七期では、C子の今の感情に焦点をあてA子とのやりとりがなされたり、Faの心が痛んでいる思いを表明したり、A子からB子への

本音の投げ掛けが起こったりする。このような *here and now* に基づいた本音のところで深い交流が展開する。 *here and now* に基づく感情は、日常生活の葛藤から生じたものであると考えられるので、日常場面の葛藤に対する深い相互理解と自己直面といえる。第八期は、三学期であり期間的に空いたことも影響していると思うが、内面への直面から離れ、スポーツチャンバラの計画が話し合われる。

これは、コミュニティの親密感の促進で第六期と同じような動きである。しかし、決定の方法が、多数決をとるのではなく、個人が思いを語る中での決定になっており、より進んだ展開であるといえる。第九期は、A子やJ子から自己表明しないメンバーに対する対決が起こる。このテーマは、メンバーのコミュニティに対する参加意識を問うものであった。このようなやりとりを契機にしてC子から「転校したい。」という表明があり、これに対してD子が過去の自分の転校してきた時の思いを語る。これは、深い相互関係の中で生じてきた自己直面化だと考えられる。第十期では、Faの「先生としての平等な関係でない動き」に対する悩みの表明や給食の不公平の問題を通してコミュニティ内の権力関係を取り上げている。このテーマを契機として、今までの表明とは逆のC子自身のメンバーへの差別意識に対して他のメンバーとの対決が起

こり、C子の気持ちに変化していく。これも、深い相互関係の中で生じてきた自己直面化だと考えられる。第十一期では、内面への直面から離れ、お別れ会をしたいとの提案があり話し合われる。これは、コミュニティの親密感の促進と考えられる。第十二期では、第三期でメンバーから表明されたが取り上げられなかったC子への排除感情がC子からの対決という形で今ここの感情として取り扱い、深いところで交流することができた。この出会いは、スケープゴード化現象を実際に取り扱うことができたことを意味している。第十三期では、お別れ会の具体的内容が自由な表明を求めて決定していった。実際にお別れ会は、民主的で意欲的な運営がなされた。ここで、コミュニティの親密感が確立したといえる。第十四期は、終結であり泣きながらグループへの感謝を述べるメンバーが多くいる中で、何とも言えない一体感に満ちた感動の体験を味わうことが出来た。

六 おわりに

プロセスの進展の考察から筆者は、小学生に適用したグループにおいても基本的には、村山・野島（一九七七）が示したエンカウンターグループ・プロセスの発展段階と同じような流れをとると考えている。よって、小学

生においてもBEGは有効であるのが示唆された。また、日常生活の中（小学校現場）で行うコミュニティ・グループ（コミュニティ・セッションが中心のラージ・サイズのグループ）の特徴が見えた。それは、グループ・プロセスがコミュニティの成熟過程と重なり、排除・孤立、参加意識、権力関係の課題がコミュニティ成熟のプロセスに合わせて取り扱われることである。このコミュニティの課題に付随する形で、メンバー個人の問題が取り扱われると考えられる。この視点は、今後のBEGにおけるコミュニティ・グループの発展に一石を投じるものであると信じている。

〈付記〉本稿は、愛知教育大学大学院学校教育専攻教育心理学分野教育発達臨床領域修士論文「小学校におけるベシック・エンカウンター・グループの導入とその効果に関する研究」の一部を加筆・修正したものである。そのため、登場する児童のアルファベット表記が順序通りではなくなっている。

引用・参考文献

川口幸宏編 二〇〇〇 モラル・エデュケーション 八千代出版 P. 一九、二〇
村山正治・野島一彦 一九七七 エンカウン

ターグループ・プロセスの発展段階 九州大学教育学部紀要（教育心理学部門）、二一、（二）、七七一八四
汐見稔幸著 二〇〇〇 親子ストレス 平凡新書 P. 一五九

もりとしのぶ
●名古屋市長二城小学校



● 思春期・青年期のエンカウンター・グループに私が思うこと

本山 智 敬

私のエンカウンター・グループとの最初の出会いは、大学二年が終わる春に参加した、広島でのグループである。

大学院に入ってから、先輩方と企画して自分たちのためのエンカウンター・グループを楽しむこともあったが、次第にファシリテーターとしてかわることが多くなり、対象も電話相談のボランティア研修生や病院スタッフ、ケアマネージャ、子育てに悩む母親など、多岐にわたった。その中で、最も多くかわってきたのが、高校生や看護学生といった、思春期・青年期の人たちとのエンカウンター・グループである。私がそれらのグループでの体験をもとに考えてきたことは、ある意味、未熟ながらも少しずつ形成されつつある私のエンカウンター・グループへの思

いの中核を占めているような感じがしている。そのことについて、少し述べたいと思う。

高校生とのエンカウンター・グループ

私はこれまで、高校生とのエンカウンター・グループを六グループ実施し、五十名の生徒とのかかわりを持ってきた。高校生を対象としたエンカウンター・グループはなかなか行われていないので、グループの紹介から募集、実施、その後のフォローアップまで全て自分たちで企画して行なった。いずれも三日間の通いの形式を取った。

そこで私がまず感じたことは、グループについての丁寧な説明をすると、希望者が少な

からずいるということである。高校生はいくつも様々なことに思いを巡らせているけれども、日頃はそれを伝える場がない、あるいはそういうことを真剣に聴いてもらえないだろうと思っているところがあって、こういった企画があることを知ると、「まあ自分が参加しても実際に話すかどうかは分からないけれども（そこが話せそうな場であるのかどうか分からないが）、何となく面白そう」とエンカウンター・グループに興味を持つようになった。グループが始まると、はじめはやはり緊張もするし、もたもたとする。しかし、次第にそれぞれの人達の誠実さが見えてくると、少しずつグループへの所属感も芽生えてきて、気持ちのついてきているのが伝わってきた。そして自分のグループに対する意識が変わっ

できていること、また自分と同じように周りの人もこの場を大事に思っていることを感じると、そこで初めて少しずつ自分の本当の思いが語られていった。また、そうした真剣なやり取りも長時間続くのではなく、途中で何度も雑談を挟みながら進んでいくのも特徴的だった。この時の雑談はとてもおだやかであたたかく、日頃からとてもまじめな高校生の中には、「一見無意味で時間の無駄のようだけれど、なるほどこんな楽しみ方があったのか」と感想を述べたものもいた。

後半は、自分たちが共に過ごしながら少しずつ関係が居心地のよい方向へと変わってきていることを意識しているように思えた。またそうした関係の形成は、初めからこうしななければならぬと決められている中で作ってきた訳ではなく、自分たちでそうしたくて作り上げてきたのだという感覚に支えられているようだった。あるグループでは、その後も交換日記のような形で継続され、引き続き自分たちでグループが企画されたこともあった。

看護学生とのエンカウンター・グループ

看護学生の場合は、学校の授業としてエンカウンター・グループが行われるため、高校生のような自発参加ではなく、強制参加であ

るという点が特徴である。それゆえ、参加意欲に個人差があり、ほとんど意欲のない学生も中にはいた。そもそもエンカウンター・グループは自発参加のメンバーとの間で行われるのが通常であるが、参加させられて、グループ体験をそれほど望んでいない人たちとどのように進めていくかが私の中の大きなテーマであった。しかし、回数を重ねていくうちに、エンカウンター・グループならばそうした学生ともやってみることが可能ではないかと思えてきた。元々エンカウンター・グループにはあらかじめ決められた形というものはないので、私の方から先にこうあるべきといった様な枠組みを出さなければ、学生は自分たちで自由に進めていくのだということを経験的に感じるようになってきた。例えば遊びに興じる様なことになったとしても、場繋ぎ的なものではなく、お互いがより打ちとけ合っていくとする学生なりの工夫であったとしたら、それは学生が考える一つのエンカウンター・グループのあり方なのだと理解できた。

初期の頃から学生の中に、この場は自分たちで作っていきけると感じられてくると、各人の力が抜けて余裕が出てきて、お互いを気遣う気持ち膨らんでいった。そしてそうしたグループの変化を感じるようになると、次第にそれぞれ自分にとって今大切なテーマを皆

に少しずつ語り出していった。そして当初は受け身的に参加していた学生も、最終的にはこのグループはさせられて作ったのではなく、自分たちで作りに上げていったものだと感じていったように思う。

思春期・青年期のエンカウンター・グループで私が大切にしていること

私が高校生や看護学生とのエンカウンター・グループでメンバーから感じた、「このグループは自分たちで作っていった」という感覚は、彼（彼女）らにとっては非常に大きな体験だったのではないかと思う。日頃から先の目標が設定され、それに向けて最善の方法で望み、望ましい結果を出していくということとを常に求められている彼（彼女）らにとっては、「自分たちで自由に作っていきける」エンカウンター・グループは、ある意味脅威であり、新鮮でもあっただろう。「こうしてはいけない、ああしてはいけない」と禁止されることが多い日常とは違って、自分たちが居心地のいい場を作っていくために自由に工夫していきける体験は、最初は恐る恐る行われていくが、こちらが「それでいい」というメッセージを伝え続けることによって、次第に気持ちのよいものへと変化していっただろう。これらは、ファシリテーションの枠組みか

らいうと、メンバーの自発性が高まるような雰囲気はいかに形成していくか、ということである。

エンカウンター・グループの中でメンバーの自発性が高まっている状態とは、単に積極的、活動的であるということではなく、自分がこのグループで何をしたいと思うのか、自分にとっての参加の意味が明確であり、かつそれを他のメンバーと共有できている状態ではないかと思う。セッションの間ずっと黙っていたある高校生は、他のメンバーから尋ねられた時に「普段は良く話す方だけれど、ここでは人の話を聴くことが自分にとって大事なのではないかと思えてきた」と答えた。彼女の沈黙は自分なりの意味が存在し、このグループの中でそれが行われているということとが彼女にとって大切だったのである。また、メンバーがグループに対して否定的な感情を持っていたとしても、それがグループの中で語られ、自分の思いが他のメンバーと共有されていくならば、それも自発性が高まっている状態であると思う。

そうすると、メンバーの自発性が高まっていくためには、その時その時の自分の思いを肯定的であれ、否定的であれ、その場で自由に語ることが出来るようなグループの雰囲気が作られていることが必要となってくる。私の場合は、初めは前日の感想を皆で語るとこ

ろから入ったり（いきなり「いま、ここで」の思いを語るのには抵抗があるような場合）、自分自身が率先してその時の思いを語るように心がけたりといった工夫をしている。

徐々にメンバー個々の自発性が高まってくると、グループ全体としても安心感が高まり、お互いに援助的になってくる。気がかりなメンバーがいると配慮の手がすつと差し伸べられたり、大人しいメンバーにも自分らしさを発揮できる場が作られたりする。そして、そういったグループの雰囲気に支えられて、一人、また一人とこの場で本当の自分を知って欲しいと今の自分にとって大切なことがらが語られたりする。この段階になると、周りのメンバーも丁寧に語り手に寄り添い、時には涙する者も出てくる。

グループの流れを追ってみると、①メンバー個々の自発性が高まっていく段階、②メンバーが相互に援助的になっていく段階、③個人の重要なテーマが語られるようになる段階、の三段階が存在するように思う。思春期・青年期のエンカウンター・グループでは、とりわけ③の段階まで行かず、②の段階でとどまったとしても、そうしたお互いの関係のあり方自体が変化し、それらを自分たちの手で作り上げてきたという意識が持てたとしたら、それだけで十分に意味があるのではないかと思う。ファシリテーターとして最初から

どこか重要なテーマを語り合うことに重きを置いてグループに臨むと、せっかくメンバーが作り上げていこうとしている、自分たちなりのエンカウンター・グループの過程をおぼりにしてしまうような気がしている。③の段階は、②の段階までが十分に体験された時の結果的な発展段階として捉えた方が、私の場合はそれまでの過程を自由に、ある意味自分自身も自発的に楽しむことが出来るように思う。

今のところ私の中では、「自発性」が大きなキーワードになっている。それはエンカウンター・グループで以前より大切にされ、今更取りたてて言うことでもないかもしれないが、改めて自分のファシリテーションに重要な指針を与えてくれるように感じている。

もとやまとのり
● 西南学院大学学生相談室

●私とグループの関わりを振り返って

妹 尾 奈津子

グループとの出会いとその体験

私自身のグループとの出会いは、聴講生をしていた時代に、たまたま同じ聴講生仲間から、「グループって、いいよ。エンカウンター・グループっていうのがあるんだけど、知ってる？きつといい経験ができると思うから、行ってみたらいいよ。」と勧められたことがきっかけでした。正直なところ、いい経験」というものがなんなのかよく分からないまま、九重のエンカウンター・グループに参加したのです。そこでの体験は、本当に怒涛のようでした。今まで出会ったことのない体験で、その当時は、傷つき体験に近かったのではないかと思います。最初にグループの

皆がどんなことを思っているのかも分からずに戸惑い、沈黙の緊張感と居心地の悪さを感じているかどうか聞けず、困惑しました。私は、ファシリテーターに依存し、なぜファシリテーターが発言されないのかについて詰め寄ったことを覚えています。

現在の思い

今になって振り返ると、それは、ファシリテーターという存在に依存している自分があり、ファシリテーターもメンバーの一員なのに、役割を持っているはずの人という甘えがあり、それが満たされなかったことへの不満から、勝手に傷ついたと思っていたことを知り、恥ずかしくてたまらなくなりました。申

し訳ないことをしたという罪悪感もあります。沈黙のなかにそれぞれの存在や、価値観や、思いがあったのだと思います。

その後、いくつかのグループでのメンバー体験などのなかで、ファシリテーターの在り方は、その個人によって異なり、またメンバーの在り方も、その個人によって異なり、そのなかでグループが動いていくことを身をもって感じました。そして、最初の出会いへの関わり方も、そのファシリテーターやメンバーにより全く違ったものになります。当り前のことながら、いつも不思議で、新鮮だと思っています。

現在は、自分がファシリテーションをする機会を持つこともある状況になってきました。そのなかで、グループとの出会い以来、今で

も沈黙の居心地の悪さを気遣うということについて考えるところがあります。それぞれの人が沈黙をどう感じているのか。沈黙で守られていることもあるし、沈黙で不安になっていることもあるという最初に感じた時の体験は、その後、グループに参加する度に、それぞれのグループで違った体験ができるなかでも直面することがあります。グループが始まってすぐに感じる沈黙は、人によっては、かなりの負担になることもあるようで、沈黙を味わうことは、あまり居心地良いものではないようだと感じています。

現在の取り組み

私は現在、非常勤として、大学の学生相談室でのカウンセラーと、思春期・青年期を主対象とした単科精神科クリニックのデイケアで臨床現場を持っています。

今回は、大学でのグループ実践を通して、私のグループへの取り組みを考えたいと思います。

大学では、年一回二月に三年女子対象として開催されている、就職課主催の「女子学生のための就職セミナー（以下、セミナーと略す）」という就職活動対策合宿があります。このセミナーは、平成十五年の時点で、実施されて四回目となっております。このセミ

ナーで、グループワークというものがあり、それをカウンセラーが担当しております。前任者の学生相談カウンセラーが初めに作られた構造を変更し、引き継ぐという形で、私はこのグループワークを担当しています。主催が就職課ですので、立場としては、私が所属している大学の「健康・スポーツ科学センター」からの協力という形で、派遣されています。これを現在まで、二回担当しました。実際のところは、就職課のスタッフの方と手探りで、その時期に参加する学生達が、何を求めている、こちらが何を提供できるのかを話し合いながら、手探りで実施してきました。初めから、就職活動へのモチベーションをあげることで体が目的であったのですが、回を重ねる中で関係スタッフで話し合った結果、そのセミナーで求められていることが、就職活動に対しての不安の解消・軽減で、就職活動を乗り切っていくための通過儀礼的な意味合いもあるであろうということになり、その目的に沿う形はどんなグループなんだろうと模索しながら実施しました。

このセミナーは、参加学生にとっては、一泊二日の日程が五回分実施され、スタッフにとっては、五泊六日で、一日一日違う学生に対応する状況となっております。全学部三年女子からの希望者を全体で二百名募り、各日の定員は四十名となっております。参加者

は、このようなグループの経験者はほとんどいないと言っている一般の学生達です。

何をグループですることが、就職への不安を解消・軽減するという目的に沿うのか考えました。私がこのグループ実施において考えたことは、お互いがグループの中で話すことで、皆が同じように抱えている状況を確認でき、少し安心するのではないだろうかと思いました。また、それぞれの就職に対する考えを語ったり聞いたりすることで、自分の就職への考え方を再認識したり、他者の考え方を知る機会となるのではないだろうかと思いました。私に与えられたグループワークの時間は、午前中に約一時間半、午後二時間弱という、かなり時間としては短い時間でした。その後は、マナーの講座や、履歴書添削、面接の練習が続きます。このグループワーク自体の流れはもちろんです。が、セミナー全体の流れのなかで、このグループワークの持つ役割もあると考え、どんな構造が良いか考えました。

結果として、構成と非構成を組み合わせた構造とすることにしました。予め、グループには友達同士が入ることがないように、ランダムに分けられていました。そもそも、グループ経験が殆どない学生が対象ということもあり、突然知らない人とグループを共にするというのは、何を話して良いか分からない

緊張を引きずり、訳の分からないまま終わってしまふ体験となるだろうと思ひ、最初の約三十分の時間に、“自己理解・他者理解”をテーマとし、次の小グループ（ファシリテーターを含め六、九名）での関係性作りとなるようなエクササイズを導入した、構成エンカウンターを実施しました。非構成（準非構成）という方が当てはまるのですが）では、“就職に対する自分の考え”を考えていく時間として設定しました。

小グループに分かれ、非構成とすること自体が、よい選択だったのかは今だに疑問が残りますが、その中で、それぞれの置かれていく状況を確認でき、皆がライバルであり、一緒に乗り越えていく仲間なんだと実感されたようで、当初の目的の“不安の解消・軽減”には繋がったのではないかと思います。また、このグループ自体が、このセミナーへのモチベーションとしての機能を果たしているとも思われました。そして、このセミナー自体が、就職活動へのモチベーションへと繋がったと思われまふ。

このグループのファシリテーションをすることで感じたことは、ファシリテーター自身がグループのなかで感じたことを伝えていく大切さです。ファシリテーターが発言することで、メンバーに対しての安全感とモデリングの役目を果たしていたと思ひます。ただで

さえ就職に対しての不安を抱えながら参加している学生に対して、しかも短時間のセッションの中で、どのようにグループ内で安心してそこにいることができるかの環境をまずは作ることが大切だったと思ひます。それぞれの人が感じているかもしれない沈黙への居心地の悪さを言語化することによる、ファシリテーターの積極的なグループへの関与により、プロセスが促進されていくという経験をしました。たった約三時間の非構成のセッションでもあるため、沈黙への耐えられなさでグループを終えることは、参加する学生にとって、またセミナー自体の目的にとつてもよい結果へとは繋がらないだろうと考えたためです。ただ、その際に、話すことを強要するのではなく、それぞれのスタンスがあることも併せて伝えておくことが必要だと感じました。そのことにより、更に安心できるグループになっていった気がしています。

このグループワークをすることによって、違つたメリットもありました。就職課という他の課との連携のなかで、学生や職員などに、学生相談の存在を知ってもらえる機会でもありました。また、私自身が、学校組織のなかにある人的資源（就職課のスタッフや、就職担当教授など）と知り合える機会となり、学内で連携しやすくなりました。更に、参加した学生や、他課からの紹介など、学生相談自

体に訪れる抵抗が少なくなるという利点もありました。このように、他課の企画でのグループは様々なメリットがあります。学生相談だけの自己理解セミナーなどを実施しても、参加者が集まらないため、今後はこのような他課との連携でのグループを展開していくと学生相談の機能も広がっていくのではないかと思ひています。

せのおなつこ
せりかわ病院



●エンカウンター・グループと私

安田 一聡

私がエンカウンター・グループ（以下EGと略す）に出会ったのは五年前（一九九八年）である。以来、EGの魅力に惹かれ、参加を繰り返し、ファシリテーター（以下Facと略す）としての経験も積んできている。本稿では、そのような私とEGとのかかわりを振り返るとともに、今後の展望についても述べてみたい。

初めてのEG体験

私が初めてEGに参加したのは、一九九八年の大学院のゼミ合宿であった。ゼミの指導教授は畠瀬直子先生だった。このEGの中で私は、長年ずっと抱えていた自分の問題について話した。それは、対人関係でいつも他人

との間に距離を感じてしまう、というものであった。話している間、感情が込み上げてきていたが、なんとか抑えながら話していた。話し終えたときに先生がやさしく言葉をかけてくださり、こらえていた涙が一気にあふれ出した。しばらくその涙は止まらなかった。そして、自分がこんなにも感情を抑え込んで生きてきたことに気づかされた。

人前でこれほど感情をあらわにしたのは初めてのことだった。その意味で、この体験は私にとって非常に貴重なものであった。しかしこのときはまだ、自分がEGに深くかわっていくとは考えてもいなかった。

九重EG

その後も対人関係の問題はあまり改善されず、大学院の仲間とも距離感を感じながら過ごす日が続いていた。それを見かねてか、畠瀬先生は私に九重EGへの参加を勧めてくださった。多少ためらいはあったものの、人との深いかかわりを経験したい一心から、思い切って参加することにした。

九重のグループは、「深く重い」という印象のグループであった。それぞれのメンバーが自分の抱えている問題について話していた。そんな中で私も自分の問題について話した。しかし、すぐにスッキリするというわけではなかった。少ししてから、別のメン

バーが自分の問題を語った。驚いたことに、それは私の問題とかなり似通ったものだった。私は「この人と語り合いたい」と思った。そしてセッション外の時間に、その思いはかなった。非常にリラックスした、楽しいひとときであった。それは、これまでに経験したことがないような、幸せな時間であった。

このメンバーとのかかわりによって、私は、求めていたものを得ることができた。このグループが終わるとき、私は「大事なことをやり終えることができた」と感じた。このグループは、私にとって非常に満足のいくグループであった。そしてこれ以降、私はEGに深くかかわっていくことになった。

修士論文

修士論文ではEGを取り上げた。自分の参加経験と他者へのインタビューを踏まえて、EGへの参加が本人にとってどんな意味があるかを考察しようと考えた。参加経験について記述することは、研究のためという以上に私自身のために、必要なことのように思われた。

私は九重のあとにも由布院、清里と参加を繰り返して、それぞれのグループで研究協力者を得て、参加経験についてインタビューすることができた。研究計画としては、それぞれ

の参加経験の共通部分を抽出して、参加経験の普遍的な意味を考察する予定であった。しかし、それぞれの参加経験は非常に多彩で、考察は難航した。いくつかの断片的な共通点は見出されたものの、あまり大きな成果は得られなかった。ただ逆に、参加経験の多様性や個別性を積極的に取り上げていくことは、研究方向の一つとして重要なのではないかと思われた。

CCRでの実践

大学院卒業後、私は大学内に新しく設置された「コミュニケーションセラリングルーム」(CCR)で働くことになった。私はここで、学生を対象にしたEGを担当する機会に恵まれた。毎週九十分ずつの継続型のグループである。担当スタッフは私一人で、メンバー募集のチラシ作りからFacまで、すべて一人で行っていた。

一年目、参加者がたくさん集まることを期待していたが、実際やって来たのは二名だけだった。どうなることかと思ったが、それぞれ友人を連れてきてくれて、四、五名が参加するようになった。内容的には雑談的なおしゃべりが中心で、グループがなかなか深まらず、苛立ちを感じた。夏休みをはさんで後期に入り、最初の週は四名集まったが、次の

週から一名しか来ない週が続き、ついには誰も来なくなってしまう。年末まで続ける予定だったので、誰も来ないグループの時間を毎週むなしく過ごしていた。

次年度は前期・後期それぞれ六セッションずつで終了とした。前期、応募してきたのは一名のみだった。その後、もう一名増えはしたものの、一名しか来ない週も多く、あまりグループをやった気分にはなれなかった。

後期は募集のしかたを少し工夫してみたが、集まったのは三名であった。その後は友人を連れてきてくれて、四、六名が参加するようになった。このグループは、メンバーの参加意欲が高く、EG経験者も二名いて、ずいぶん充実したグループになった。終了後のメンバーの感想からは、メンバーの満足度の高さがうかがわれた。ようやくグループらしいグループができたという感じだった。

この二年間の経験からは、次のようなことを学んだ。まず、学生はEGのような得体の知れないものにはなかなか近づいてこないということである。ただ、このようなグループ自体へのニーズはあるように思われるので、募集のしかたを工夫する必要があると感じた。また、自分のファシリテーションについては、理想のグループ像に近づけようと焦っていたこと、自分のコンディションによってグループの輪に入りやすいときと入りにくいときが

あることに気づいた。

グループの運営はなかなか難しかったが、曲がりなりにもFaccの経験ができたことは、私にとってたいへん貴重であった。

KNCでのFacc体験

私はCCRの勤務と同じ時期に、関西人間関係研究センター(KNC)のFacc体験グループ(担当スタッフ・松本剛先生)にも参加していた。CCRでの実践が少しでもいいものになるようにとの思いからであった。

このグループは、参加者が相互にFaccを体験し、ふりかえりを重ね、Faccのあり方を共に考えるというものである。各セッションごとに二名ずつFaccとなり、約九十分のセッションを体験する。そしてセッション後に五十分ほど全員でふりかえりを行なう。スタッフは前半のセッションの間はオブザーバーとして観察し、後半のふりかえりで一緒に参加するという形であった。

このグループに参加した当初は、慣れない場にとて緊張した。Faccをやるときはなおさら緊張した。また最初のころは、Faccをやるととても窮屈に感じた。Faccとしての役割意識が強かったのだと思う。しかしそれも回を重ねるごとに和らいでいて、Faccをやってもかなりリラックスしてられる

までになった。そして、リラックスして楽にしている方が、グループに対して有効な働きかけができることを学んだ。

自分のファシリテーションのまずさでグループの雰囲気が悪くなったりすると、落ち込むこともある。また、ふりかえりで自分の至らない部分を指摘されるのはつらいものである。でもそのような失敗を繰り返していく中で、徐々に自分らしいファシリテーションのあり方が身についてきたのではないかと感じている。今後も自分のファシリテーションの質を高めていくために、このグループには引き続き参加していきたいと考えている。

現在の私と今後の展望

現在、私は京都府の舞鶴市と宮津市でスクールカウンセラーをやっている。初めての仕事なので、まだまだ模索中といったところである。チャンスがあれば、EGなども取り入れていきたいとは考えているが、まだもう少し時間が必要かもしれない。

七月にはオランダで開かれる6th World Conference on Person-Centered and Experiential Psychotherapy and Counselingに参加する。EGも行なわれ、世界の研究者たちとのグループが体験できる。今後の実践へのよい刺激になることを期待している。

EGは今では私の大切な柱となっている。今後も自分のライフワークとして、じつくり取り組んでいきたいと考えている。この先、自分がどのような方向に進んでいくのか、私自身にとっても興味深いところである。

● やすだかずとし
スクールカウンセラー



●病院でグループアプローチを行って行く上で思ったこと

―当事者の力―

常 田 修 一

はじめに

今回たまたま原稿の依頼をいただきました。まだ少ない年数ですが、今までグループに関わってきたことを振り返り、私が今後どういった方向に進んでいったらよいのか、考えさせていただいたと思います。

学生時のグループ体験

初めてグループに関わったのはエンカウンター・グループでした。なぜエンカウンター・グループなのかというと特に理由はなく、惹かれたからということでもありませんでした。そのころロジャーズに惹かれており、ロ

ジャーズの行っていたものにエンカウンター・グループというものがあり、それは専門家でなくても参加できる、といったことから参加したのでした。そのころ大学院に入ること希望しており論文を書く必要があったのですが、論文を書くのに身近にテーマにできるものがありませんでした。ほんやりと、これを扱いたいと思うものはあったのですが、それは実際に臨床の現場にしなければ扱えないようなテーマで身近で体験できるものではなく、それをテーマに論文を書くことは早々にあきらめていました。そのテーマに代わって論文の題材を探す必要があり、そのため、エンカウンターグループに参加、といった理由もありました。

人間関係研究会の案内に載っていたグルー

プに参加したのですが、初めて参加したグループでどんなことを話したのかははっきりとは憶えていません。しかし初めて出会った人たちと、普段は話さないようなことを話していたような気がします。そしてエンカウンターグループに参加する中で、自分についての発見もありました。身近な状況でも私は人と距離をとろうとすること、私自身が人と距離が短い状況に常におかれると居心地の悪い思いをすること、ということを感じていました。そして私にとってはグループはどうも苦手なもので、人の中に入りきれず、最後には居心地の悪い思いをして終わる、ということが多く、私にはどうも合わない、という感じを強く感じるようになっていました。しかし一方で、グループの中で体験し語ったり、ま

た人に関わることで大きな利益を得ている人がいるように思え、この方法は有効な方法なのではないだろうか、とも思っていました。

「出会う」、ということを根底においたこのグループに親しみを感じてはいたのですが、その中で他者と出会える人たちをうらやましく思い、私自身は「他者と出会いきれず居心地が悪い」という自分に出会ってしまい嫌気がさしていました。はじめは、人と出会えるようになるのが私の課題だ、と思って頑張つてグループに出ていたのですが、あんまり無理をしても、あわないものは仕方がないと思うようになり、そういった印象を持ったまま次第にエンカウンター・グループからは遠のいてゆきました。

病院集団に入つてゆく

その後、精神科の病院に就職となりました。私にとって初めての就職ということもあり、また、職員の数が三百名と多く部署も多いためなれるのに時間がかかり、緊張の毎日でした。その病院には以前は心理士がいたのですが私が入ったときにはいなくなつて一年以上たっており、どういった仕事をしていったらいいのかもわからない有様でした。

入るときに、好きなことをしてよい、といわれたのですが、自由に仕事ができる反面ど

うしたらよいかわからず、心理士が何人もいる病院をうらやましく思つたりもしていました。

相談室という、精神保健福祉士が何人かいる部屋に入れてもらったのですが、同期で入った精神保健福祉士が初任者研修として各病棟を回ることとで、それを見て、上司に相談して私も各病棟をまわることになりました。研修として各病棟をまわらしてもらい、それで少しづつ慣れてゆきました。

デイケア集団に入つてゆく

以前おられた心理士がデイケアを立ち上げ責任者をしていたということもあって、はじめからデイケアにも入らせていただきました。はじめはプログラムに入らせていただき、活動と一緒に参加させてもらっていました。

そのうちあるプログラムが終了することになり、何か担当しましょうかと私がいうとそのまま担当することとなりました。初めての担当ということとで、どうしようかと思つたのですが、その少し前に大島（一九九三）を読んでいた、内容が面白そうに思えたため、そのまま行うこととなりました。グループの内容は常田（二〇〇二）にも記載されています。

そのグループは、オーブン・エンドレスで毎回私がテーマを出し、それについて話して

みるといった内容でした。例を挙げると、「今年の抱負」「コミュニティ・マップづくりー私のお気に入りの場所、私はこの場所（お店、施設）が好き」「セールスマン撃退法」などです。グループをいざはじめてみると、デイケアのメンバーは意外に自分のことを話して見ることが好きなのではないだろうか、みなに話してみたいことを持っているのでは、と思うようになりました。普段は、休憩時間などでも集まって話すことがあまり見られなかったのですが、グループに誘ってみると参加し、グループ中も案外話し、しかも、その人の意外な趣味を滔々と話したりする姿をグループ中によく見かけました。自分の趣味をテーマにした回では、どこそこに仕立てシャツの店があつてそのシャツがよいという話や、古銭を集めるのが好きなどと、その人の意外なことを聞かせていただいたりしました。

また、話を聞いてみるとこの人がこんなことを考えていたのか、と知ることもありました。電話のセールスをどうやって断つたらよいか、という話になったとき、セールスの人が話しかけてくる電話をしばらくおいたままにしておくと相手が電話を切っている、という意見を言つたメンバーがいました。その方は普段はメンバーと話がかみ合わないことが多く、他メンバーに一方的に話しかけていっ

ていると思ったら、一人であさぎ込んだりと、私はその人を「困った人」と見ていました。しかしグループ中のその人が話された事から、私にはそれまで気づけなかった、その人の意外な一面を見ることができました。しばらくそのグループを行って、メンバーのいろいろな話を聞かせてもらっていました。

社会生活技能訓練を取り入れる

勉強会に出たり本を読んだりしているうちに、精神科の領域では社会生活技能訓練（以後、SSTと省略）が広く行われていることを知り、行ってみようと思うようになりました。そのときのデイケアのプログラムとしては、居場所の提供のプログラムがほとんどで、社会復帰の方向を目指すプログラムがないように思え、SSTぐらい入れたほうがいいのではないかと思つて始めてみたのです。SSTでよく行っていたのは問題解決技法という形式でした。参加者に、「困っていること」や、「こんなふうになりたいこと」を出してもらい、それについて皆でどうしたらよいか考えてみる、というような形なのですが、おこなってみると、参加者の能力を発揮できるグループなのではないかと思ひました。

例えばある時「愚痴ばかり自分に言っている母とどうつきあつたらよいか。母は自分の

悪口ばかり言うので話したくない。」という、何とかしたいことが出されました。どうしたらよいか他の参加者に意見を聞いてみたところ、主治医から母に言ってもらう、愚痴を言われると嫌であることを自分で母に言う、という意見がまず出て、そのうち、母親の方もストレスがたまつていて言いたいことがあるかもしれないから、お母さんの方がカウンセリングとかを受けたらいいかも、というように母親の事を心配する方向にも話がいったのでした。この間、スタッフは特に意見を言うこともなく、参加者が話す意見を聞いていたのです。当事者には能力がある、ということとをSSTを通して、その一端を知つたように思ひます。

「べてるの家」を知る

—当事者活動の凄さ—

その後、「べてるの家」を知るようになりました。「べてるの家」は精神障害者のコミュニティ、と言えらると思ひます。報道番組で取り上げられたり本が出たりしています。心の病氣を持つ当事者が、昆布や介護用品、「精神分裂病を語る」という名前のビデオまで売り、会社を作つて、北海道の浦河という人口一万六千人の町に百五十人ものメンバーがいるという、当事者のコミュニティとなつ

ています。浦河べてるの家（二〇〇三）には以下のように書かれています。「今から二十年前に協会の片隅で、二、三人の回復者が集まり、昆布作業をしたのが始まりです。又十年前に回復者が集まり『自立したい』『自活したい』『社会に貢献したい』という願望のもとに会社を設立しました、社会福祉法人も立ち上げました。そして、会社を作つて十年がたちました。」

べてるの家では、問題が生じるたびにミーティングが開かれ、そのことについて全員で議論がなされているとのことです。盗みなどをして困る人をべてるに受け入れるかどうかをめぐつてミーティングが開かれたり、お金が無くなると暴力を振るうメンバーをどうするかについて本人も含めて話し合つたり、「宇宙船で飛び立たねばならないので襟裳岬までゆく」というメンバーに対して仲間達が引き留めようと説得したり（横川、二〇〇三）、当事者同士の働きかけが多くあり、しかも治療的な役割をとっているように思ひます。

こういったものを間近に見て、病院で私の行っていることは何なのかと思うようにもなりました。病院のデイケアという保護的な環境で、当事者は様々な能力を発揮することや、経験を行うことを防がれてしまつていゝのではないかとも思ひ、病院で働くことの狭さ

を思ったりもしました。もともと、私は私の
できる範囲のことをするしかなく、グループ
を通して参加者が主体性を発揮することを、
微々たるものですが目指してゆくしかな
いと思っています。

べてるについてはまだまだ消化し切れてい
ない面が多いのですが、重要なことである
という感覚があり、今後も見学にゆきつつ、私
自身の今後の臨床を考えてゆこうと思ってい
ます。

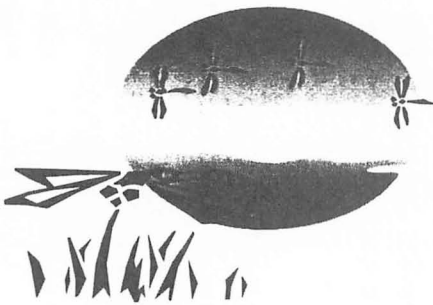
引用文献

大島啓利 一九九三 デイケアにおける集団
療法の試み 広島修道大学臨床心理学研究
常田修一 二〇〇二 デイケアプログラム
「グループ・ワーク」実践報告 日本人間性
心理学会第二十一回大会研究発表論文集、
一三六

浦河べてるの家 二〇〇三 浦河べてるの家
総会資料

横川和夫 二〇〇三 降りていく生き方 太
郎次郎社

ときだしゅういち
● 行橋記念病院



●私の考えるエンカウンター・グループの新しい展開のための「種」

鎌田道彦

まず今回、私の個人的な思いを表現する機会をいただけたことに感謝致します。私は、これまで特にエンカウンター・グループ（以下EG）の実践と研究を行ってきました。また小さい頃から私の育ってきた環境がグループやコミュニケーションを大事にしている環境であつたので、そういった環境で育ってきた自分にEGとご縁があることを幸運に感じています。しかも「場のいかた」という点で、EGを通して今までと違った新しい体験をすることができております。

さて「新しい展開の芽」というテーマをいただいたのですが、今回述べさせていただくことは「芽」が出てくるまでの過程または「種」の部分にあたるところにいます。今回は抽象的で少し当たり前のことになるかもしれませんが、

れませんが、私自身のEG経験から生じた問題意識を通して、現在取り組んでいる研究テーマをEGの新しい展開の芽につながることを願って述べさせていただきたいと思ひます。

今回のテーマとの関連で印象に残っている私の体験として、高校生を対象としたグループにスタッフとして参加した初期の体験が挙げられます。このグループは毎年、六泊七日の合宿で行われ、メンバーは全国各地から集まります。自発的に出会いを求めて参加してくるメンバー、親や関係者の勧めで参加させられてくるメンバーなど動機付けは様々ですが、メンバーそれぞれが何かしらのニーズを持って参加してきております。ここで出会いさせてもらっている高校生からは特に親密感

やつながりなどを求めているのだなあと感じます。中には親などがなんとかグループ体験をきっかけに本人に安定して欲しいという思いで、がんばって宿泊場所まで連れられてきて参加するメンバーもいて、同じ高校生というだけで「参加意欲、動機付け、パーソナリティ」などメンバーの質は多様だと思ひます。グループの実際の内容としては「グループタイム、全体の活動、講話を聞く」など多様なプログラムで構成されています。このグループにおいて、私はいくつもあるスモールグループの中の一グループのお世話係という形で、合宿期間中は食事から宿泊までメンバーと一緒に時間を過ごすことになります。グループタイムは十五セッションほどあり、それぞれのグループで自由に時間を使っている

のですが、主にグループの中で話し合いたいことを話したり、少し構成課題を入れるなどの工夫をしています。当時は、私自身EGのことを勉強し始めたばかりで「非構成的EGや構成的EGなど、EG技法はこうである」というような表面上の技法にとらわれることで、以下のようなことが起こりました。例えば「非構成的に行ってみよう」と話題が出てくるまでゆっくりと待っていると、私としては沈黙をゆつくりと感じていられても、メンバーにとっては不安でたまらない、窮屈で耐えられず沈黙を打ち破ることもできない、こんなことをやりに来ているつもりはなく、ただ遊びたいなどの気持ちが起こりました。また「構成的にエクササイズを使っていれば大丈夫」と思い、エクササイズを入れれば「こんな子どもみたいなものを出してバカにするな」とさせられ感を表現します。高校生ということもあって、反応が素直に出るところが一つの面白さでもあります。まだ技法を知らないでやっている時の方が、技法に頼らず試行錯誤でやっているの、自分らしさが出ていて生き生きしていたように思えますし、今から思えばそういった気持ちでメンバーから出てきたら、柔軟にそれを扱えばいいのですが、当時は「グループとはこういうものだ」という固定観念があるために、柔軟に扱うという発想が浮かばず、上述したような悪

循環に陥ってしまいました。要するに私の意図や提供しようとしていたことが、メンバーのニーズやプロセス、メンバーの特徴に合っていなかったことになります。従来のEG技法がこうであるという発想や概念が、実際のメンバーの状態やプロセスをみることで、また自分自身で感じ、考えることを困難にさせていました。逆に翌年などは、メンバーなりの遊びたい気持ちや遊びの提案を「関係作り」などと思い、うまくプロセスに乗せていくことで、メンバーなりの関係作りや自発性がより促進されるという体験ができました。そして、この時に「このメンバー達にとってのエンカウンターってなんだろう?」という問いが湧き、「EGにおいて本当に大事な核心の部分はなんだろう?」という問題意識が自分自身の中に芽生え始めた一つの体験でした。この体験から、初心者または若手のグループ臨床家なりの課題が連想されます。まず上述したような困難が生じてくる背景として、若手グループ臨床家の世代は、グループ臨床家の先駆者たちの実践や研究の恩恵を受けて「EG技法が確立されてきたものを受け継ぐ世代」ないし「確立されたものを与えられる世代」にあたると考えられます。現在EGにおいては非構成的EGと構成的EGの二つの技法が確立されています。これまで先駆者たちが試行錯誤しながら技法を確立してきたり、

現場に適用させるといった試行錯誤のプロセスを歩んできた努力の蓄積のおかげで、現在のEGの発展と技法の明確化があり、若手のグループ臨床家はその恩恵を受けています。既に先駆者たちの実践や研究を通して創りあげられてきたものが用意されており、それは効率的かつ便利である反面、先駆者が行ってきたような手探りや試行錯誤のプロセスを体験することが乏しくなります。そして、その際に大事にされていた核心の部分や根底の部分などの形になりにくいものは受け継がれにくく、形や方法だけが際立って受け継がれることになりやすと考えられます。つまり、若手のグループ臨床家が「与えられる世代」と考えるならば、同時に「与えられることの弊害」を考えることが必要と思われれます。既に技法が確立されていることは「与えられる世代」にとってわかりやすさと安心感を持ちやすい一方で、既成概念が定着してしまうことによつて、そこから新しいことが生まれにくく、細かな変化に対応するという柔軟性が低くなってしまう作用を及ぼすと考えられます。特に、初心者や経験の少ない者にとつては、不安であり、自信が無かったりするがゆえに技法に頼りたくなってしまうのは当然のことだからです。ここで私の経験から「非構成的EG・構成的EG」などの既成の技法にとらわれて行うことの弊害を挙げてみると

「技法が先走ってしまうことで、実際の目的や中身が問われない」「お決まりの形式があることで、こうならなければならない」とEGの在り方が理想化され、柔軟さや自由さが奪われ、現実のプロセスと乖離してしまう」「変化する参加者やグループの雰囲気や状態などに対し「Here and Now」での柔軟な対応ができにくくなる」「技法にとらわれることによって根底にある基本理念との間に乖離が起こる」などのことが生じる危険性が挙げられます。

私自身、上述したような弊害を克服するためにグループの基本的な視点を改めて見つめ直し、その点を重要視して実践や研究に取り組んできました。この課題を克服していく過程において村山正治先生と、特に学校現場を中心としたEGにおいて、一緒に仕事をさせていただく機会が持てたことが幸運でした。村山先生にこのテーマについて丁寧に一緒に考えていただき、さらに実践を通じて村山先生から感覚的・体験的に色々と克服できるヒントを感じ、学ぶことができました。例えば村山先生は根底の部分でメンバーの力を自然に信じ、尊重されていることや、起こっていることに対し、常に新鮮に感じておられるのが場面場面で感じることができました。また相手や状況に応じた場面構成や環境調整を大事にされており、場の雰囲気作りに安心感が

あるなど、根底の言語化できない部分を実際のEGでの先生の在り方を通して非言語的に伝えていただきました。その中で技法はこのような根底にあることを表現するための一つのオプションにすぎないことを私自身、体験的に理解できた気がします。私自身、このような根底の部分を感じ取れるようになり、それを大事にできるようになってからは随分とグループに対する在り方や考え方、また実施するグループ自体が柔らかく自由になつてきたように思います。研究においても「対象の幅が広がることやメンバーへのフィット、実践での柔軟さや自由さに寄与できる」点で、この根底の部分を言語化することに重要性を感じ、私なりに言語化することを努めてきました（鎌田、二〇〇三）。

ここまでのことをまとめると、若手のグループ臨床家の世代は技法が確立されてきたがゆえにやり方というものがはっきりしている一方で、技法の根底にある肝心なものが見えにくくなるため、今度は逆に根底の部分に戻り、そこを再度明確化して取り組むことが重要だと考えられます。また技法を学ぶことと同時に体験を通じて技法の根底に流れているような基本理念を理解したり、グループでの在り方や根底での大事な部分を実践の中で、感覚的に捉えられるような体験ができることが重要であると考えられます。これらの感覚

や基本理念を基盤に持つことによって、やり方はメンバーや状況に応じて柔軟に自由に変えていけると思います。今後、様々な分野への展開に向け、臨床家が現場やメンバーの変化に沿って柔軟にやり方を変えていけることによって、現場に応じたEGの提供ができると考えられるため、上述してきたことがEGの新しい展開への「種」となると考えています。やや抽象的になりましたが、私の体験を踏まえてEGの新しい展開のための「種」として挙げさせていただきました。

引用文献

鎌田道彦（二〇〇三）「PCA Group の基本的視点の提案とその展開——学校現場における事例研究による検討——」学術博士学位論文（東亜大学大学院）

かまだみちひこ

●東亜大学大学院総合学術研究科臨床心理相談研究センター

ENCOUNTER

出会いの広場

主要記事目次

No. 1 (一九八五、六)

- カッコウはフィリピン海を渡る 木村 易
- 特集・清里プログラムをふりかえる
渡辺 忠、山崎恭子、高松 里
- 研究レポート・人間関係研究会のエンカウンター・グループ 島瀬直子
- 心に残ることば「個性への内なる旅」
辰巳和雄
- 本の紹介 野島一彦

No. 2 (一九八五、十二)

- 落葉のころ 永原伸彦
- エンカウンターとのであい 村山 了
- 学会だより 島瀬直子
- 海外だより 村山正治
- 本の紹介 小柳晴生、島瀬 稔、永原伸彦

No. 3 (一九八六、六)

- 私のファシリテーター論 永原伸彦
- 研究ノート・エンカウンター・グループにおけるコ・ファシリテーター関係の問題
林もも子
- 出会い百選① 島瀬直子
- メッセージ・私の声
中内孝枝、海老沢幸子、鏡原利彰
- コミュニティ・グループへの挑戦
島瀬 稔
- 海外情報・「Person-Centered Review」誌誕生 村山正治
- ☆編集委員：島瀬 稔、永原伸彦、小柳晴生

No. 4 (一九八六、十二)

- 華厳経の一節に見る葛藤の克服過程とカウンセリング 大須賀発蔵
- 研究ノート・エンカウンター・グループにおけるリサーチのこれから 申 栄治
- 出会い百選② 島瀬直子
- メッセージ・私の声
広瀬寛子、磯部 隆、中西恵理、末武康弘
- ファミリー・グループのこと 島瀬 稔
- 心・身体から気功・中医学へ 内藤康裕
- 海外情報・ADPCA第一回大会 増田 實
- ☆編集委員：谷口正己、木村 易、小柳晴生

No. 5 (一九八七、七)

- カール・ロジャーズ追悼号
- 追悼集の序に 中川紀子
- カール・ロジャーズの死
ナタリー・ロジャーズ
- 別れの手紙 ナタリー・ロジャーズ
- カール・ロジャーズの人と業績 島瀬 稔
- 第一部 特別寄稿
「カール・ロジャーズの死を悼む」
佐治守夫、都留春夫、友田不二男、伊藤 博、柘植明子
- 第二部 写真構成
「ありし日のカール・ロジャーズ」
- カール・ロジャーズとともに——一九八三年五月PCAワークショップの思い出——
渡辺 忠
- カールの日本散策スナップ 島瀬直子
- 第三部 「カール・ロジャーズの思い出」
大須賀発蔵、村山正治、多田治夫、東山紘久、小野 修、木村 易、見藤隆子、関 丕、増田 實、大須賀克己
- 第四部 「カール・ロジャーズと私」
野島一彦、見澤めぐみ、深本春夫、伊藤義美、永原伸彦、保坂 亨、柳沢 裕、穂積 清美、小柳晴生
- ☆編集委員：島瀬 稔、谷口正己、小柳晴生

No. 6 (一九八七、十二)

- 続・華厳経の一節に見る葛藤の克服過程と

カウンセリング 大須賀発蔵

●研究ノート・海外におけるパーソン・セン
タード・アプローチの研究動向 安部恒久

●Yさんへの手紙 木村 易

●出会い百選③ 畠瀬直子

●メッセージ・私の声

岸田 博、亀崎路子、桑島徳信、鶴山洋子、

平山陽示、梶 由美、新免彰之

●ジェンドリンにふれてみて考えたこと

●ゼミナール「出会いについて」 末武康弘

●家族療法について 八尾芳樹 小島新平

●下迫和子さんのこと

村山正治、大田陽茂、木村 易

●第六回日本人間性心理学会参加記

小柳晴生

●書評 村上昭史

☆編集委員：永原伸彦、小柳晴生

Na 7 (一九八八、七)

●時間を考える① 小野 修

●訪問インタビュー「石原文里氏」

見藤隆子

●研究ノート・看護における集会的グループ
経験の教育機能 広瀬寛子

●出会い百選④ 畠瀬直子

●メッセージ・私の声

佐野紀子、(匿名希望)、阿野和子、菅野喜

一

●ナタリー・ロジャーズの表現的療法

穂積清美

●「クライエント中心療法」を読んで

山田敬子

●「氣功法」とカウンセリング 大須賀克己

☆編集委員：木村 易、早川千恵子、小柳晴
生

Na 8 (一九八九、一)

●「リーダーシップの分散」とファシリテ
ーター 下田節夫

●アサーショントレーニングが目ざしている
こと 平木典子

●特集・研究ノート 若手「グループ臨床家」
の直面している諸問題

高松 里、広瀬寛子、林もも子、巖岩秀章、

小林佳子、申 栄治、鈴木奈保子、山田俊

介

●出会い百選⑤ 畠瀬直子

●メッセージ・私の声

大久保俊夫、吉野克行、野口新子、稲野辺

正男、内藤康裕、伊藤裕子、秋山恵子・坂

田裕子・島村奈都海・三谷裕美

●日本グループ紀行・東海地方 木村 易、

北海道 滝沢広忠

●対談「わたしたち夫婦にとってのエンカウ
ンター・グループ」 小柳晴生、小柳欣子

●来談者中心療法および体験過程療法に關す
る国際学会体験記 伊藤研一

●最近のエンカウンター・グループをめぐる
動向 野島一彦

●書評 畠瀬直子

●編集委員：穂積清美、野島一彦、小柳晴生

☆編集委員：穂積清美、野島一彦、小柳晴生

Na 9 (一九八九、七)

●時間を考える② 小野 修

●小学校における構成的グループ・エンカウ
ンター 村久保雅孝

●研究ノート・我々のファシリテーターレス
・エンカウンター・グループの歩み 尾川

文一、飯島修治

●出会い百選⑥ 畠瀬直子

●メッセージ・私の声

●奥田浩二、高松真理、細川順子、小林昇治、

田村 正

●書評 末武康弘

●日本グループ紀行・広島県 鈴木聖幸、関

東地方の学生グループ 林もも子・保坂

亨

☆編集委員：木村 易、永原伸彦、小柳晴生

Na 10 (一九九〇、一)

●特集・教育とエンカウンター・グループ

●教師教育とエンカウンター・グループ

野島一彦

●養護教諭とエンカウンター・グループ

永原伸彦

●看護教育におけるエンカウンター・グループの現状と問題点 鈴木正子

●大学生とエンカウンター・グループ

斎藤憲司、下山晴彦

●大学生にとつてのエンカウンター・グループ経験 山田俊介

●高校生のためのグループ合宿 関 丕

●ゲシュタルト・セラピーの訓練を受けに
いつていた時の話① 福井康之

●出会い百選⑦ 畠瀬直子

●メッセージ・私の声

水田 勲、中坪千夏子、小泉周二、藤崎多佳代

●時間を考える③ 小野 修

●日本グループ紀行・北部九州 高松 里、

香川県 瀬島俊秋

☆編集委員：木村 易、野島一彦、小柳晴生

Na 11 (一九九〇、七)

●特集・私のエンカウンター・グループ観と
ファシリテーション

●私の体験的エンカウンター・グループ観 鈴木正子

●構成的エンカウンター・グループの実際

問題 矢幡 洋

●あたたかいグループへのファシリテーター

シヨン 岩村 聡

●ゲシュタルト・セラピーの訓練を受けに
行つた時の話② 福井康之

●出会い百選⑧ 畠瀬直子

●メッセージ・私の声

園田雅代・林もも子・中釜洋子・保坂一己、日下正幸、北山貴子、榛沢誠志

●「夢」を巡り歩いて 葛西俊治

●日本グループ紀行・岡山・島根・鳥取・山口県 鈴木聖幸

☆編集委員：中川紀子、永原伸彦、小柳晴生

Na 12 (一九九一、一)

●人間関係研究会二十周年記念・特集号

●特別寄稿 自由の道 アンドレ・オウ

●人間関係研究会二十年の歩みと課題

畠瀬 稔

●私たちの問いなおしと展望 エンカウンター・グループ・フォーラムを終えて 増田 實

●研究ノート 現代におけるエンカウンター・グループの社会的意義 小柳晴生

●出会い百選⑨ 畠瀬直子

●ゲシュタルト・セラピーの訓練を受けに
いつていた時の話③ 福井康之

●「夢」を巡り歩いて② 葛西俊治

●20周年記念・メッセージ・スタッフの声

幸野美雪／渡辺 忠／大須賀克己／増田

實／見藤隆子／早川千恵子／穂積清美／野島一彦

☆編集委員：増田 實、永原伸彦、小柳晴生

Na 13 (一九九一、七)

●特集・中堅グループ臨床家の実際

●表現療法とエンカウンター・グループに
関する覚書 矢幡 洋

●アルコール専門外来から 岸川裕之

●我が国におけるカウンセリング・心理療
法の発展 伊藤義美

●研究ノート・大学生にとつてのグループ・
アプローチ 池内 香

●出会い百選⑩ 畠瀬直子

●メッセージ・私の声 坂野剛崇、高松 里、

門田路子、水田 勲、山本房子

●嵐のエンカウンター・グループ①

☆編集委員：野島一彦、伊藤義美、小柳晴生 団 士郎

Na 14 (一九九二、一)

●特集・看護とエンカウンター・グループ

●特集にあたって 見藤隆子

●グループ体験からの学び 小野ツルコ

●エンカウンター・グループとの出会い 広瀬寛子

●看護婦の卵たちと 小沼京子

●看護学生のエンカウンター・グループ事

例 野島一彦

●看護と私 新田麗子

●エンカウンター体験とその後 神谷友子

●私にとつてのグループ体験 高橋千恵

●私の中の「看護とエンカウンター・グループ」 永原伸彦

●研究ノート・エンカウンター・グループにおけるコ・ファシリテーター関係の葛藤の対処について 林もも子

●出会い百選⑪ 畠瀬直子

●楽しみながら成長の跡をたどれる個人通信 鈴木聖幸

●嵐のエンカウンター・グループ② 団 士郎

●書評 木村 易

☆編集委員：見藤隆子、小柳晴生

№15（一九九二、九）

●特集・わが国における来談者中心療法の発展と評価

●来談者中心療法の発展と評価 畠瀬直子

●私にとつてのロジャーズ 野島一彦

●私の中の来談者中心療法 小柳晴生

●PCAワークシヨップ⁸³ 伊藤義美

●ボディ・ワークが自己身体イメージに及ぼす影響 矢幡 洋

●出会い百選⑫ 畠瀬直子

●海外情報・ITPでの一学期 高尾 浩

●嵐のエンカウンター・グループ③

団 士郎

●書評 鈴木正子

☆編集委員：木村 易、小柳晴生

№16（一九九三、三）

●グループ・アプローチにおける日常性と非日常性

●日本心理臨床学会第十回大会自主シンポジウム報告

●企画の趣旨 伊藤義美

●シェアード・リーダーシップの実現

●日常とグループの価値葛藤 新田泰生

●「三・三・一方式」の観点から

●指定討論者のコメント 土川隆史

●エンカウンター・グループによる世界平和への貢献の可能性 巖岩秀章

●研究ノート・青年期と成長体験

石井久美子

●出会い百選⑬ 畠瀬直子

●メッセージ・私の声

●エンカウンター・グループでは何が起るのか① 福井康之

●購読者アンケート結果のお知らせ

小柳晴生

☆編集委員：伊藤義美、増田 實、小柳晴生

№17（一九九三、十二）

●特集・パースン・センタード・アプローチの各国の動向

●社会的葛藤の解決

●嵐をこえ、芽ぶき始めたベトナムのPCA

A トティ・アン

●アメリカのエンカウンター・グループ 伊藤義美

●日本人間性心理学会第十一回大会自主シンポジウム報告 企画の趣旨

●増田 實・野島一彦・穂積清美

●第二回来談者中心及び体験過程療法国際会議に参加して 村山正治

●PCAフォーラム報告 畠瀬直子

●わが国のPCAの動向 高松 里

●フォーカシングと体験過程療法の観点から 田村隆一

●指定討論者のコメント 倉戸ヨシヤ

●メッセージ・私の声 土江正司、阿野和子

●エンカウンター・グループでは何が起るのか② 福井康之

●書評 岩村 聡

☆編集委員：畠瀬直子、村山正治、小柳晴生

№18 (一九九四、三)

- 「クライエントセンタード」としてのアイデンティティ 諸富祥彦
- 企業とエンカウンター・グループ「YBS物語」 安井正明

- 「自己開発セミナー」と人間性の喪失

流沢 悟

- 何もしないことの大切さ 内藤康裕

- 特集・エンカウンター・グループ「心のリゾートinハワイ」

渡辺 忠、穂積清美、増田 實、繁田千恵、

北野市子、小林 彰、佐藤純子

- 出会い百選⑭ 畠瀬直子

- エンカウンター・グループでは何が起るのか③ 福井康之

☆編集委員：渡辺 忠、佐藤純子、小柳晴生

№19 (一九九四、九)

- 特集・エンカウンター・グループのファシリテーター養成・研修

日本人間性心理学会第十二回大会(非公式)自主シンポジウム報告

●企画の趣旨 野島一彦、増田 實

●ファシリテーター研修グループの新しい

試み 畠瀬 稔

●福岡の現状と新しい試み 村山尚子

●ファシリテーション体制とファシリテーター実習 岩村 聡

●清里プログラムでの試み 野島一彦

●自分の体験から 畠瀬寛子

●自分の体験にもとづいて 林もも子

●指定討論者のコメント

大須賀克己、福井康之

●ゲシュタルト療法の現代的意義 矢幡 洋

●研究ノート・高校生に対するグループ・アプローチの実践的研究 白井聖子

●ファシリテーションについて 中田行重

●エンカウンター・グループ・フォーカシング

グそしてヨーガ 土江正司

●エンカウンター・グループでは何が起るのか④ 福井康之

☆編集委員：増田 實、野島一彦、小柳晴生

№20 (一九九五、八)

- 特集・企業と組織におけるグループ・アプローチをめぐる

●企業におけるグループ・アプローチの可能性を求めて 渡辺 忠

●企業エンカウンター・グループにおけるファシリテーターの態度 大須賀克己

●産業と教育におけるグループ・プロセスの違い 巖岩秀章

●企業と働く人の健全な共存を求めて

佐藤純子

●出会い百選⑮ 畠瀬直子

●言語・国家・世代・東西 諸富祥彦

●ヨーロッパにおけるエンカウンター・グループに参加して 畠瀬 稔

●メッセージ・私の声

原田彌生、真澄 寛、三浦恵子

●どこかおかしい臨床家の身体 内藤康裕

●エンカウンター・グループでは何が起るのか⑤ 福井康之

☆編集委員：渡辺 忠、佐藤純子、小柳晴生

№21 (一九九六、六)

●特集・エンカウンター・グループの未来

●企画の趣旨 福井康之

●二十一世紀へ向けての我々の課題

畠瀬 稔

●私のエンカウンター・グループ体験から

増田 實

●実践、研究、ファシリテーター養成をめぐる 野島一彦

●医療領域へのEGGの拡大を目指して

畠瀬寛子

●地域支援システムとしてのエンカウンター・グループ 高松 里

●指定討論者として語ったこと、語りたかったこと 木村 易

●特集二・グループ・アプローチの危険・副作用とそれへの対応

●企画の趣旨 野島一彦

●Tグループの場合 山口真人

● ベーシック・エンカウンター・グループ
の場合 小柳晴生

● 構成的グループ・エンカウンターの場合
村久保雅孝

● ゲシュタルト・グループの場合
日高正宏

● 集団精神療法の場合 中山 巖

● 指定討論者のコメント 岩村 聡

● ウォーム・スプリングスの浅い春に

● エンカウンター・グループでは何が起る
のか⑥ 福井康之

☆編集委員：福井康之、野島一彦、小柳晴生

Na 22 (一九九八、九)

高松 里 責任編集

● 特集・現代社会におけるセルフヘルプ・グ
ループの意義と使命

● それぞれのセルフヘルプ・グループ
伊藤伸二

● 女性ライフサイクル研究会 (FLC) の
活動について 西 順子

● セルフヘルプ・グループに対する社会的
支援のあり方について 松田博幸

● 福岡 SA (sexual abuse) 研究会の活動
高松 里

● アフリカ心理学の発展について

T. L. ホルドストック、(訳) 畠瀬直子

● 研究ノート・私の青年期とエンカウンター
・グループ 池内 香

● Sさんへの手紙 木村 易

● 自己受容と身体感覚 内藤康裕

● 連載 エンカウンター・グループでは何が
起るのか⑦ 福井康之

Na 23 (二〇〇〇、三)

伊藤義美 責任編集

● 特集・私のフォーカシングの実践経験と活
用

● 我が国のフォーカシングの発展の歴史を
映して 伊藤義美

● フォーカシングとグループの統合の研究
増田 實

● からだへのアプローチを基盤にした
フォーカシングの展開 井上澄子

● フォーカシングとゲシュタルト療法の統
合を志向して 木村 易

● フォーカシングのティーチング法として
の複数フォーカシング法の実践
伊藤義美

● 特集・心理療法における人間性をめぐって
● 人間性を問うこと―企画の趣旨
伊藤義美

● ゲシュタルト療法の立場からみた人間性
木村 易

● 精神分析的心理療法の立場からみた人間
性 土川隆史

● 身体心理学の立場からみた人間性
原口芳明

● パーソセンタードアプローチ/体験過
程療法の立場からみた人間性 伊藤義美

● 研究ノート・エンカウンター・グループで
体験した沈黙を通しての「沈黙」について
の考察 宮澤正江

● メッセージ・私の声
法眼裕子、尾崎聡子、中原 唯

● 特集・中川紀子さんを偲んで

Na 24 (二〇〇一、三)

永原伸彦・渡辺 忠 責任編集

● 特集・設立三十周年記念フォーラム「人と
人とのつながりを求めて―EGの可能性を
問う―

● 企画の趣旨 渡辺 忠

● 開会の辞 大須賀克己

● 日本版ヴィデオ「鋼鉄のシャッター」上
映と解説 畠瀬 稔

● エンカウンターグループを東洋の風土の
もとで 大須賀発蔵

● がん医療とエンカウンター・グループ
ネットワークによるシステム変化の
促進 村山正治

● フォーラムに参加して 平山栄治

●特集・三十周年記念清里ワークショップ報告

●人と人との新しい出会いを求めて

伊藤義美

●コミュニティ・ミーティングの可能性

古谷公彦

●清里プログラム・一九九九、二〇〇〇に参加して 小泉周二

●清里ワークショップ 木村幸次

●三十周年記念メッセージ・私の声

高橋紀恵子、小泉周二、大歳哲司、鈴木正子、南河明文、西川和夫、幸野美雪、末包あけみ、進藤晃、横山体真、後藤忠哉、山本房子、森尾邦江、池田久剛、真澄寛

●人間関係研究会三十年の歩み(年表)

№25 (二〇〇三、十一)

岩村 聡・野島一彦 責任編集

●特集1・ENCOUNTER 出合いの広場二十五巻の軌跡

●特集の趣旨 岩村 聡

●「ENCOUNTER 出合いの広場」の十八年間と今後への期待 畠瀬 稔

●「ENCOUNTER 出合いの広場」十五年の軌跡と発行に携わった私 小柳晴生

●「エンカウンター・グループのホリスティック構造」と私 大須賀克己

●「ENCOUNTER 出合いの広場」への思い 福井康之

●日本グループ紀行・あの頃 '89〜'90

鈴木聖幸

●エンカウンター・グループ・ムーブメントの今後の方向 岩村 聡

●本のこと、思い出す人のこと 木村 易

●特集2・グループ・アプローチ、新しい展開の芽

●特集にあたって 野島一彦

●師匠から学ぶ 坂中正義

●グループに出会って、今を楽しんでいる

金 奎卓

●小学校におけるベーシック・エンカウンター・グループの適用 森 利伸

●思春期・青年期のエンカウンター・グループに私が思うこと 本山智敬

●私とグループの関わりを振り返って

妹尾奈津子

●エンカウンター・グループと私

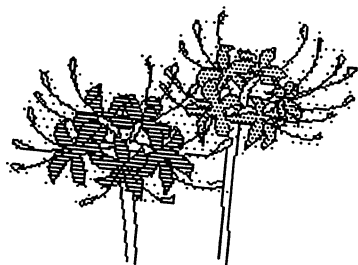
安田一聡

●病院でグループアプローチを行って行く上で思ったこと 常田修一

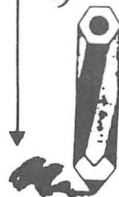
●私の考えるエンカウンター・グループの新しい展開のための「種」 鎌田道彦

●ENCOUNTER 出合いの広場 主要記事目次(岩村)

(岩村)



編集だより



■25号をお届けします。

もともと、二〇〇一年三月発行の24号のあとを受けて、その年の十二月に発行予定でした。大変遅くなって申し訳ありませんでした。

この25号は、「最終号」になるかも知れないという心づもりで編集しました。が、その後、この雑誌を休・廃刊することも確定していないし、かといって次の号の編集計画なども始まっていない状態だと思っています。(岩村)

■今回の特集一はこれまでの総括、特集二はこれからの新たな展望といった形になりました。これまで培われてきた大きな根を土台にして、若い芽が21世紀をすくすく育っていったほしいなと思います。(野島)

■岩村は、この間、広島大学を定年退職し、新しい生活が始まっています。「退職後は、晴耕雨読でのんびり」などと思っていました……。生活の切り替えは結

構大変でした。二年目の今年度は四つの大学と看護学校と、高等学校と中学校と、マイオフィスを、非常勤講師やカウンセラーの生活をしています。「グループ」にも、以前とはほぼ同じようにかかわり続けています。大学院の「グループ・アプローチ」の授業も、もう一校増えたりしました。

みなさんも、どうぞお元気で。

■25号編集責任・岩村 聡・野島一彦

■購読申し込み方法

購読料は、二号分で一五〇〇円(送料込み)です。「何号から希望」と明記の上、郵便振替にて編集事務局宛にお送りください。郵便局備付の用紙を用いる場合は、本欄末尾の振替番号、加入者名をご記入ください。

■バックナンバーの購入方法

No 6〜24は残部があります。ご希望の方は、各号の合計代金に郵送料を加えた金額を、郵便振替にて編集事務局宛お送りください。

郵送料は、一冊まで250円。三冊まで350円、五冊まで400円、八冊まで500円です。

■購読申し込み・問い合わせ先…〒812-1
福岡市東区箱崎6-19-1 「人間
関係研究会編集事務局」九州大学発達臨
床心理センター 野島一彦 ☎092-
642-3154

■郵便振替
振替番号…01680-3-36521
加入者名…人間関係研究会編集事務局



ENCOUNTER

出会いの広場 No.25



発行所 人間関係研究会 2003年11月30日
〒336-0027 さいたま市沼影2-3-1 (渡辺方)
編集事務局 〒812-8581 福岡市東区箱崎6-19-1
『人間関係研究会編集事務局』
九州大学発達臨床心理センター 野島一彦
印刷 (株)美巧社 高松市多賀町1-8-10

ENCOUNTER

No25 2003.11

Satoshi Iwamura, Kazuhiko Nojima : Editors

CONTENTS

Special Series 1 : The Change of the "ENCOUNTER" in 25 Volumes

The Tenor of this Special Series	Satoshi Iwamura
In Retrospect and the Foresight; 18 Years of this Journal "the Encounter"	Minoru Hatase
The Change of the "Encounter" in the first 15 Years and Me as an Editor	Haruo Oyanagi
The Holistic Structure of the Encounter Group and Me	Katsumi Ohsuga
Some Memories and Worries about Publication of this Journal	Yasuyuki Fukui
Group Journy around Japan — Reminiscences '89~90—	Masayuki Suzuki
The Direction of the Encounter Group Movement	Satoshi Iwamura

A Book and the People in my Childhood Memories	Yasushi Kimura
--	----------------

Special Series 2 : The New Trends of Person-Centered Group Approach

Introduction	Kazuhiko Nojima
What I learned from the Teachers	Masayoshi Sakanaka
Having Fun now after I joined the Encounter Group	Gyutag Kim
Application of the Basic Encounter Group for Primary Schools	Toshinobu Mori
My Thought for an Encounter Group of Adolescent	Tomonori Motoyama
Thinking back on the Relations between Group and Myself	Natsuko Senoo
Encounter Group and Me	Kazutoshi Yasuda
What I find out from some Group Psychotherapies — The Power of Users —	Shuichi Tokida
"Seeds" for the new Development of the Encounter Groups from my Idea	Michihiko Kamada

Major Contents of the "ENCOUNTER" in 25 Volumes

Information

Edited and Published by

JAPANESE SOCIETY FOR THE PERSON-CENTERED APPROACHES

Central Office : c/o Tadashi Watanabe, 2-3-1 Numakage, Saitama City,
336-0027 Japan

Editorial Office : c/o Kazuhiko Nojima, Center for Clinical Psychology
and Human Development, Kyushu University, 6-19-1 Hakozaki, Higasi-ku,
Fukuoka City, 812-8581 Japan
